

垂水遺跡発掘調査報告書Ⅰ

－ 垂水遺跡第24次発掘調査 －

平成17（2005）年3月

吹田市教育委員会

序 文

垂水遺跡は、弥生時代の高地性集落として広く知られている遺跡です。その存在は、昭和初期の円山町一帯の造成時に弥生土器や石器などが採集されたことから知られており、その後の採集活動や発掘調査により、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡であることがわかっています。

今回、報告致します垂水遺跡第24次発掘調査では、弥生時代から古墳時代にかけての資料を数多く確認することができました。中でも注目されるのが、古墳時代の溶解途中の鏡片を検出したことです。このような状態での鏡の出土は、全国的に見ても例がなく、これは吹田市ばかりでなく、日本の古墳時代研究に一石を投ずる資料といえます。

本書では、この鏡片をはじめとする発掘調査の成果を報告しておりますが、これにより市民の皆様が地域の歴史を知っていただく機会となれば幸いです。

平成17（2005）年3月

吹田市教育委員会

教育長 椿 原 正 道

例 言

1. 本書は、平成10(1998)年度に吹田市垂水町1丁目731-28、-29において共同住宅建築に伴う事前調査として実施した、垂水遺跡第24次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本報告書の執筆は堀口健二・西本安秀・田中充徳が行なった。執筆分担は第IV章(5)を田中・堀口、第IV章(4)を西本・田中、その他を堀口が行なった。編集作業は堀口が行なった。
4. 本文中の遺物番号は、遺物観察表・挿図・写真図版とも統一した。遺物の縮尺は、土器・木製品は1:4、土器拓本は1:2、銅製品・石器は3:4をそれぞれ基本とした。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.(東京湾標準潮位)を示す。
6. 発掘調査に要した経費は、事業者である東京生命保険相互会社の負担による。発掘調査においては、事業者をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して感謝いたします。
7. 発掘調査および報告書作製にあたっては、次の各位よりご教示、ご協力をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略、氏名・組織名とも五十音順、職名等は調査当時のもの)
北野重(柏原市教育委員会)、杉本隆史(関西大学工学部教授)、福永伸哉(大阪大学文学部助教授)、森田稔(文化庁文化財保護部美術工芸課)、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、香川県歴史博物館、(財)徳島県埋蔵文化財センター
8. 発掘調査および資料の整理には、以下の諸氏の参加を得た。
大城道則、嘉幡茂、花崎晶子、赤塚亨、小田尚幸、海邊博史、佐藤健太郎、秋山芳恵、大西文代、小川里美、木船安紀子、桑原暢子、小久保瞳、高井明美、長谷部裕子、林裕子、日置智、湯浅直子

目 次

第 I 章 位置と環境	1
(1) 地理・歴史的環境～弥生・古墳時代の集落遺跡について	1
(2) 垂水遺跡の既往調査	2
第 II 章 調査の経過と方法	3
第 III 章 調査の成果	5
(1) 基本層序	5
(2) 検出遺構と遺構出土遺物	7
(3) 遺物包含層出土の遺物	15
第 IV 章 まとめ	26
(1) 検出遺構について	26
(2) 外来系土器について	30
(3) 内面水銀朱付着土器について	32
(4) 破碎された銅鏡について	32
(5) 総括	34
遺物観察表	37

挿 図 目 次

第 1 図 周辺の遺跡分布図	2	第 14 図 第 8 層出土遺物(3)	19
第 2 図 垂水遺跡発掘調査地周辺図	4	第 15 図 第 9 層出土遺物	20
第 3 図 調査区配置図	4	第 16 図 第 5 面土器群	21
第 4 図 北壁土層断面図	6	第 17 図 第 6 面土器群(1)	22
第 5 図 遺構平面図(1)	8	第 18 図 第 6 面土器群(2)	23
第 6 図 西壁断面に現れた噴砂	10	第 19 図 第 10～13 層出土遺物	24
第 7 図 第 2 面木杭立面図	10	第 20 図 出土層位不明遺物	25
第 8 図 遺構平面図(2)	11	第 21 図 鑄造関連遺物	26
第 9 図 遺構平面図(3)	13	第 22 図 銅製品実測図	27
第 10 図 遺構出土遺物	14	第 23 図 弥生土器・古式土師器拓本	28
第 11 図 第 2～7 層出土遺物	16	第 24 図 石器実測図	29
第 12 図 第 8 層出土遺物(1)	17	第 25 図 仿製鏡復元図	33
第 13 図 第 8 層出土遺物(2)	18		

写真図版目次

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 図版 1 | 第 1 面遺構 | 図版 13 | 弥生土器(2) |
| 図版 2 | 第 2 面遺構 | 図版 14 | 弥生土器・古式土師器(1) |
| 図版 3 | 第 3 面遺構 | 図版 15 | 古式土師器(2) |
| 図版 4 | 第 4 面遺構 | 図版 16 | 古式土師器(3) |
| 図版 5 | 第 5・6 面遺構 | 図版 17 | 古式土師器(4) |
| 図版 6 | 第 5・6 面遺物出土状況(1) | 図版 18 | 古式土師器(5) |
| 図版 7 | 第 5・6 面遺物出土状況(2) | 図版 19 | 古式土師器(6) |
| 図版 8 | グリッド部各遺構面 | 図版 20 | 古式土師器(7) |
| 図版 9 | 土層断面(1) | 図版 21 | 古式土師器(8)・韓式系土器 |
| 図版 10 | 土層断面(2) | 図版 22 | 鑄造関連遺物・青銅器・木器 |
| 図版 11 | 発掘調査風景 | 図版 23 | 平安時代・中世・近世遺物 |
| 図版 12 | 弥生土器(1) | 図版 24 | 石器 |

第 I 章 位置と環境

(1) 地理・歴史的環境～弥生・古墳時代の集落遺跡について

吹田市は大阪府北部に位置し、南は大阪市と隣接し、北は箕面市、東は茨木市、摂津市、西は豊中市と境界を接する。吹田市を地形的に見ると、市域北部は、侵食谷の発達した標高80m以下のなだらかな千里丘陵が占める。南部は主に淀川や神崎川などの河川によって形成された平野が広がり、JR吹田駅付近から南側にかけては、縄文海進時に潮流によって運ばれた砂で形成された吹田砂堆とよばれる微高地がある。平野部については、吹田砂堆を挟んで東側を安威川低地、西側を神崎川低地に分けられる。

吹田市域における弥生・古墳時代の代表的な集落遺跡としては、垂水遺跡、北泉遺跡、垂水南遺跡、蔵人遺跡、榎坂遺跡、五反島遺跡、中ノ坪遺跡、七尾東遺跡、目俣遺跡などが上げられる。

ここで垂水遺跡近辺の遺跡について見ると、北泉遺跡は、垂水遺跡の東約500mにあり、千里丘陵南端付近の平野部に面した急峻な傾斜面に立地する。近年新しく確認された遺跡であり、発掘調査も1件のみであるが、弥生時代前期と弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器などがまとまって出土し、その中でも朱色に彩色を施した弥生時代後期の壺、外来系土器、銅鏃などが特筆される。住居跡などの明確な遺構は確認されておらず、土層断面から、近世の地滑りの痕跡、液状化現象による噴砂などが観察でき、土層自体も上方から滑落したような堆積状況を示していた。このことから集落の本体は、調査地点背後の丘頂部に存在した可能性が高いと考えられる。

垂水南遺跡は、垂水遺跡の南約300mの神崎川低地上に立地する、古墳時代を中心とする集落遺跡である。これまで竪穴式住居、掘立柱建物、矢板の施された水田、鉄器生産関連の焼土坑、河道など、多数の遺構・遺物が発見されている [網干1981]。特に、第48次調査では、鍛冶生産関連遺構と思われる焼土坑、鉾滓などが出土しており、第51次調査では、加熱痕の少ない布留式甕の絵画土器が出土している [吹田市教委1996]。第57次調査では、古墳時代の河道と、それに付随する護岸施設が検出されている。護岸施設は河岸の傾斜面に小枝を敷き詰め、自然木の横木を杭列に固定して護岸を施していた。さらにそれら部材を縛ったと思われる、紐状の桜の皮も同時に出土している。第58次調査では、河道内から初期須恵器・韓式系土器・外来系土器などを含む多量の古墳時代の土器とともに、弥生時代中期後半から後期にかけての弥生土器も出土したことが注目される。これにより垂水南遺跡が弥生時代中期に遡ることが確実となった。

蔵人遺跡と榎坂遺跡は、垂水遺跡の西方約800mの地点にある。蔵人遺跡では、これまで弥生時代後期の土器や古墳時代前・中期の古式土師器や須恵器などの出土が知られていたが、第10次調査において、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器がまとまって出土している。また、榎坂遺跡においても、近年の調査（第2次・第6次）において、弥生時代後期の遺物を含みつつ、古墳時代の遺構・遺物が数多く確認されている。



- | | | | | |
|---------|----------|----------|----------|----------|
| 1. 垂水遺跡 | 3. 榎坂遺跡 | 5. 蔵人遺跡 | 7. 七尾東遺跡 | 9. 中ノ坪遺跡 |
| 2. 北泉遺跡 | 4. 垂水南遺跡 | 6. 五反島遺跡 | 8. 目俵遺跡 | |

第1図 周辺の遺跡分布図 (S=1/40000 上方が北)

五反島遺跡は、垂水遺跡からは南へ約1.6kmの地点とやや離れた地点にあるが、昭和61(1986)年度に実施した調査では、古墳時代・平安時代・中世の河道跡が検出され、河道内より大量の弥生時代・古墳時代の遺物が出土している。現在のところ、集落跡は確認されていないが、吹田市における弥生・古墳時代を考える上で重要な遺跡といえる。

(2) 垂水遺跡の既往調査

垂水遺跡は、吹田市円山町、垂水町1・2丁目にあり、標高55mほどの丘陵部からその南側の平野部にかけて広がっている。垂水遺跡は、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡であるが、なかでも中心となるのが弥生時代の集落跡で、大阪湾周辺の代表的な高地性集落といえる。

垂水遺跡は、昭和初期の住宅造成工事に伴って、垂水神社北東の丘陵上で発見された。その

後も市民等による積極的な資料採集が行なわれ、多くの弥生土器や石器に加え、昭和30年代には、銅鏡の石製鑄型の可能性が考えられる転用砥石が採集されている [増田2004]。もしこれが石製鏡範であれば、近畿地方で確認できる唯一のものである [三船・清水・中井2004]。しかしながら昭和30年代以降は、丘陵の西半部も大きく削平され、遺跡の大半は実態が明らかにされないまま破壊を被ったと考えられる。

垂水遺跡における本格的な発掘調査は、垂水神社の裏山において、昭和48(1973)年から同51(1976)年にかけて、関西大学考古学研究室・吹田市史編さん室が共同で実施した第1～5次調査がある。発掘調査の結果、後期旧石器時代の石器類、弥生時代中～後期の竪穴式住居跡4棟・掘立柱建物跡1棟・焼土坑・甕棺墓、中世墓など、旧石器時代から中世にわたる遺構・遺物が確認された [網干1981]。そして、弥生時代の集落については前期に始まり、後期に盛時をもつと考えられるに至った。

その後も垂水遺跡においては発掘調査が行われ、丘陵裾部における第23次調査では、弥生時代後期後半を主体とする遺物包含層と、加工木材を伴う溝などが確認されている [吹田市教委1998]。また、同じく裾部で実施した第26次調査では、ほぼ完形品の弥生時代前期の壺や中期後半の甕、桃核の入った後期の甕、それに古墳時代前期の土師器などがまとまって出土している。

さらに、丘陵下平野部における発掘調査でも、現地表面より2～3m以上深い地点より、弥生時代の遺構・遺物がみられるようになっており、当該期の集落は丘陵上部だけでなく、丘陵裾部から平野部にかけても展開することが判ってきた。

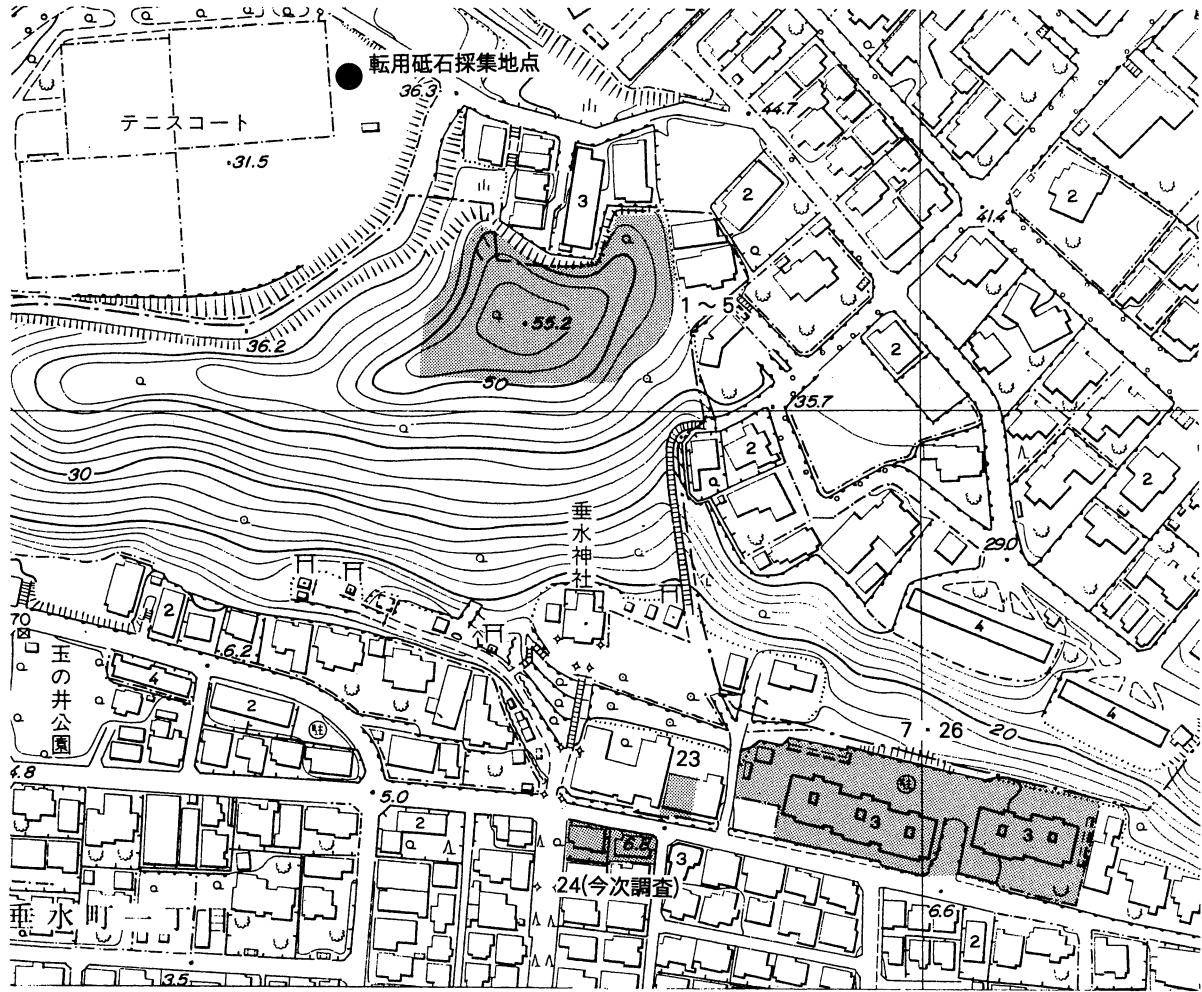
【引用・参考文献】

- ・網干善教編1981 「考古編」『吹田市史』第8巻 吹田市史編さん委員会
- ・吹田市教育委員会1996 「垂水南遺跡の発掘調査」『平成7年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- ・吹田市教育委員会1998 「垂水遺跡の発掘調査」『平成9年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- ・増田真木2004 「垂水遺跡出土鏡範の概要」『鏡範研究』I 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鑄金研究会
- ・三船温尚・清水康二・中井一夫2004 「垂水遺跡採集の石製品について」『鏡範研究』I 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鑄金研究会

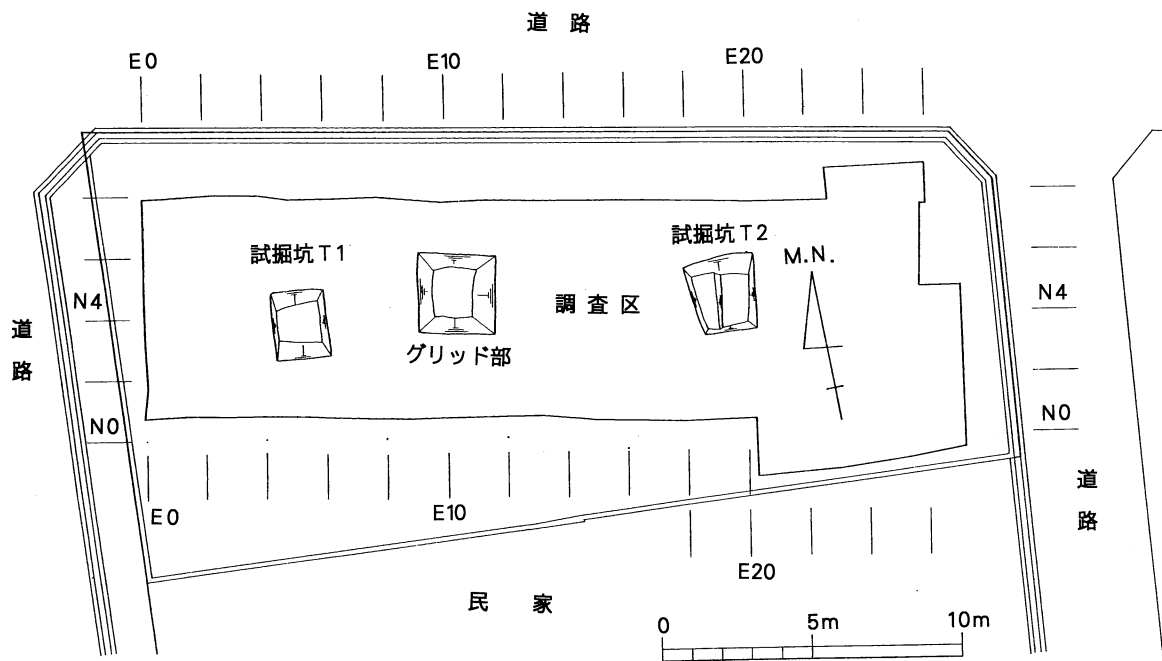
第Ⅱ章 調査の経過と方法

今回の発掘調査は、共同住宅の建築工事に伴う事前調査である。当該工事予定地は垂水遺跡の範囲内に位置することから、先ず平成10(1998)年3月18日に、当該地内に2m四方の試掘坑を2箇所設定して(T1区・T2区)、確認調査を行なった。その結果、複数の遺構面上に溝・落ち込み・土坑などを検出し、弥生時代後期から中世にわたる遺物が出土した。予定される建築工事が着工されると検出した遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行なった結果、建築工事に先立って、拡大調査を実施したものである。

発掘調査は、建築予定建物の基礎構造に合わせ調査区を設定し、平成10(1998)年4月22日よ



第2図 垂水遺跡発掘調査地周辺図：数字は調査次数（S=1/2500 上方が北）



第3図 調査区配置図

り同年6月18日の間に行なった。先ず東西26m×南北7m、深さ2.2m、面積約205m²(突出部を含まず)の調査区を1箇所設定し、さらにその底面中央やや西寄りに2.5m四方、深さ70cmのグリッドを一箇所設定する二段掘りの形で行なった。現代の盛土・攪乱層は重機を使って掘り下げ、さらに下層については人力により注意深く掘削した。そして、各遺構面から遺構を検出し、これらの遺構に伴って弥生時代から江戸時代にわたる各種遺物が出土した。検出した遺構および遺物の出土状況などについては、各時期の遺構面毎に詳細に観察し、写真撮影や図面の作成などによる記録作業を行なった。

第三章 調査の成果

(1) 基本層序

調査地点地表面の標高はT.P.約6.3m前後である。調査区内の堆積層は、概して北東に高く南西に低い傾斜地形を示す堆積構造を呈していた。今次の調査地点は、調査地背後の千里丘陵が平野部に向かう変換点に位置しており、その影響を受けたものと考えられる。

調査区内の地質は、砂礫系の自然堆積層と、黒っぽい色のシルト(泥土)・粘土層からなる土壌化層が交互に堆積していた。特に砂礫層は、一部にシルトを交えて、非常に薄くて細かな堆積を順次繰り返している様子が看取できた。そのため、遺構面との関係を明確にする意味で、隣接しあって類似した地質を「層群」と認識して一まとめにし、整理段階において大きく14層に層序区分した。

地質の注記は整理段階において、土色帖[小山・竹原1987]に準じて土色名を命名し直した。粒径区分はアメリカ法によった。現地表面以下の基本層序は次の通りである。

・北壁断面(第4図、図版9上段、図版10下段)

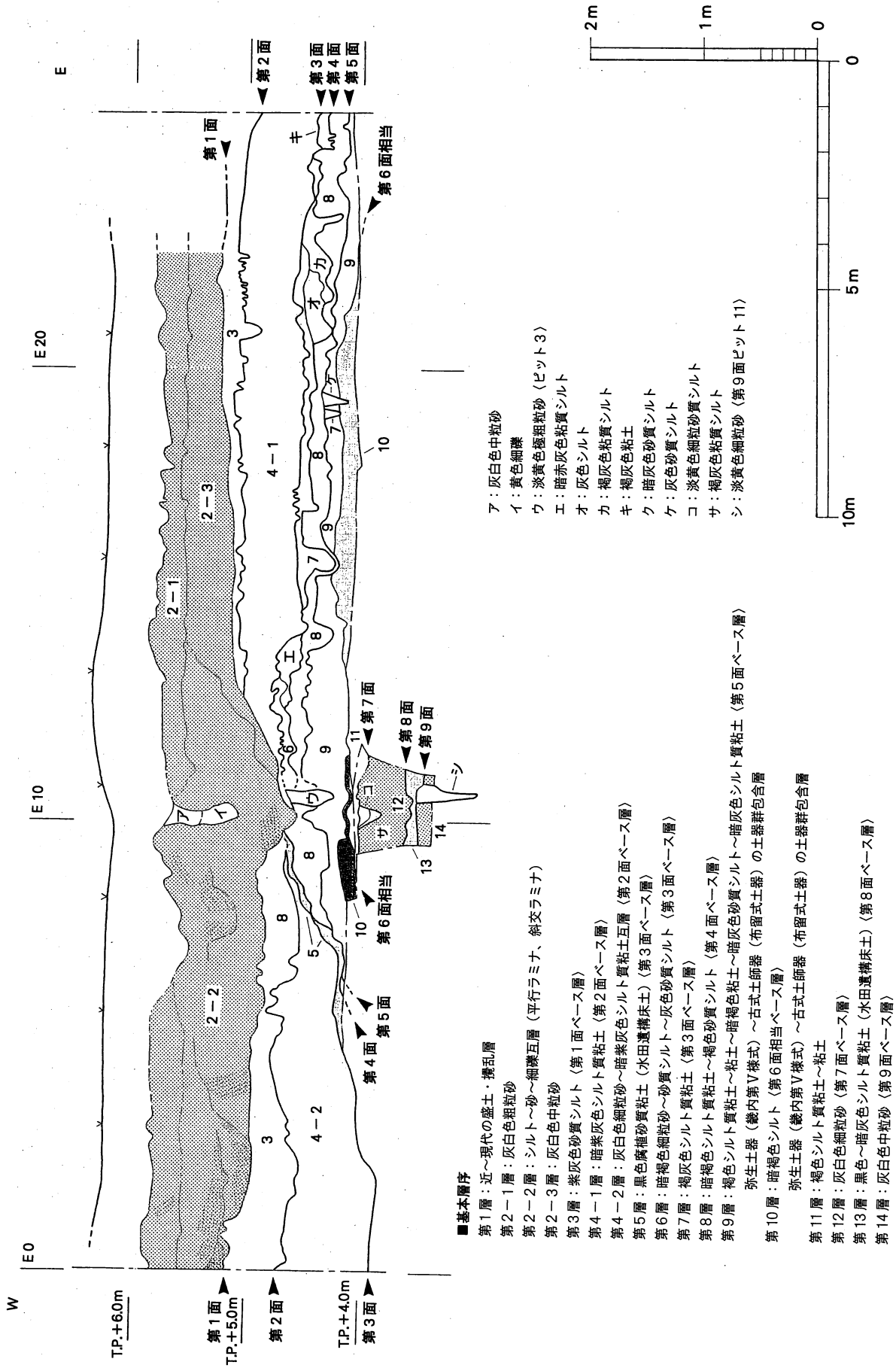
第1層：近代から現代にかけての盛土と攪乱層である。層厚は40～60cm。図化部分では見られないが、西壁断面の一部において、近代以降の旧耕作土(暗青灰色粘質シルト)が部分的に残存する。

第2層：第1面覆土層。ショベルカーを投入して一括して掘削したため、層位的な掘り分けは行っていないが、壁面より不整合面が観察でき、大きく3層に層序区分できる。

第2-1層：灰白色細粒砂。層厚は25～35cm。ほぼ均一な粒子の砂層である。

第2-2層：シルト～砂～細礫互層。層厚は75～90cm。平行ラミナや一部に斜交ラミナなど、水流に起因する堆積構造が観察できる。落ち込みを充填する、河床構造堆積物のような水成堆積層で、侵食と堆積を順次繰り返しながら埋没していった様子が看取できる。調査地が丘麓であることを考えると、埋没河川などは想定しがたく、背後の山側から雨水によって流出した土砂によって、谷地形が埋没したものであろうか。

第2-3層：灰白色中粒砂。層厚は30～40cm。第2-1層に類似する砂層で、谷状地形のベース層である。



■基本層序

- 第1層：近～現代の盛土・攪乱層
- 第2-1層：灰白色粗粒砂
- 第2-2層：シルト～砂～細礫互層（平行ラミナ、斜交ラミナ）
- 第2-3層：灰白色中粒砂
- 第3層：紫灰色砂質シルト（第1面ベース層）
- 第4-1層：暗紫灰色シルト質粘土（第2面ベース層）
- 第4-2層：灰白色細粒砂～暗紫灰色シルト質粘土互層（第2面ベース層）
- 第5層：黒色腐植砂質粘土（水田遺構床土）（第3面ベース層）
- 第6層：暗褐色細粒砂～砂質シルト～灰色砂質シルト（第3面ベース層）
- 第7層：褐灰色シルト質粘土（第3面ベース層）
- 第8層：暗褐色シルト質粘土～褐色砂質シルト（第4面ベース層）
- 第9層：褐色シルト質粘土～粘土～暗褐色粘土～暗灰色砂質シルト～暗灰色シルト質粘土（第5面ベース層）
- 第10層：暗褐色シルト（第6面相当ベース層）
 弥生土器（畿内第V様式）～古式土師器（布留式土器）の土器群包含層
- 第11層：暗褐色シルト（第6面相当ベース層）
 弥生土器（畿内第V様式）～古式土師器（布留式土器）の土器群包含層
- 第12層：灰白色細粒砂（第7面ベース層）
- 第13層：黒色～暗灰色シルト質粘土（水田遺構床土）（第8面ベース層）
- 第14層：灰白色中粒砂（第9面ベース層）

- ア：灰白色中粒砂
- イ：黄色細礫
- ウ：淡黄色極粗粒砂（ピット3）
- エ：暗紫灰色粘質シルト
- オ：灰色シルト
- カ：褐灰色粘質シルト
- キ：褐灰色粘土
- ク：暗褐色細粒砂
- ケ：灰色砂質シルト
- コ：淡黄色細粒砂質シルト
- サ：褐灰色粘質シルト
- シ：淡黄色細粒砂（第9面ピット11）

第4図 北壁土層断面図（V=1/125, H=1/50）

第3層：紫灰色砂質シルト。層厚は20～55cm。第1面のベース層である。

第4層：東側と西側とで大きく地質が変化するが、第1面溝2に分断されており、両層の対応関係は不明である。第2面のベース層である。

第4-1層：暗紫灰色シルト質粘土。層厚は45～60cm。調査区東半部に見られる水平堆積層である。

第4-2層：灰白色細粒砂～暗紫灰色シルト質粘土互層。層厚は最大85cm。第3面区画6埋土に相当する。

第5層：黒色腐植砂質粘土。層厚は6～10cm以上。第3面のベース層で、水田遺構の床土に相当する。

第6層：暗褐色細粒砂～砂質シルト～灰色砂質シルト。層厚は8～16cm。第3面のベース層で、西側に向かって傾斜する。

第7層：褐灰色シルト質粘土。層厚は10cm。第3面のベース層で、西側に向かって傾斜する。

第8層：黒褐色シルト質粘土～褐色砂質シルト。層厚は15～30cm。第4面のベース層である。

第9層：褐色シルト質粘土～暗褐色粘土～暗灰色砂質シルト～暗灰色シルト質粘土へと、微妙に土色や土相が変化する。層厚は10～40cm。第5面のベース層である。主に弥生土器畿内第V様式～布留式土器の土器群包含層を形成する。

第10層：黒褐色シルト。層厚は15～20cm以上。第6面相当のベース層である。上層と同様に、畿内第V様式～布留式土器群の包含層を形成する。

第11層：褐色シルト質粘土～粘土。層厚は最大10cm。第7面の覆土層である。

第12層：灰白色細粒砂。層厚は40～46cm。第7面のベース層である。

第13層：黒色～暗灰色シルト質粘土。層厚は15～18cm。第8面ベース層で、水田遺構の床土に相当する。

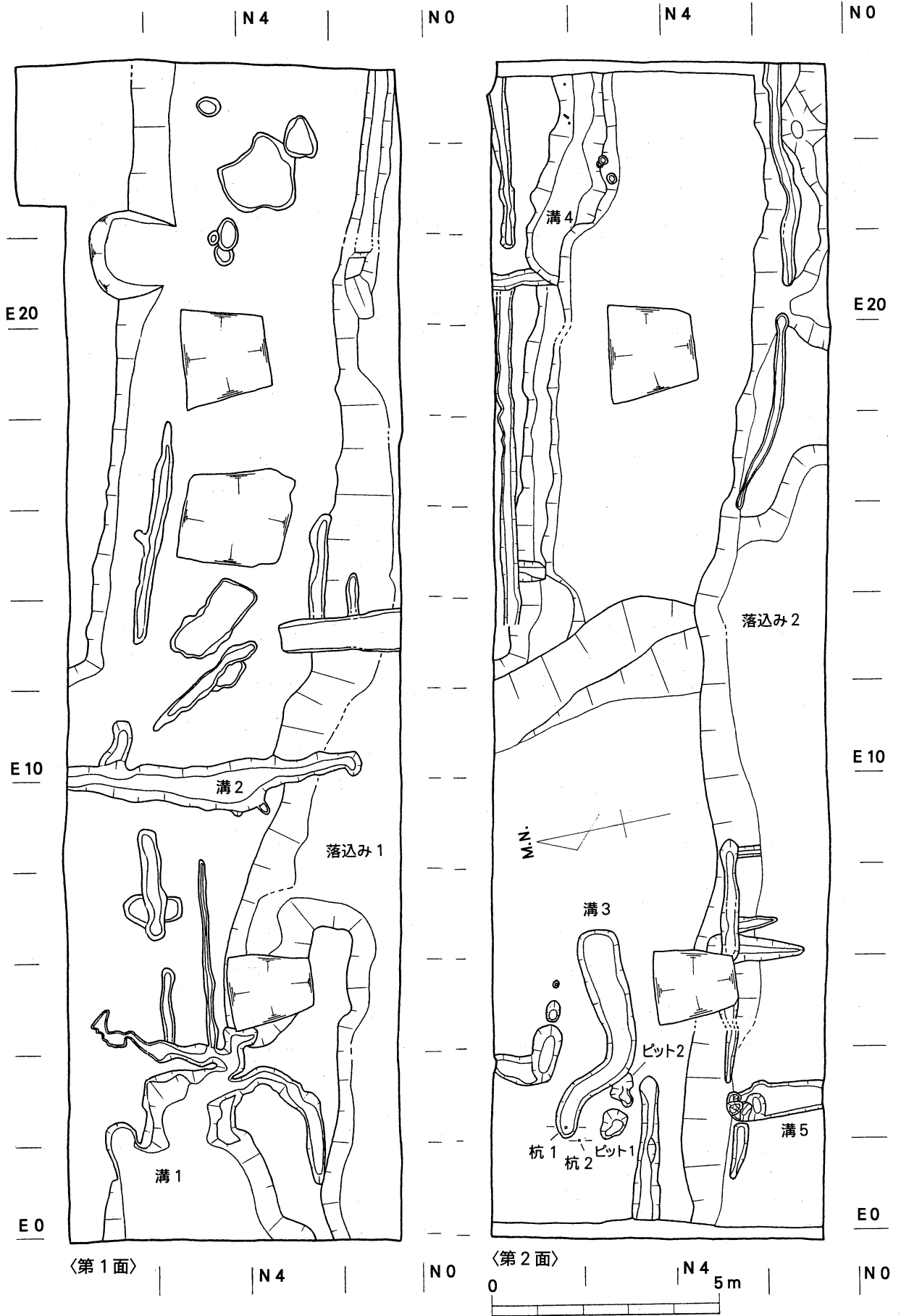
第14層：灰白色中粒砂。層厚は15cm以上。第9面のベース層である。工事予定深度外のため、これより下層の掘削は行なっていない。

【引用・参考文献】

- ・小山正忠・竹原秀雄 1987 『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所
- ・町田洋・新井房夫・森脇広 1986 『地層の知識—第四紀をさぐる—』 東京美術

(2) 検出遺構と遺構出土遺物

今回の発掘調査では、合計9次にわたる遺構面を検出した。出土遺物は二次堆積遺物が多く、すべての遺構面・遺物包含層中から、主に弥生時代後期の弥生土器と古墳時代初頭から前期にかけての古式土師器が出土する、複雑な出土状況を呈していた。以下、順を追って各遺構と遺構内出土遺物を記す。



第5図 遺構平面図(1)

a.第1面(第5図左、第10図、図版1)

第3層(紫灰色砂質シルト)上面において、東西方向に走行する落込みと、これに並走する流路2条・溝9条・土坑3基・ピット5基、それに地震痕跡などを検出した。

落込み1は南に向かって2段の階段状に傾斜し、最大高低差は90cmを測る。溝1は断面U字形の浅い溝で、壁面とセクションベルトの埋土観察から、砂～シルトの平行ラミナによる流水痕が観察でき、侵食谷が堆積と侵食を繰り返していく過程で形成された自然流路である。埋土中から陶器椀(3)など、近世後期の陶磁器が出土した。溝2は検出面の関係で一見小溝状を呈するが、これも壁面観察から、侵食谷の堆積過程で形成された断面V字形の流路と見られる。その他の小溝は概ね東西方向に走向し、一部南北方向に走向する小溝と直交するように重複する。

溝1以外の遺構からは近世の遺物は一切出土せず、主に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土し、図化できたものに落込み1から出土した弥生土器手焙形土器(1)や、楠葉型の瓦器椀(2)がある。ただし第1面ベース層以下の層中からも近世の遺物が出土しており、よって溝1以外の遺構出土遺物はすべて二次堆積遺物と判断した。また時期は不明であるが、溝2から硯が出土した。したがって第1面の時期は江戸時代中・後期(18世紀後半～19世紀初頭)と考えられる。

・地震痕跡(第6図、図版10上段)

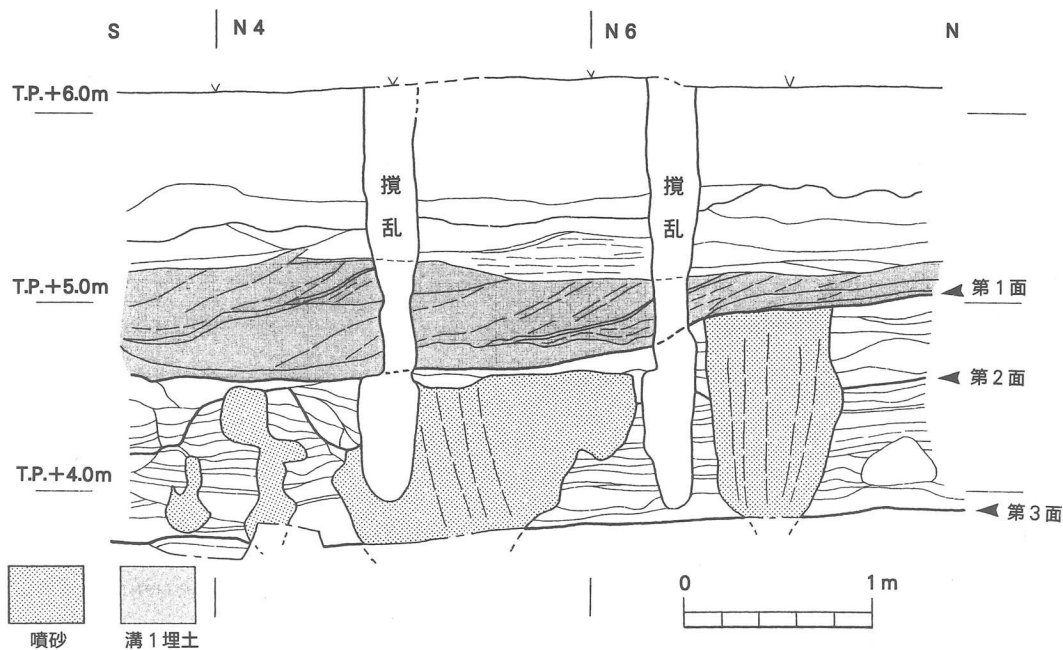
地震痕跡は調査区西端と西壁断面において、地震の際に発生した液状化現象による噴砂の通り道である砂脈が観察された。砂脈は溝1と重複していた関係もあって、検出段階ではその存在に気付かず、第2面以下まで掘り下げた下層の掘削段階で確認された。そのため平面図化は行っていないが、図版11上段右の作業風景で、地面に見える白い帯状の部分が砂脈である。砂脈は北西～南東方向に走向し、噴砂は堆積層を突き破り、第3層を貫いて第1面上面にまで吹き上がり、第2層に覆われる。

砂脈は細礫～極粗粒砂で充填され、大きいものには縦方向のラミナが認められる。噴砂の供給元は、工事深度の関係で未掘のため不明である。西壁断面の観察では、大型2本と小型2本の計4本が見られ、幅は大型のうち向かって右側が67cm、左側が118cm以上を測る。いずれの噴砂も、第3面よりも下層の砂層から、少なくとも110cmほど吹き上がる。

b.第2面(第5図右、第10図、図版2)

第4-1層(暗紫灰色シルト質粘土)および第4-2層(灰白色細粒砂～暗紫灰色シルト質粘土互層)上面において、東西方向に走行する落込みと、それに並走する小溝14条・ピット5基・木杭2本などを検出した。

落込み2は南と西に向かって緩く傾斜し、最大高低差は80cmを測る。小溝は第1面と同様に、主に東西方向に走向し、一部南北方向の小溝と交差して重複する。木杭はいずれも、樹皮を残し枝を払っただけの自然木の先端を尖らせたもので、杭1は残存長64cm、径7cm、杭2は



第6図 西壁断面に現れた噴砂

残存長70cm、径7cmを測る。

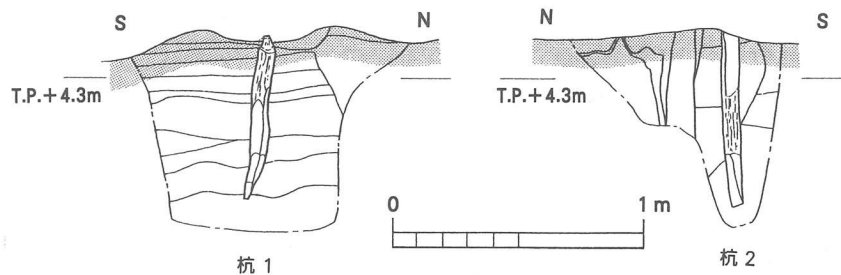
この遺構面も弥生土器や古式土師器の出土が多いが、ピット1から近世の土製玩具船(6)、溝3から近世の土師器灯明皿(5)、溝4・5・落込み2から14世紀後半～15世紀の土師器小皿(4)、溝5から近世の燻し瓦、ピット2から中国・北宋代の銭貨「康定元寶」(206)・「政□□寶(政和通寶か?)」(207)、落込み2からサヌカイト製スクレイパー(211)などが出土している。

遺構面の時期は、おおよそ江戸時代中・後期(18世紀以降)と考えられる。

c.第3面(第8図左、第10図、図版3)

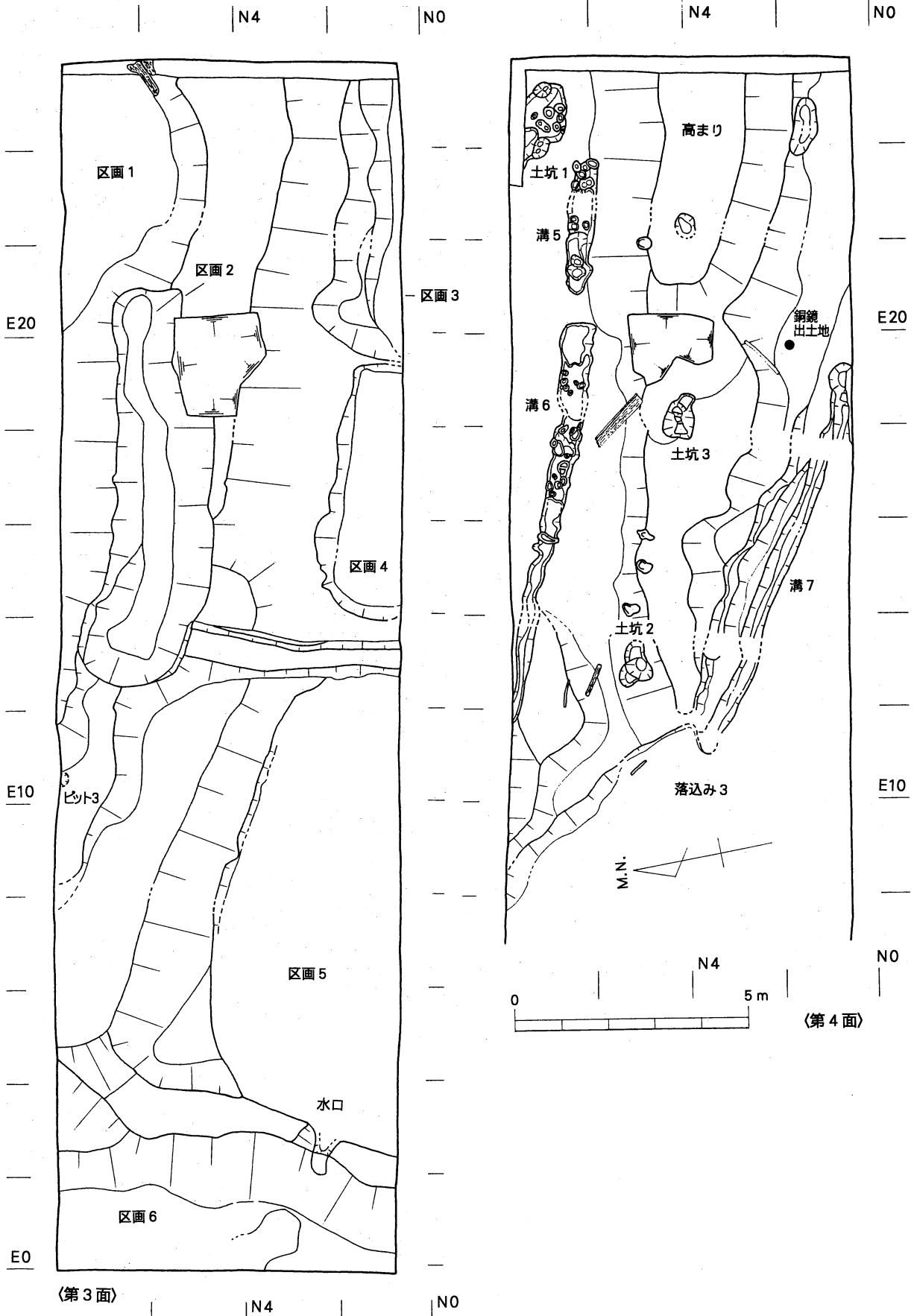
調査区西端の第5層(黒色腐植砂質粘土)と、中央部の第6層(暗褐色細粒砂～シルト～灰色砂質シルト)、および東端の第7層(褐色シルト質粘土)の各上面において、水田区画6筆と、これに伴う畦畔・水口・人間の足跡群、それにピット1基などを検出した。

水田区画は碁盤目状の区画ではなく、何れも平面形が不定形で、畦畔に方位の規格性は感じられない。水田区画の底面はほぼ平坦面を成し、各区画の中央部における標高は、区画1が3.55



第7図 第2面木杭立面図

m、区画2が4.50m前後、区画3が4.10m、区画4が4.11m、区画6が3.80mを測り、区画5は未掘のため不明である。区画5と区画6とを分ける畦畔には、幅8cmの水口と思われる切れ目が存在する。なお未図化である



第8図 遺構平面図(2)

が、区画4と区画5の耕土面上に、人間のものと思われる足跡が多数認められた(図版3の白い斑状の箇所)。足跡の歩いた方向性は特に認められず、不定方向に何度も往復しているようである。

前段階と同様に、この遺構面でも弥生土器や古式土師器の出土が多いが、区画6から弥生土器甕(9)・鉢(10)・陶器播鉢(11)、水田区画5から弥生土器水差し形土器(7)、平安時代中期の土師器坏(12)・区画4から平安時代末～鎌倉時代の土師器小皿(13)、区画2から古式土師器小型丸底壺(8)などが出土した。ピット3は正確な平面形は不明であるが、北壁土層断面部分において径30cm、深さ45cmを測る。埋土中から銭貨「口豊通口(元豊通寶か?)」(208)が出土している。

遺跡面の時期は、平安時代後半～鎌倉時代(11～13世紀代)と考えられる。

d. 第4面(第8図右、第10図、図版4)

調査区西端部は工事深度の関係で未掘であるが、第8層(黒褐色シルト質粘土～褐色砂質シルト)上面において、東西方向に走行する落込みと、それに並走する極低く細長い高まりと、小溝3条・土坑2基・ピット7基などを検出した。

落込み3は南西方向に緩く傾斜し、工事深度の関係で完掘はしていないが、検出段階で最大高低差は58cmを測る。埋土から、弥生土器・古式土師器などの土器が多量に出土したほか、須恵器甕・坏高台部、土師器小皿(いわゆる「ての字状口縁皿」)がわずかに混じる。その中でも特筆すべき遺物として、銅鏡片(204)がある。銅鏡は破碎された破片で、落込み底面から6cmほど浮いた位置で出土した。

高まりは北側の丘陵とほぼ平行に延びており、方位はN63°Wを示し、南側へ低くなり、基底幅4.3m、上端幅1.7m、高さは検出段階で最高19cmを測るが、本来はもう少し高かった可能性がある。高まりは、その南北両側では高さが異なっていた。南側の落込み部分は徐々に深くなるのに対して、北側の方は最も高い中央部分から少し低くなった所で平坦な面になり、落込み3側の方が低くなる位置関係にある。

溝5・6は、高まりの裾部内側を並走し、途中土橋状の箇所で見断される。幅30～70cm、最深部で溝5が20cm、溝6が13cmを測る。溝の断面形は箱形で、部分的にオーバーハング状を呈し、底部は凹凸が著しい。埋土は軟質の砂にシルトブロックや粘土ブロックが入り、一気に埋め戻された様子で、ラミナなどの流水痕は見られない。

土坑2は東西85cm×南北70cm、深さ51cmの不定形な小土坑である。埋土から二次焼成を受けて黒褐色の金属状付着物が残る土師器椀(202・203)、奈良時代の須恵器坏身・製塩土器(14)・土師器小型丸底壺(15)が出土している。

上記以外では、いずれも小片のため未図化であるが、土坑3と溝7からは弥生土器や古式土師器に混じって、古墳・奈良時代の須恵器坏などが出土している。その他の遺構からは、古式土師器などが出土している。

第4面の時期は主に古墳時代前期とみられるが、奈良～平安時代後半の遺物を含む遺構も認

められることから、同一遺構面に時期の異なる遺構が重複しているものと判断される。

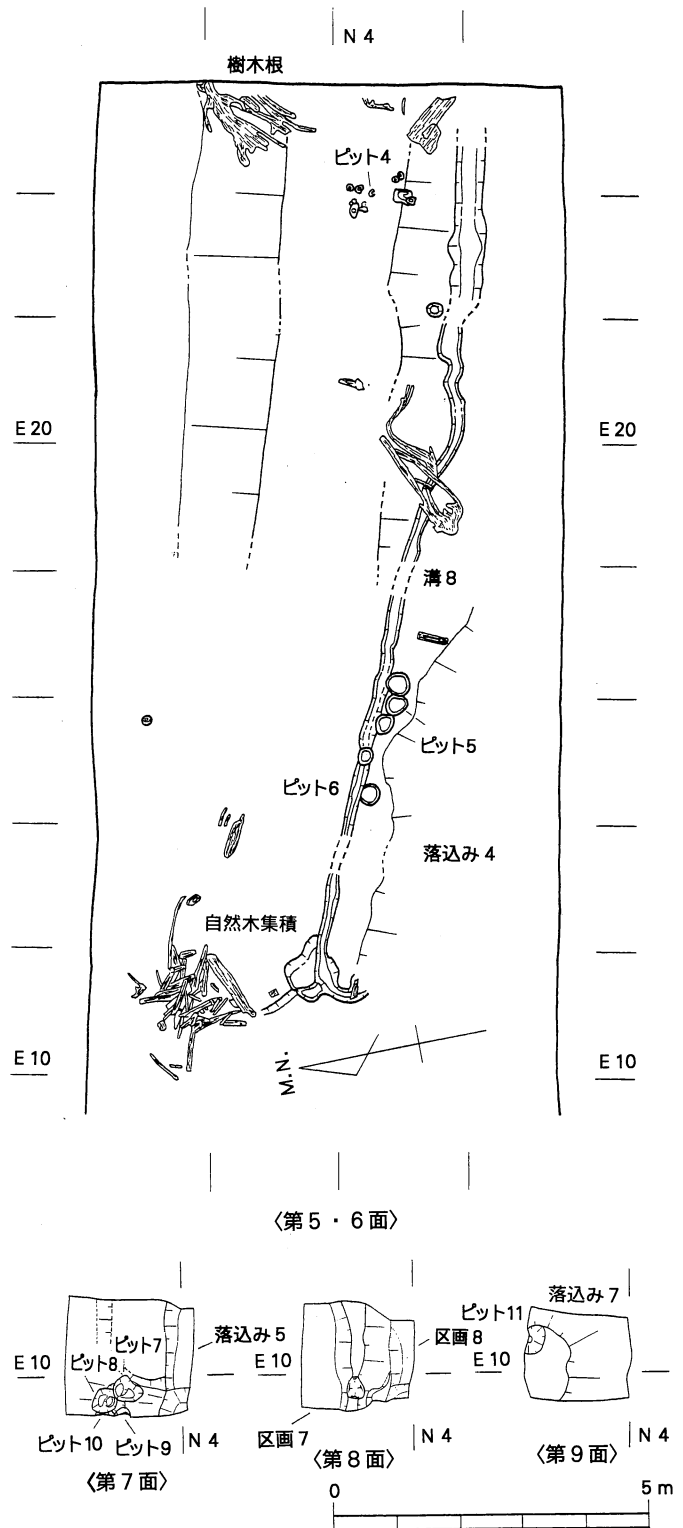
e.第5面(第9図上段、第10・16図、図版5)

第9層(褐色シルト質粘土～褐色粘土～暗褐色粘土～暗灰色砂質シルト～暗灰色シルト質粘土)上面において、東西方向に走向する落込みと小溝1条・土坑1基・ピット14基などを検出した。落込み4は未掘のため高低差は不明である。溝8は東西に走向する、全長13.9m以上、幅25cm、深さは最深部で13cmの小溝である。溝内からは古式土師器の小破片が多く出土している。この小溝に沿うような位置に、ピットが点在する。

調査区東端では、8基の小ピットが隣接しあって見られた。このうちピット4は平面形が蹄状を呈することから、動物の足跡と考えられる。その他は平面・断面形とも不定形で、樹木の根痕と思われる。また樹木根が調査区東端で、自然木の集積が調査区の中央部で見られた。

ピット5は東西32cm×南北32cm、深さ15.5cmの不定形な小型の土坑で、埋土から古式土師器高坏(16)が出土している。またピット6は東西26cm、南北23cm、深さ22cmを測る。前述のピット5と合わせて、坏部内面に朱が付着した土師器高坏が出土している。

遺構面直上からは、弥生土器壺(124)・甕(125・127)、古式土師器壺(126・128)・甕(129・133)・高坏(130)・小型丸底壺(131)・製塩土器(132)などが出土した。遺構面の時期は、古墳時代前期(3世紀後葉～4世紀代)でも後半と考えられる(註1)。



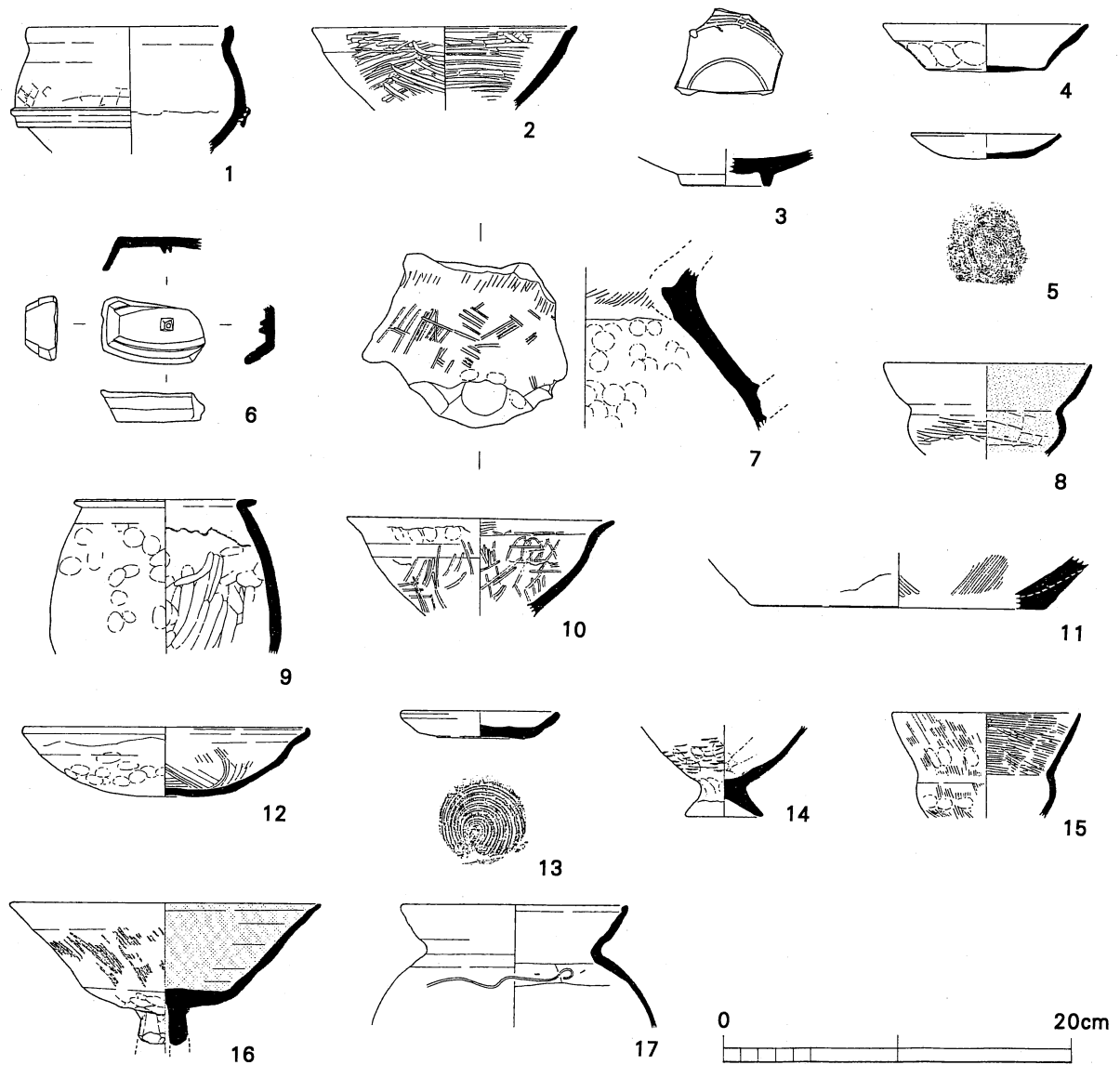
第9図 遺構平面図(3)

f.第6面(第17・18図、図版6・7)

遺構は検出されていないが、第10層(黒褐色シルト)上面から弥生土器や古式土師器などの多数の遺物が出土したため、調査段階で遺構面と同等に扱った。

弥生土器は吉備系甕(134)・有孔鉢(135)、大型把手付き鉢(136)、壺(137)、細頸壺(139)等があり、特筆すべきものとして坏部内面に朱が付着する高坏(138)などが出土した。

古式土師器は甕(140・141・143)・壺(142・146・151~154)・高坏(145)・台付き鉢(147)・小型丸底壺(148・150)等があり、特筆すべきものとして、底部を穿孔し口縁内面と体部に黒~銅色の金属状付着物が残る土師器小型丸底壺(149)が出土している。表面の一部は炭化しており、



1・2：第1面 落込み1 3：第1面 溝1 4：第2面 落込み2 5：第2面 溝3 6：第2面 ピット1
7：3面 区画5 8：第3面 区画2 9~11：第3面 区画6 12：第3面 区画5 13：第3面 区画4
14・15：第4面 土坑2 16：第5面 ピット5 17：第7面 落込み5

第10図 遺構出土遺物

※図中網掛け箇所は朱付着

3箇所に穿孔して、そのうち2箇所は未貫通である。

遺構面の時期は、古墳時代前期後半と考えられる。

g.第7面(第9図下段左、図版8上段)

第7面以下は、グリッド部において検出したものである。第7面では第12層(灰白色細粒砂)上面において、東西方向の落込みと、ピット5基を検出した。

落込み5は南側ほど深く、検出部分で高低差は24cmを測る。埋土中より、体部に緩い曲線状の線刻を施した布留式甕(17)が出土した。

ピット群は一箇所に隣接しあい重複した状態で検出され、そのうち完掘できたものは、ピット7が長径49cm、深さ15cm、ピット8が長径46cm以上、深さ28cm、ピット9が深さ12cm、ピット10が深さ17cmを測る。いずれも平面形・断面形とも不定形で、樹木の根の痕跡などの可能性が考えられる。第7面の遺構の時期は、古墳時代前期前半と考えられる。

h.第8面(第9図下段中央、図版8中段)

第13層(黒色～暗灰色シルト質粘土)上面において、東西方向の水田畦畔と考えられる高まりを検出した。

畦畔は基底幅85cm前後、上端幅20～40cm、高さは最高所で18cmを測る。水田区画の底面の標高は、区画7が3.61m、区画8が3.35mである。両方の水田区画埋土から、古式土師器小型器台・壺・甕などが出土した。いずれも小片のため時期を特定しがたいが、第8面の遺構の時期は、おおむね古墳時代初頭もしくは前期(3～4世紀代)と考えられる。

i.第9面(第9図下段右、図版8下段)

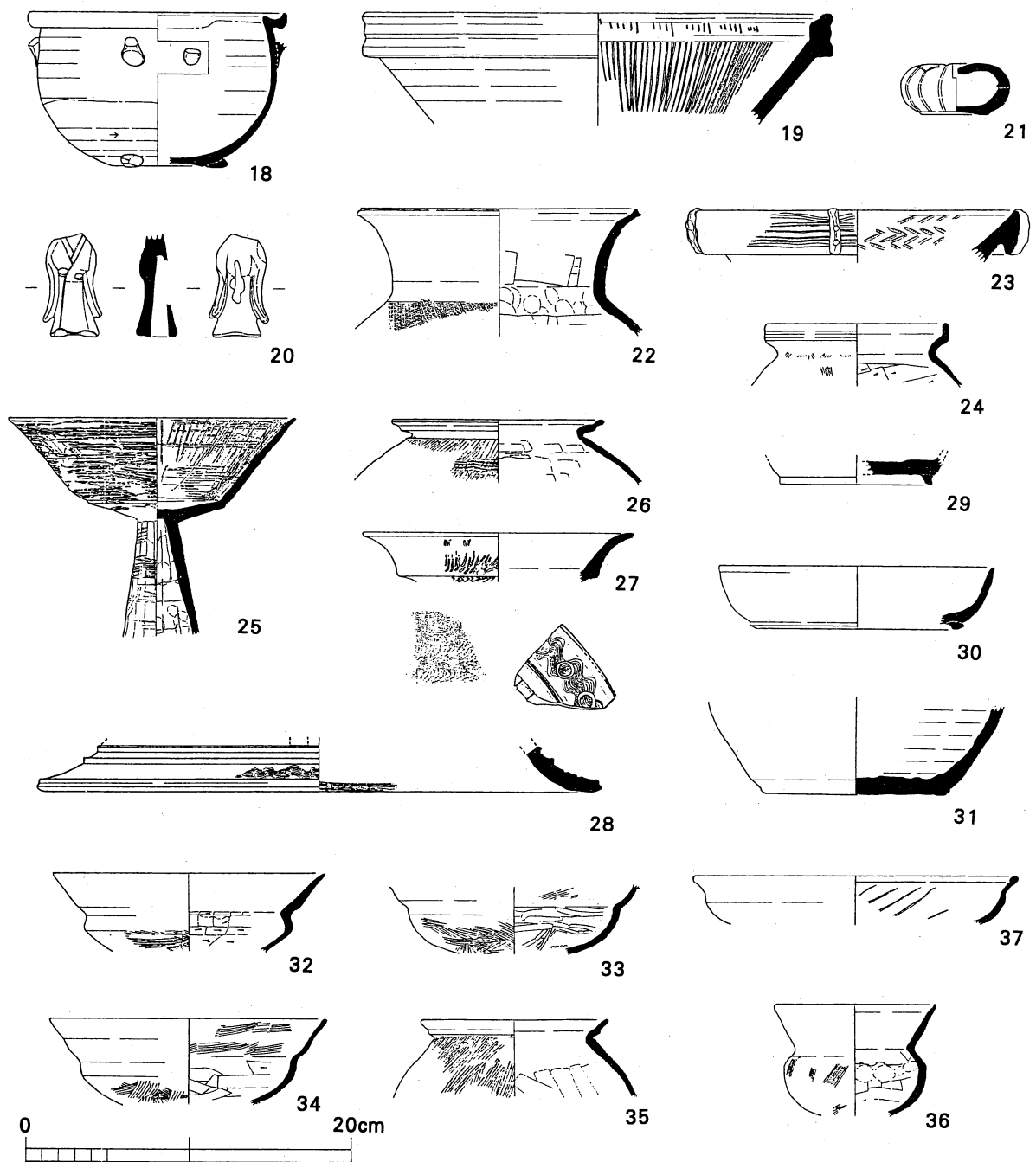
第14層(灰白色中粒砂)上面において、南から東へ傾斜する落込みと、ピット1基を検出した。

落込み7は工事深度の関係で未掘である。ピット11は径45cm、深さ50cmの断面台形のしっかりしたもので、建物の柱穴の可能性も考えられる。ピット埋土から、弥生土器もしくは古式土師器の細片が、僅かに1点のみ出土した。第9面の遺構の時期は、弥生時代もしくは古墳時代初頭頃と考えられるが、時期を特定することはできなかった。

(3) 遺物包含層出土の遺物

発掘調査では、遺構埋土および各遺物包含層中から、コンテナ箱約120箱におよぶ遺物が出土した。出土点数は遺構中よりも、遺物包含層中からのものが圧倒的に多かった。とりわけ、黒っぽい色の土壌化層中からの出土品が、点数的にも多く、なおかつ残存状況の良好なものの多い傾向が見られた。

その内訳は、弥生時代前期から江戸時代にかけての土器・陶磁器・石器・青銅器・木器などの多岐にわたった。



18～19：第2層 20：第4層-1層 21：第4-2層 22：第5層 23～31：第6層 32～37：第7層

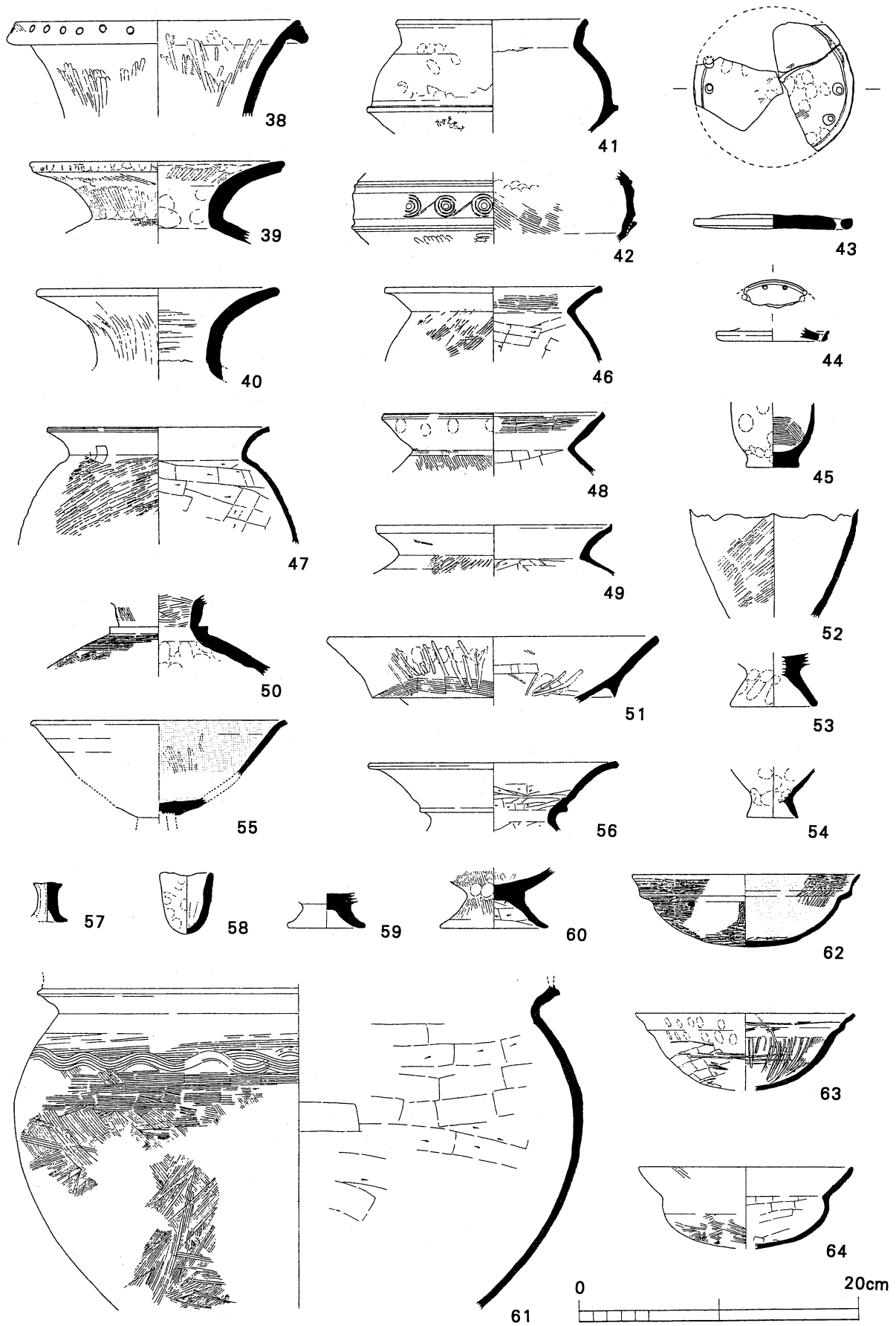
第11図 第2～7層出土遺物

※図中網掛け箇所は朱付着

以下では図化できた遺物及び、下限年代を示す遺物を中心に記述する。

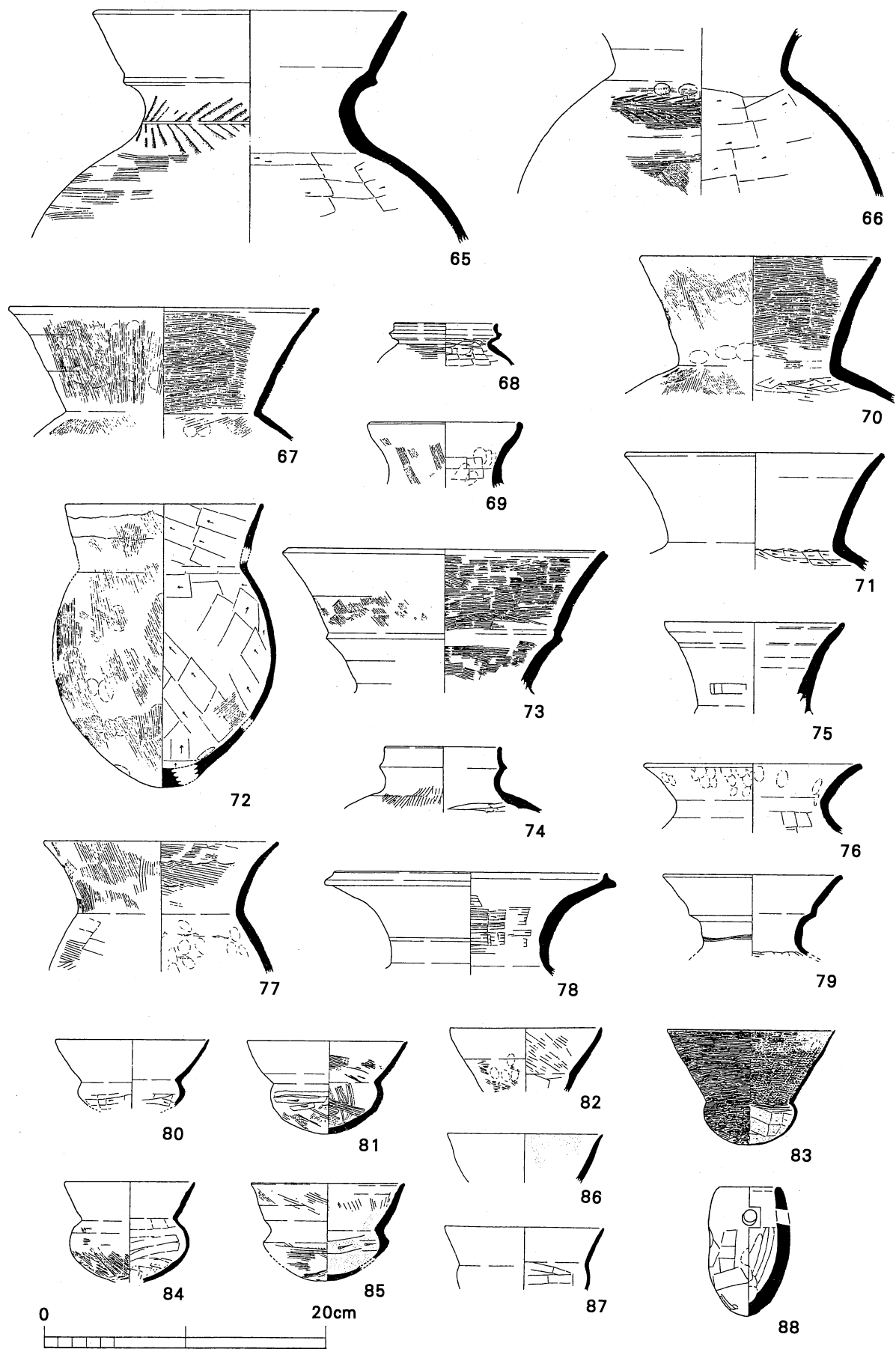
[第2層出土遺物] (第11図)

舞子・明石焼と考えられる陶器土鍋(18)、堺焼もしくは明石焼播鉢(19)などが出土した。遺物の下限年代は江戸時代中・後期(18世紀後半～19世紀初頭)である。



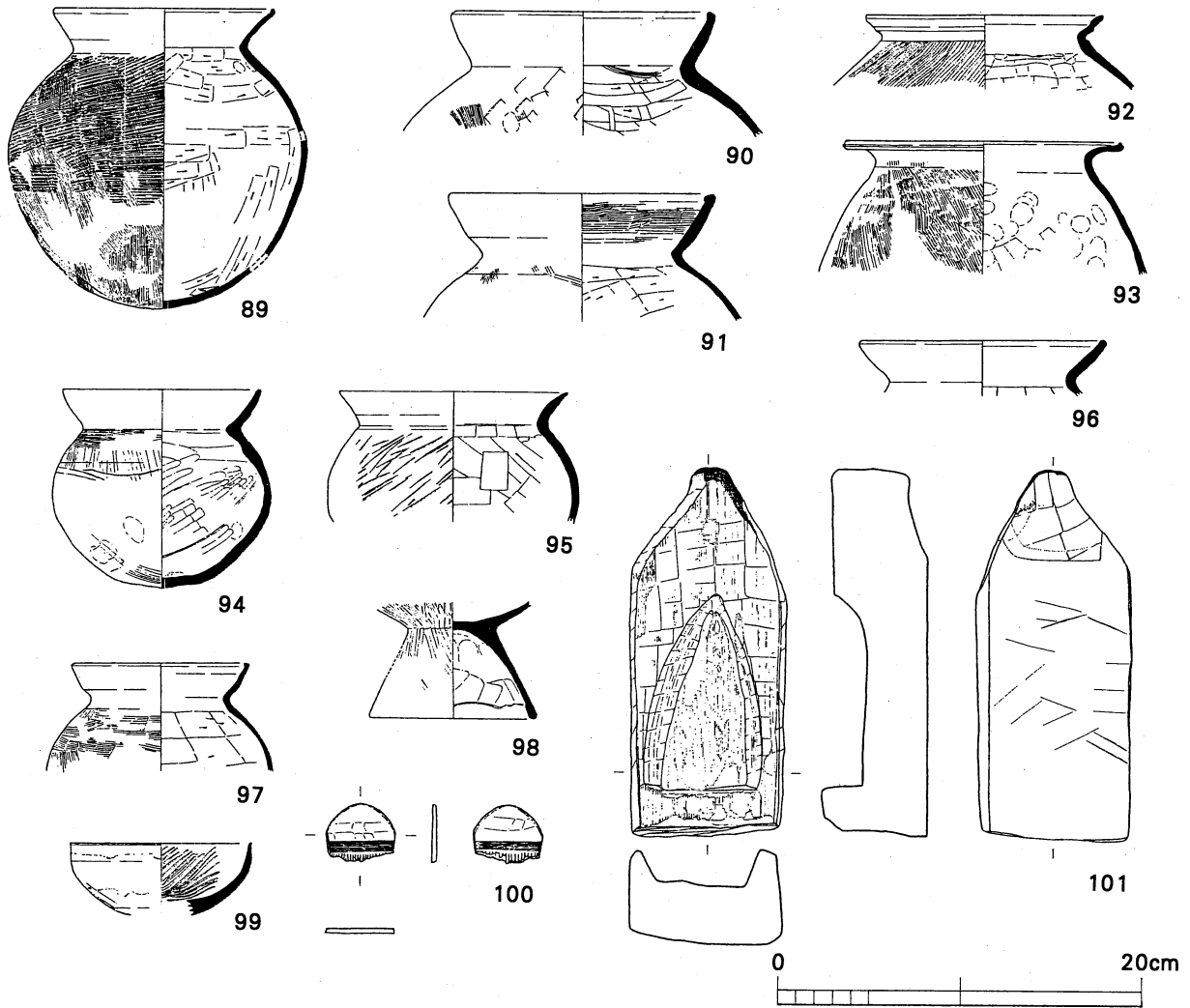
第12図 第8層出土遺物(1)

※図中網掛け箇所は朱付着



第13図 第8層出土遺物(2)

※図中網掛け箇所は朱付着



第14図 第8層出土遺物(3)

〔第3層出土遺物〕(第11図)

陶質土器壺、備前焼摺鉢、瓦質土器羽釜、土師器三足鍋、石錐(210)などの他、特筆すべき遺物として鑄型状土製品(201)が出土した。鑄型状土製品は、全体に高熱を受けて硬質化してにぶい黄橙色を呈し、部分的に灰白色、黒色、黄灰色に変色しており、表面には銅の溶解物質が付着している(註2)。

図化可能な遺物は二次堆積遺物のみのため、時期を特定しがたいが、上下の層位関係から考えて、土層の年代は江戸時代であることは確実である。

〔第4層出土遺物〕(第11図)

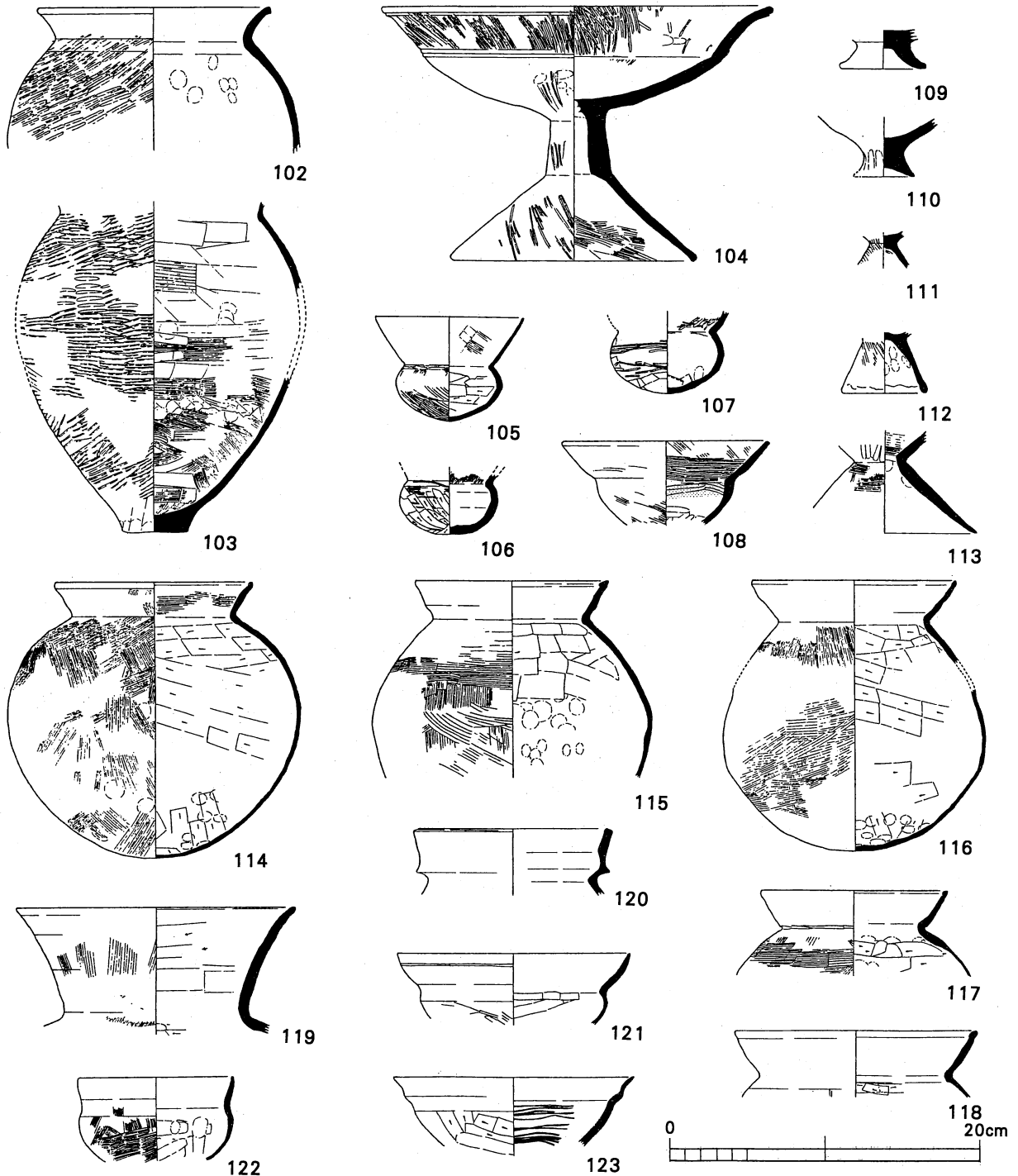
土製玩具土人形(20)・軟質陶器玩具南瓜(21)、石器スクレイパー(214)、銭貨「元豊通寶」(209)などが出土した。遺物の下限年代はおおよそ江戸時代中・後期(18～19世紀)である。

[第5層出土遺物] (第11図)

古式土師器壺(217)、陶質土器広口壺(22)などが出土した。図化可能な遺物は二次堆積遺物のみのため、土層の年代の特定はできない。

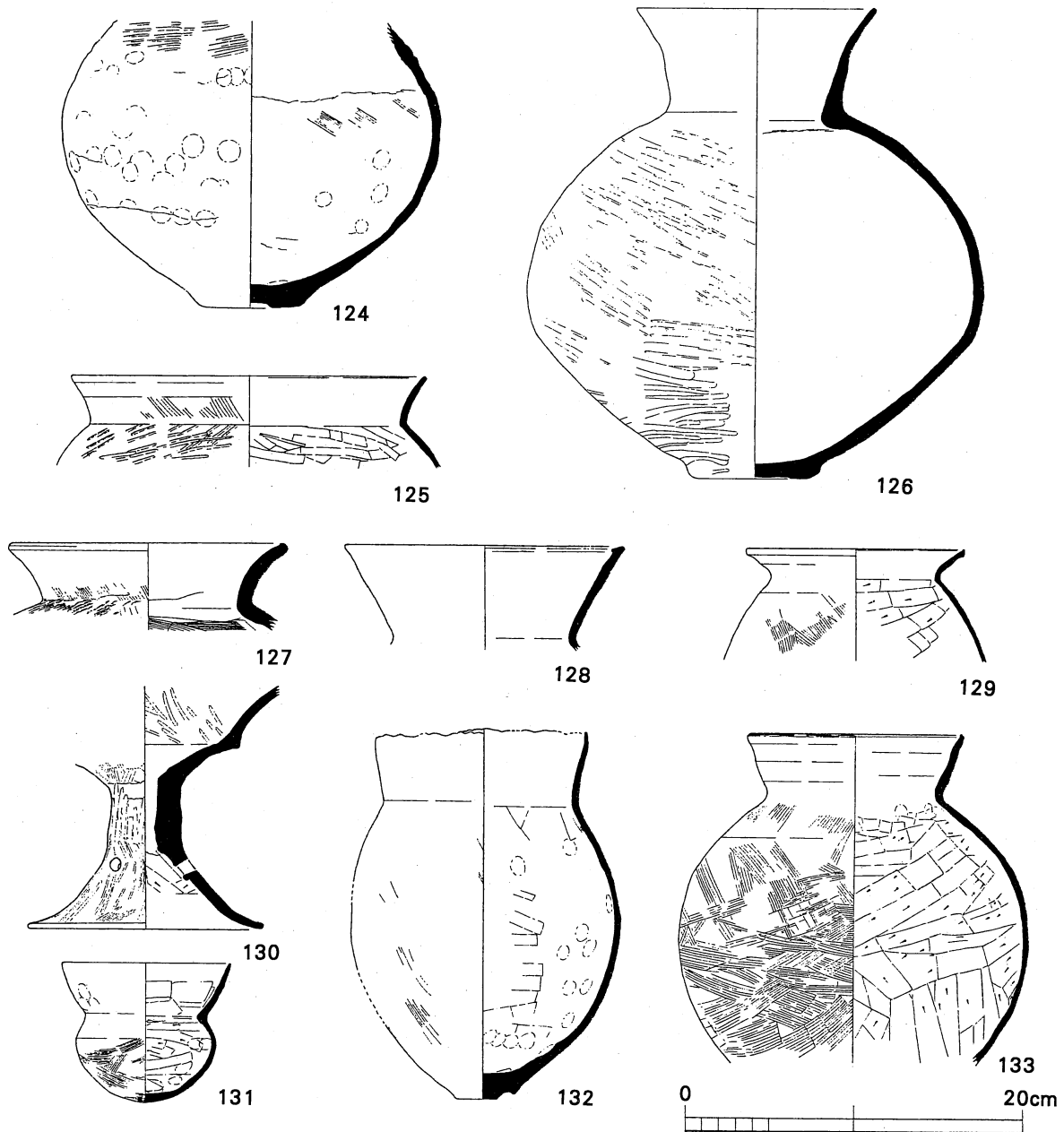
[第6層出土遺物] (第11図)

弥生土器壺(23・27)・高坏、古式土師器高坏(25)・甕(24・26)、韓式系軟質土器、陶質土器も



第15図 第9層出土遺物

※図中網掛け箇所は朱付着



第16図 第5面土器群

しくは初期須恵器高坏形器台(28)、須恵器坏身(29・30)・坏蓋・壺(31)・甕・台付き坏・細頸壺、黒色土器A類碗・同B類碗、サヌカイト石核(212)などが出土した。遺物の下限年代は平安時代(11世紀代)である。

[第7層出土遺物] (第11図)

古式土師器浅鉢(32~34)、S字状口縁甕(35)・小型丸底壺(36)、須恵器坏身、土師器坏(37)などが出土した。遺物の下限年代は奈良時代(8世紀代)であるが、第4面遺構の年代から逆算すると、これらも二次堆積遺物であろう。

[第8層出土遺物] (第12~14図)

弥生土器壺(38~40・42)・手焙形土器(41)・蓋(43・44)・高坏・甕・ミニチュア土器壺(45)、古式土師器・有段浅鉢(62~64)・小型丸底壺(80~87)・ミニチュア土器高坏(57)・鉢(58)・製塩土器(52~54)・蛸壺(88)・台付き鉢(59・60)・S字状口縁台付き甕(92・98)・壺(65~79)・甕(46~49・89~91・93~97)、鼓型器台(56)・大型鉢(61)、土師器椀形鉢(99)、須恵器坏の高台部、木器櫛(100)・板状木製品(155)・船形木製品もしくは船形容器(101)、石製投弾がある。この内で特筆すべきものとして、内面に朱が付着した小型丸底壺(83・85・86)・高坏(55)・有段浅鉢(52)がある。

木器櫛(100)は、一枚板から削りだした刻歯式の櫛であるが、外観は結歯式の縦櫛をモチーフにしており、横木を再現した“痕跡器官”が見られる。船形木製品、もしくは船形容器(101)は、全長20.3cm、全幅8.5cm、全高5.8cmを測り、直方体の角材を利用して、船首を裁断し尖らせて、舳と平底を表現する立体船形である。内部は平面形が曲線的な二等辺三角形形状に割り貫き、外観よりも丁寧な加工を施す。あるいは未完成品とも考えられる。

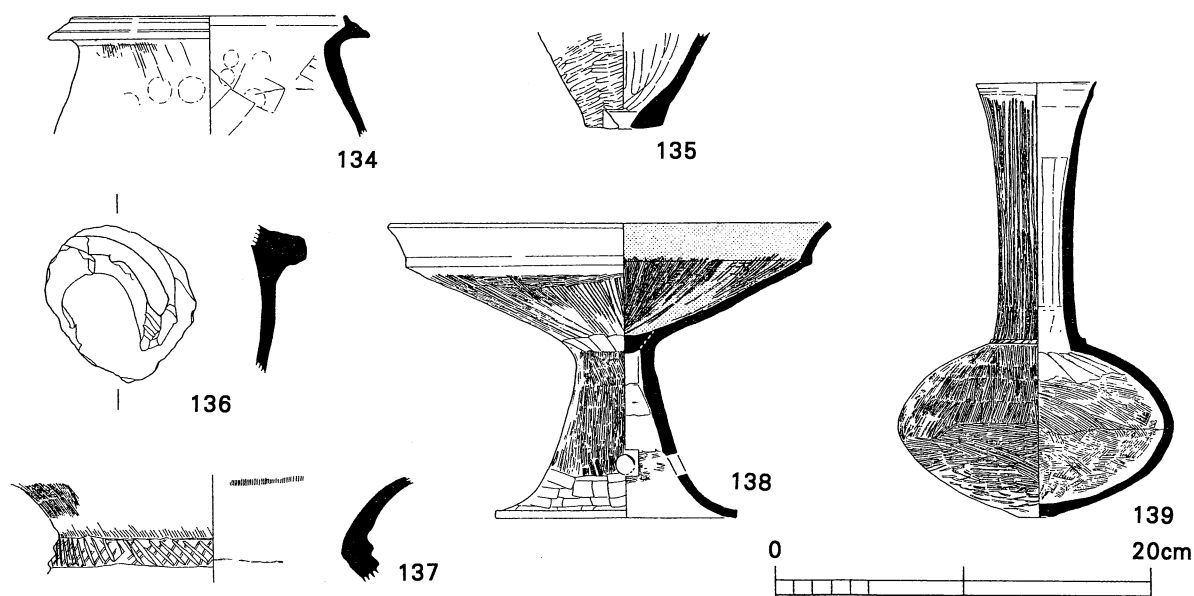
遺物の年代は一部に混入と思われるものを含むが、おおむね古墳時代前期である。

[第9層出土遺物] (第15図)

弥生土器甕(102・103)・高坏(104)・壺、古式土師器小型丸底壺(105~107)・台付き鉢(109)、製塩土器(110)・小型器台(113)・甕(114~118・120・216)・台付き甕(111・112)・壺(119)、浅鉢(121・123)、小型鉢(122)、特筆すべきものに内面に朱が付着した小型丸底壺(108)が出土した。遺物の下限年代は古墳時代前期である。

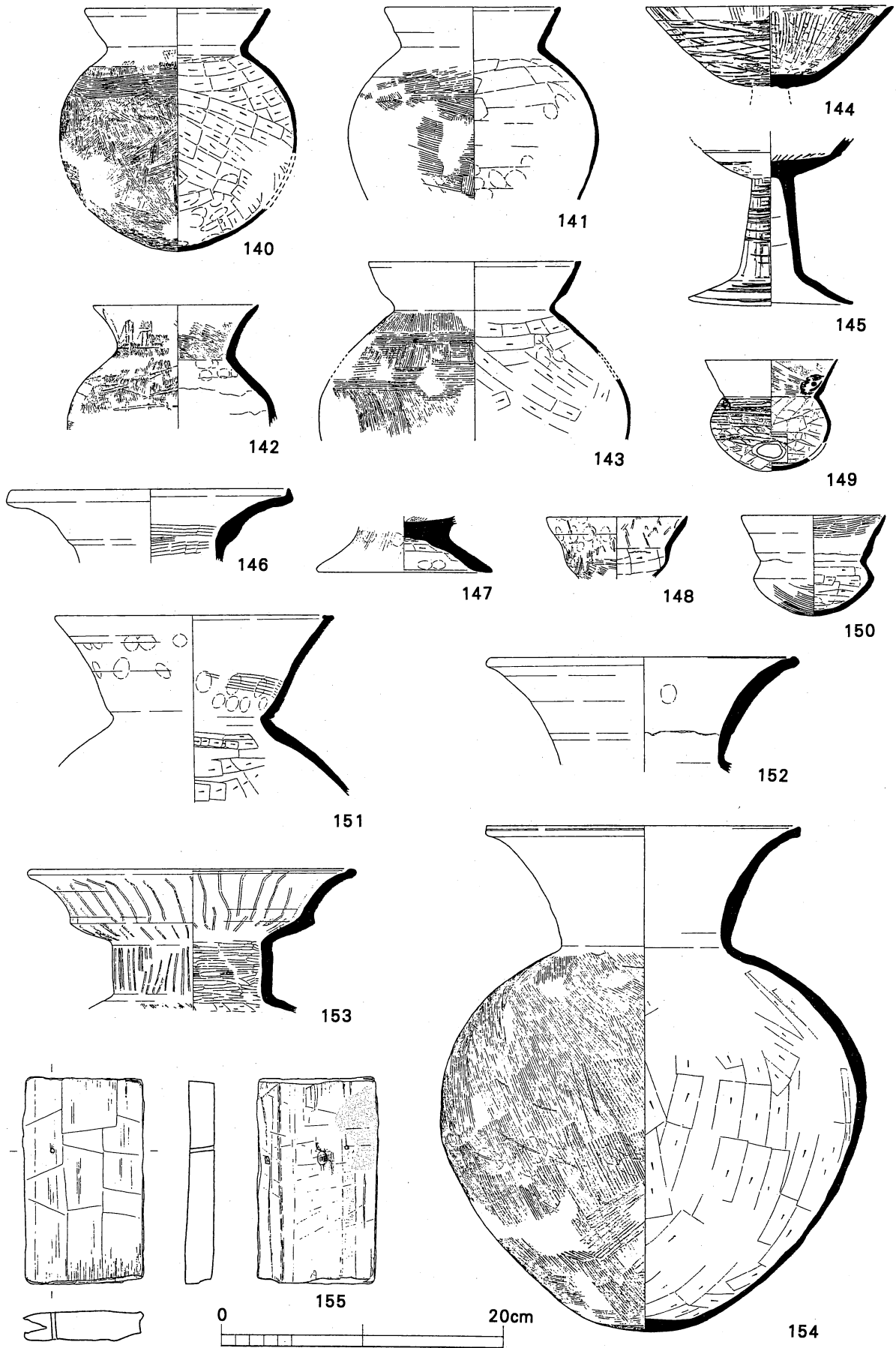
[第10層出土遺物] (第19図)

弥生土器深鉢(156)・鉢(157)・ミニチュア土器鉢(158)・高坏(159)、長頸壺(160)、甕(161)、

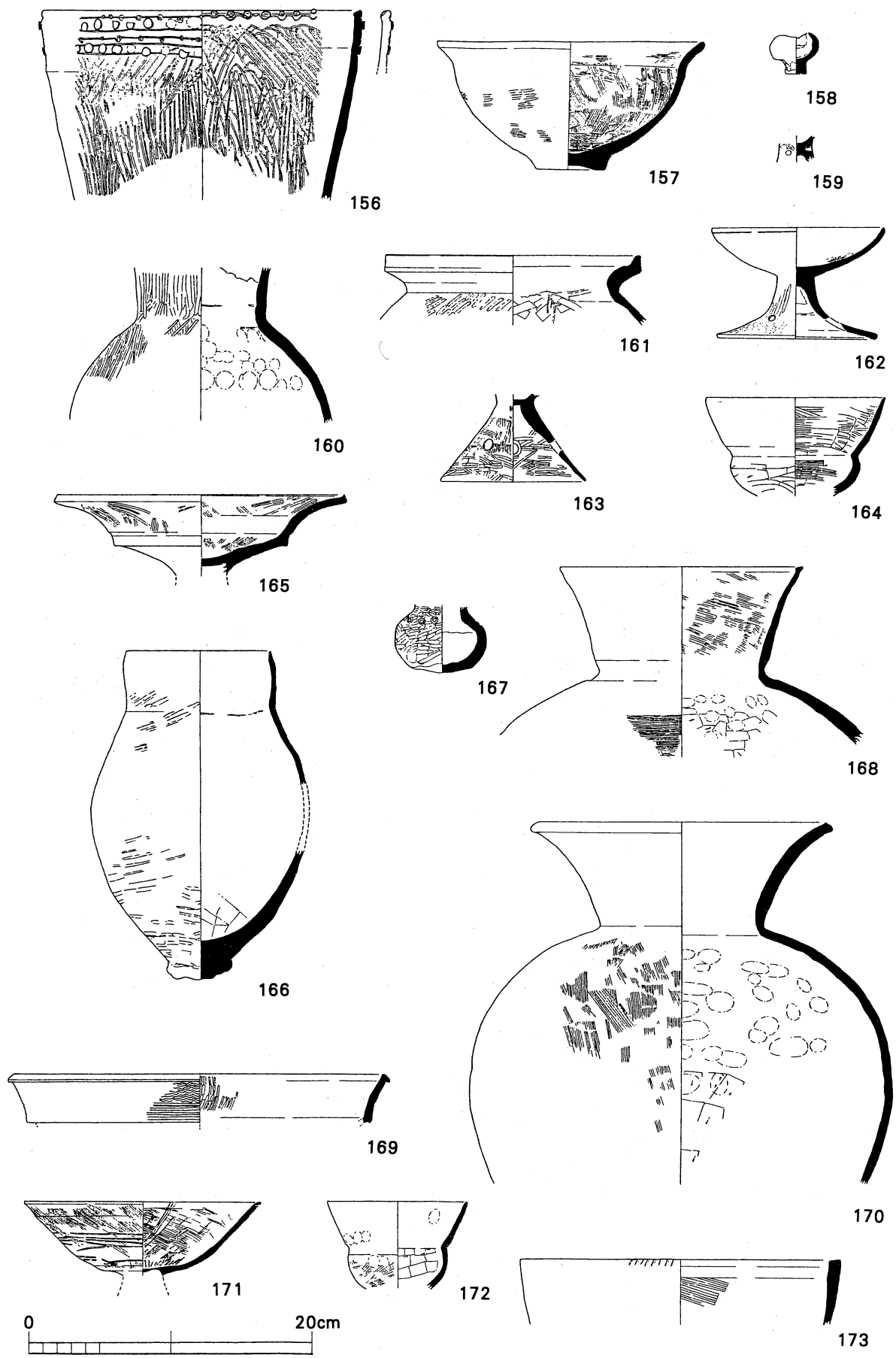


第17図 第6面土器群(1)

※図中網掛け箇所は朱付着



第 18 图 第 6 面土器群(2)



第19図 第10~13層出土遺物

156~164 : 第10層 165~172 : 第11層 173 : 第13層

古式土師器小型丸底壺(164)・高坏(162)・小型器台(163)、銅鏃(205)、石鏃(213)、サヌカイト原石(215)、板状加工木材(図版7下段右)などが出土した。

弥生土器深鉢は、口縁部外面に5条のヘラ描き沈線を巡らし、口縁部外面と内面端面近くに円形浮紋を飾り、体部は内外面ともに磨きを施す。文様構成から弥生時代前期、胎土より生駒山西麓産と思われるが、あまり類例を見ないタイプの土器である。

銅鏃は全長4.8cmを測る、「↑」状を呈する鋭角的な形状の有茎式鏃である。現在なお鮮やかな赤銅色を保っているが、表面の一部に黒色の物質が付着している。

遺物の下限年代は古墳時代前期である。

[第11層出土遺物] (第19図)

弥生土器高杯(169)、古式土師器小型壺(167)・高坏(165・171)・製塩土器(166)・壺(168・170)・小型丸底壺(172)などが出土した。遺物の下限年代は古墳時代前期である。

[第12層出土遺物]

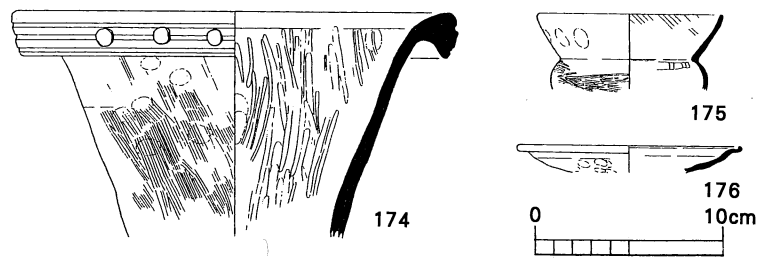
図化できる遺物はなく、弥生土器の小片が少量出土した。遺物も二次堆積遺物のため、土層の時期の特定はできない。

[第13層出土遺物] (第19図)

弥生土器鉢(173)・壺などが出土した。遺物の年代観は、弥生時代中期後半(B.C.2～1世紀)である。

[出土層位不明遺物] (第20図)

弥生土器広口壺(174)、古式土師器小型丸底壺(175)、土師器「ての字状口縁皿」(176)などが北壁断面の清掃時に出土した。



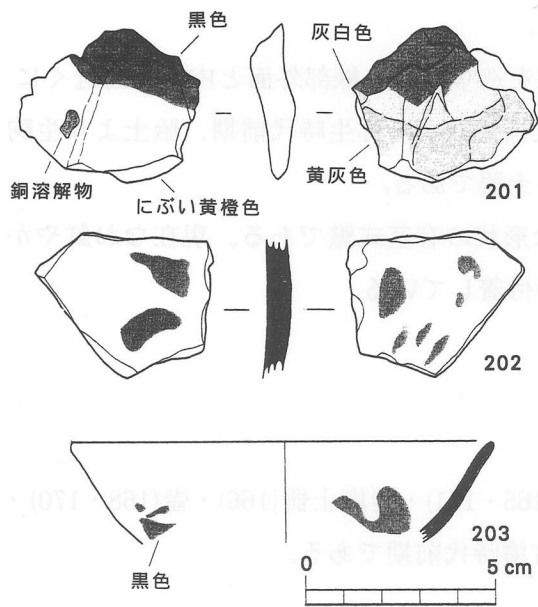
第20図 出土層位不明遺物

【註】

- 1) 弥生時代中期後半～古墳時代前期までの暦年代は、(財)大阪府文化財センターの土器実年代案に準じた[大文セ2003]。
- 2) 柏原市教育委員会北野重氏より、本土製品は鋳型の可能性があり、表面の付着物は銅であるとのことご教示を得た。

【引用・参考文献】

・安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学協会



201：第3層 202・203：第4面土坑2

第21図 鑄造関連遺物

- ・稲原昭嘉ほか 2005 「明石焼について」『明石焼と兵庫のやきもの～古窯から現代陶工までの名品展～』明石市立文化博物館
- ・岡田章一 2004 「時期設定と土器・陶磁器組成の変遷」『兵庫津遺跡』Ⅱ 兵庫県教育委員会
- ・(財)大阪府文化財センター編 2003 『古墳出現期の土師器と実年代』(シンポジウム資料集)
- ・高橋一夫 1998 『手焙形土器の研究』六一書房
- ・田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- ・中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・原田昌則 1993 「久宝寺遺跡第1次調査」『八尾市文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・平井和 2001 「徳川氏大坂城期における土製玩具の三様相」『研究紀要』第4号 (財)大阪市文化財協会
- ・森岡秀人 2001 「庄内式土器の実年代について」

- 『3・4世紀日韓土器の諸問題』(国際学術会議資料集)釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会
- ・森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
- ・米田敏幸 1994 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』Ⅶ 庄内式土器研究会
- ・劉巨成編 1989 『中国古銭譜』(中国文) 国家文物局編纂組・文物出版社

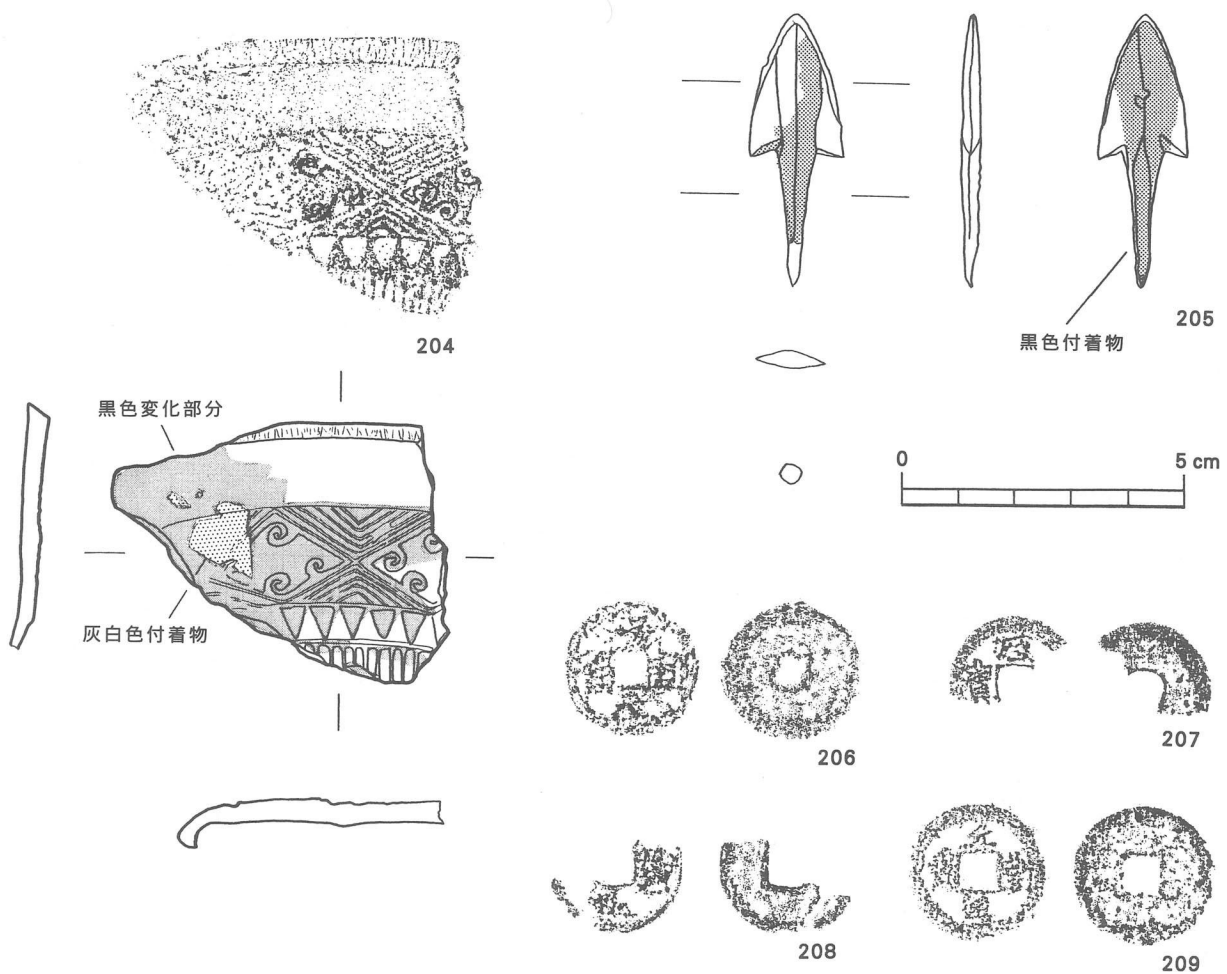
第IV章 まとめ

(1) 検出遺構について

今回の発掘調査では、弥生時代後期もしくは古墳時代初頭から近世にかけての、合計9次にわたる遺構面を検出した。各遺構面において、落込み・溝・土坑・ピットなど多岐にわたる遺構を検出したが、検出遺構の性格を明確にしえたものは少なかった。なお、これらの遺構はいずれも約60°前後西へ振った方位を示しており、当地北側に広がる千里丘陵の地形の影響が考えられる。

第1面と第2面には、東西方向と、一部これに直交する南北方向の素掘り小溝群が落込みの肩に並走する位置に認められた。これらの遺構は江戸時代の耕作活動によって残された耕作溝と思われる。

第3面と第8面から、それぞれ平安時代後半～鎌倉時代と古墳時代前期の、水田区画・畦畔・足跡群などを検出した。調査地点は全般的に浸透性の高い砂質の地質であるが、両遺構面は共に黒色粘土層をベースとしている。この粘土層が耕作活動に伴う人為的な客土か否かを判断することは難しいが、保水性の高い粘土層を水田の床土として利用していることは疑いない。以



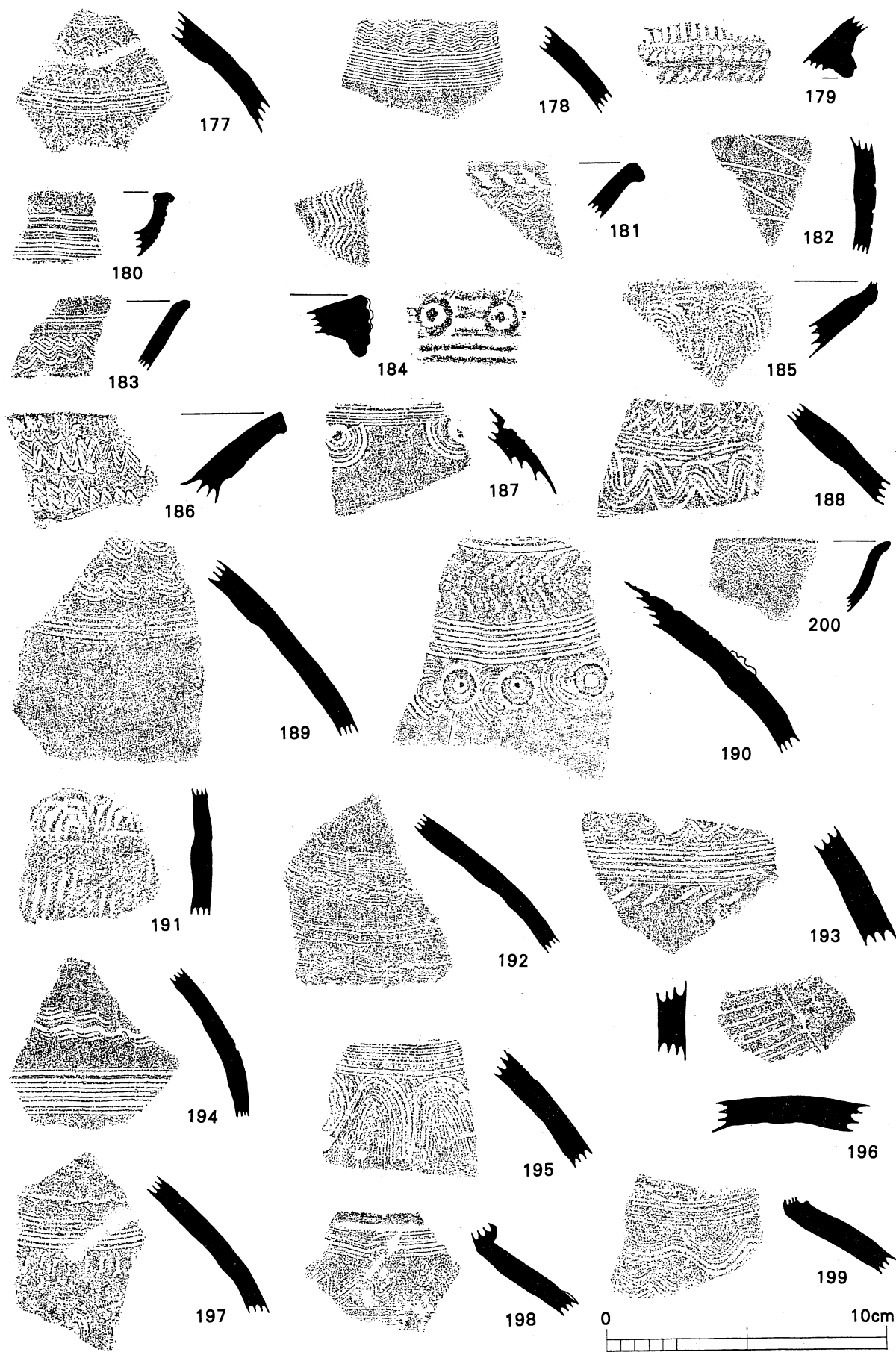
204：第4面 落込み3 205：第10層 206・207：第2面 ピット2 208：第3面 ピット3 209：第4-2層

第22図 銅製品実測図

上のように、中世以降近代に至るまでの間、当地は水田や畠地など耕作地として利用されていたと考えられる。

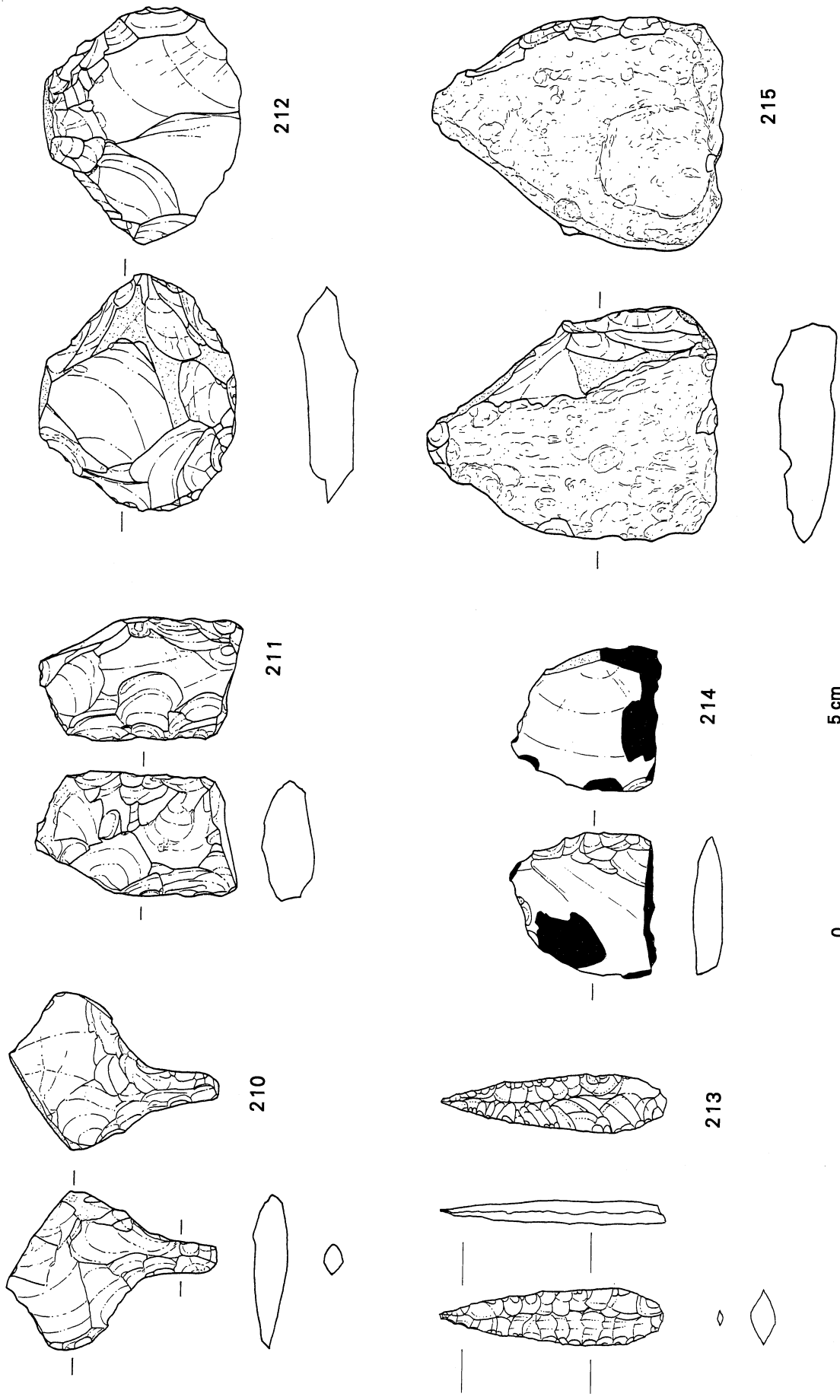
また第1面では、地震の液状化現象による噴砂が、調査区西端において観察できた。この噴砂は18・19世紀の土層を引き裂き、19世紀初頭の遺物包含層でパックされるように覆われており、近世後期に液状化現象を伴う強い地震が発生していたことを物語る。当該期に近畿地方を襲った大地震としては、天保元(1830)年の京都大地震と、安政元(1854)年の近畿地方を広範囲に襲った南海地震が挙げられる。今回検出した噴砂は、これらのいずれかの地震に比定できる可能性がある。

第4面と第5面では、古墳時代集落の存在を想定させる遺物が数多く出土した。第4面では、土坑2から金属状溶解物の付着した土器片や、落込み3からは、溶解途中で廃棄された銅鏡片が出土した。铸造関連の遺構は見つかっておらず、銅を鑄潰して何を鑄造したのかなどは、現時点では手がかりがなく不明と言わざるをえない。しかし調査地近隣に、銅を溶解する工房の



177~179: 第6層 180: 第7層 181~194: 第8層 195: 第9層 196・197: 第10層 198・199: 第6面 200: 出土層位不明

第 23 図 弥生土器・古式土師器拓本



ような施設が存在していた可能性を大いに示唆させるものである。第5面では古墳時代前期の遺構を中心に、遺構面直上とベース層中から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器がまとまって出土した。住居跡などの集落そのものの遺構は、今回は検出されなかったが、調査地が集落の縁辺部であった可能性は高いと思われる。

第8面と第9面については、グリッド部の発掘面積が限られていたため、全容を知ることは困難であった。第8面のピット群は、断面形・平面形とも不定形で、柱穴よりは樹木の根の痕跡の可能性が高いように思われる。第9面ピット11は柱穴の可能性も考えられたが、僅かに1基のみのため、時期も特定しがたく、今次調査では明確な生活遺構と断定することはできず、今後の調査にその可能性を託すこととなった。

ところでこれらに関連して、第2～4層と第8層以下の土層・遺構面において、時期差(土器の型式差)をほとんど見出だすことができなかった。前述のとおり、各層中にほぼ満遍無く後期以降の弥生土器や古式土師器の二次堆積遺物が含まれており、第8層以下の土器群についても、庄内～布留式土器の型式の細分化を試みたが、各層ごとに抽出した遺物の年代観と、層位関係とが逆転しているケースが見られるなど、予想を越えた複雑な堆積状況を呈していた。また整理作業段階においても、2～3層の層位間を越えて接合可能な土器片が多く見受けられた。

以上のような状況から判断すると、当調査地は丘陵背後からの雨水の流入や、地震などに起因する土砂崩落などによって、短期間の内に次々と堆積を繰り返しては、その上面に生活面が形成されていった結果の姿ではないかと考えられる。

(2) 外来系土器について

第9・10層を中心とする各遺物包含層から出土した土器の中には、北摂地域を中心とする在地系土器のほかに、器形や胎土などから、他地域から搬入された外来系土器が認められた。時期はおおむね弥生時代後期から古墳時代中期初頭にわたる。土器の産地と器種の内訳は以下の通りである。

[河内系]

主に現在の大阪府中部で製作されたと考えられる土器である。器形は北摂地域のものとは大差ないが、生駒山西麓地域特有のチョコレート色の胎土を特徴とする。弥生土器深鉢(156)・広口壺(174・184)、甕(49・200)があり、これ以外にも未図化のものがある。

[東海系]

主に東海地方で製作されたと考えられる土器である。棒状浮紋や羽状列点紋を持つ広口壺や、口縁部が「S」字状に屈曲する台付き甕を特徴とする。弥生土器広口壺(23)、土師器S字状口縁甕(26・35)とその台部(112・98)、ミニチュア台付き甕(111)などが見られる。

[吉備系]

主に山陽地方で製作されたと考えられる土器である。口縁部が直上に伸びる壺や、連続渦巻紋を特徴とする。弥生土器甕(24・161・134)、直口壺(42)、土師器二重口縁小型壺(68)などが見

られる。

[山陰系]

主に山陰地方で製作されたと考えられる土器である。曲線的に外反する二重口縁、鼓型器台、壺では頸肩部に飾られた櫛状工具による綾杉紋(刺突紋)などを特徴とする。土師器二重口縁壺(65)、壺(66)、二重口縁甕(79・120)、二重口縁大型鉢(61)、鼓型器台(56)などが見られる。鼓型器台は図示したもの以外にも、6片ほどが出土している。

[東四国系]

主に四国東部で製作されたと考えられる土器である。口縁が大きく外反して、端部が三角形を呈する広口壺や、鋭角的な形状の小型丸底壺や浅鉢、口縁調整をしない製塩土器などを特徴とする。土師器有段浅鉢(32)、小型丸底壺(85)、甕(93)、広口壺(78・146)、鉢形製塩土器(52)などが見られる。

[近江系]

主に現在の滋賀県で製作されたと考えられる土器である。櫛描き直線紋・列点紋・竹管紋付き円形浮紋などを特徴とする。弥生土器壺(187・190・197)などが見られる。

[西部瀬戸内系]

主に瀬戸内沿岸の西部で製作されたと考えられる土器である。壺では頸部に巡らした格子状の刻み目突帯(多条沈線)や、一度外反してから内側に狭まる二重口縁を特徴とする。弥生土器壺(137)、土師器二重口縁壺(74)などが見られる。

[韓式系土器・初期須恵器]

朝鮮半島南岸地域で製作された舶載品、あるいはその技法を用い日本国内で製作された土器である。体部に格子目叩きを施したり、ヘラ描き沈線を巡らす、壺や鉢を特徴とする。図化可能なものでは陶質土器広口壺(22)がある。図版21左下の3片は、接合はできないが、形状や色調から同一個体と思われる(実測部分は写真右の破片)。これ以外にも、別個体と思われる陶質土器壺体部片、軟質土器などの図化不可能な細片が数片見られる。

高坏形器台(28)は裾広がり脚裾部に、波状紋と竹管紋の組合せの紋様構成を持ち、長方形の透かしを穿つ。陶質土器、あるいは初期須恵器であれば最古段階に位置付けられるものである(註1)。

さて、以上の外来系土器の供給元であるが、東は近江・東海地方、西は河内・吉備・山陰・東四国・西部瀬戸内の各地域があり、それに朝鮮半島からの渡来人との関わりを示す韓式系土器がある。中でも河内や瀬戸内東部沿岸の土器が顕著である。これらの土器の移動は、瀬戸内海と河内湖間の、当時の人々や文物の交流を彷彿とさせるものである。こうした交流は、陸上交通のほかに水上交通も想定できるが、これを示唆しうる遺物として船形木製品(101)があげられる。

この種の遺物は、港や船などの水運に関わる祭祀遺物だとする意見もあり[吉田・高萩・西村2002]、瀬戸内沿岸地域の外来系土器の出土を考えるうえでも、興味深い遺物といえよう。

(3) 内面水銀朱附着土器について

第3面水田区画2・第5面ピット5・第6面土器群・第7層・第8層・第9層中から、土器の内面に赤色顔料が付着した古式土師器と一部の弥生土器が出土した。土器内面の赤色顔料について、理学的な分析調査を関西大学工学部金属材料研究室の杉本隆史教授に依頼した。X線回折調査の結果、内面の付着物は水銀朱であることが確認された。いわゆる「内面水銀朱附着土器」と呼ばれるもので、図化できたものが9点あり、さらに図化できなかった小片であるが、X線回折調査の可能なものが30点ほどある。

器種と時期の内訳は、弥生時代後期後半(摂津VI様式)の高坏(138)が1点(3%)、その他は布留式期古相を前後する頃の古式土師器に位置付けられるもので、小型浅鉢(33・62など)4点(13%)、小型丸底壺(8・83・85・86・108など)12点(40%)、高坏(16・55など)9点(30%)、甕2点(7%)、その他器種不明2点(7%)などがある。

このうち小型丸底壺(85)は、その鋭角的な形状から東四国系と思われる。高坏(16)は、焼成後に脚部を坏の根元近くから切断し、破断面を二次加工して坏に転用している。いずれの器種も鉢・小型丸底壺・高坏などで、本来は煮沸用の容器ではないが、外面に二次焼成を受けて煤が付着し、内面に色鮮やかな朱が残存する。これは水銀朱精製の際に、朱や砒素などを混ぜた液体を、調合あるいは分配するために、加熱作業を行なった痕跡と考えられる(註2)。

なお、現在考古学的に確認されている辰砂(水銀朱原石)採掘遺跡には、徳島県阿南市の若杉山遺跡と[岡山ほか1997]、三重県勢和村の丸山口水銀採掘坑跡群[小濱・中川・奥野2004]の2遺跡がある。しかし前述のとおり、東四国系土器の出土が見られ、朱附着土器の一つにも同地域の小型浅鉢が含まれることから、徳島県地方からの水銀朱原材料の搬入と、それに伴う人々の往来を示唆させる。

(4) 破碎された銅鏡について

第4面落込み3の埋土中から、吹田市内で初めてとなる、古墳時代の銅鏡片(204)が出土した。銅鏡は外縁・外区部の破片で、残存部分で6cm×4.5cm、厚さ0.35cm、重量52.5gで、復元径は27.8cmを測る大型鏡である。図面向かって左端が人為的に割られた後に、高熱を受けて溶ける途上の状態で、右端の破断面は人為的に割られた跡がある。

・溶解痕跡について

最も注目すべき特徴は熱を受けた痕跡があることであり、そこは湾曲が著しいうえに表面に黒色の付着物が残存して、飴状に曲がっている。この熱を受けた痕跡があることについては、前述と同様に、杉本隆史教授にX線回折調査をお願いした。X線回折調査の結果、800℃程度の高温度で加熱された時にできる酸化銅が検出されたこと、形態が軟化し、鏡の破面には破碎した時にできる面と溶解した時にできる面を共有していることなどから、この鏡は破碎され、溶解された途上の鏡と考えてよいのではないかという所見を頂いた。すなわち鏡を割りルツボに入れて溶解する途中、何らかの理由で中断された状態とみられる。また付着物に酸化ケイ素が

含まれており、鑄潰すのに用いたルツボの一部の可能性がある。なお、鏡が破碎され、高熱が加えられたとみられる時期は、出土遺構である落ち込み3に奈良・平安時代の土器片がわずかに認められ疑問が残るが、遺物のほとんどが古墳時代前期のものであることなど出土状況からみて、古墳時代に当てるのが妥当と判断される。

・型式について

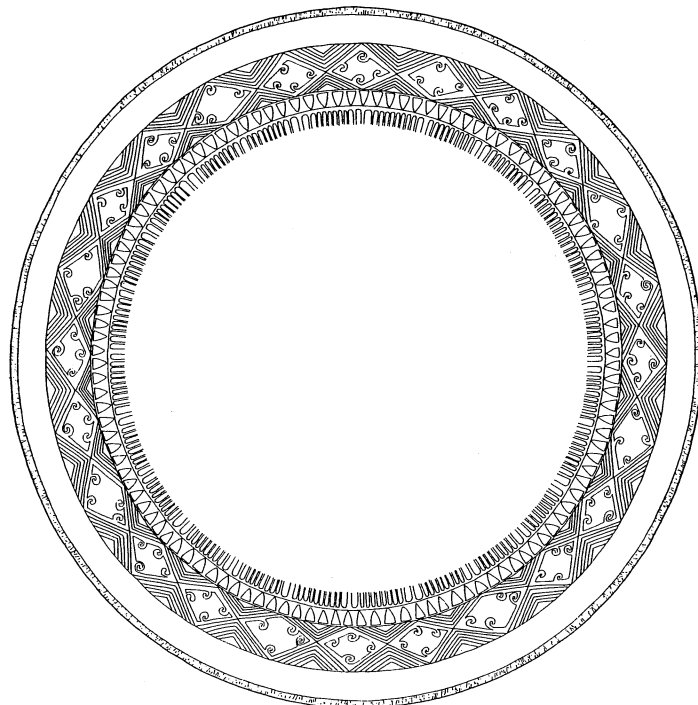
鏡の外縁は幅広い平縁である。外区は外側から菱雲紋・鋸歯紋・櫛歯紋の順に紋様がある。

菱雲紋は接続する菱形が作られ、その間には外側に5本、内側に

4本の山形紋が施される。菱雲紋にはそれぞれ4個の渦紋が付けられ、菱形の総数は24個に復元できる。鋸歯紋は菱雲紋の対角頂部に併せて5個の単位が設けられたようである。鋸歯紋は通常のものよりやや紋様単位が幅広い。菱雲紋は古墳時代の仿製鏡特有の描き方がなされており、大型鏡であることを考え併せると、古墳時代の仿製鏡とみられる [小林1965]。

鏡の種類については、内区が遺存していないので断定できないが、外区に残る紋様からおよその推定が可能である。鋸歯紋・櫛歯紋は古墳時代の鏡の紋様としては用例が多く特徴的なものではないが、菱雲紋・鋸歯紋・櫛歯紋の順に並ぶ紋様の組合せ類例は少なく、管見では豊中大塚古墳(大阪府豊中市)の第2主体部東槲出土の鏡など [柳本1987]、12例を数えるのみである(註3)。それらのほとんどが方格規矩鏡であるので、垂水遺跡出土鏡も方格規矩鏡と考えられる。では方格規矩鏡の変遷の中でどのような位置にあるのか。ここで再び菱雲紋に着目すると、垂水遺跡出土鏡は接続する菱形に渦紋が4個あり、これに対応する内区図像は直模式・J B I・II式などの獣像が比較的姿を留めるタイプのもと考えられ、4世紀代でも古い様相を持つと言える [田中1983]。

以上、垂水遺跡出土鏡についてまとめると、市内で初出土となる古墳時代前期の大型の仿製鏡で、方格規矩鏡の一部とみられ、4世紀の中でも古い時期のものと考えられる。理学的な分析から、破碎され溶解途上の鏡であって、古墳時代の鑄造関係資料とみられることなど極めて重要な成果が得られた。また、近隣に古墳時代前期の溶解施設があった可能性を示す非常に珍しい資料でもある。この施設で新たな鏡が鑄出されたのか、あるいは他の銅製品が鑄出された



第25図 仿製鏡復元図 (S=1/3)

のかは不明だが、古墳時代前期の鏡の製造を含めて、当時の鑄造実態がほとんど解明されていないだけに、今回の発見はその実態に一步迫ったとも言え、大きな成果であった。

(5) 総括

これまで、弥生時代中期から後期にかけて、相当大的な集落を形成していたと推定される垂水遺跡は、古墳時代に入ると遺構・遺物ともに減少することから、明らかに衰退し、代わって低地部の垂水南遺跡・五反島遺跡・蔵人遺跡などがその後に発展すると見られていた。しかし、今回行なわれた第24次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が検出されており、弥生時代に成立した集落が古墳時代前期まで存続していたことが明らかとなった。その後、沖積作用による海岸線の後退とともに、さらに引き続き南の低地の垂水南遺跡へと展開していったと見られる。垂水遺跡の立地は、対岸には大阪市の上町台地とその先端部に延びる天満砂堆が間近に迫っており、瀬戸内海から大阪湾を経て河内湖へと通ずる交通の要路に位置していたものと考えられる。

また外来系土器・溶解途中の銅鏡や鑄型状土製品・内面水銀朱付着土器、それに船形木製品などの特殊遺物の有り様は、当地が弥生時代以降も古墳時代前期頃にかけて隆盛し、交易の拠点として栄えて、水銀朱生産や鑄造に関連・従事した集落であったと考えられる(註4)。ただし古墳時代中期の土器は、二次堆積遺物として、韓式系土器や初期須恵器が少量出土しているのみで、古墳時代中期には集落が急速に衰退していったものと思われる。

なお、垂水遺跡とその周辺の遺跡では、弥生時代から古墳時代前期にかけて多くの集落が発展したにも関わらず、明確な墓はほとんど確認されていない。昭和49(1974)年には垂水遺跡北方の千里山西3丁目の造成地で、古墳の石室と考えられる赤色顔料が塗布された石材83点が発見されて、丘陵上に前期古墳の存在が推測されるに至り「垂水西原古墳」と命名された。垂水地域における古墳時代前期の古墳祭祀と朱の実態を考える上で、注目すべき古墳と考えられる。

【註】

- 1) 本品はいわゆる「楠見式土器」であるといえる。なお楠見式土器は、古新羅地域(現在の大韓民国慶尚北道慶州市付近)からの舶載品であるとする説と、窯跡は未発見ながら、和歌山県紀ノ川流域で焼かれた初期須恵器だとする説とがあり、現在では後者の説が優勢になりつつある。
- 2) 我が国の弥生時代以降における施朱の風習は、古代中国の神仙思想に基づき、仙薬(飲むと不老不死の仙人になるという霊薬)の調合・製造が行なわれたとされ、弥生時代後期以降に拡大し、古墳時代前期の古墳祭祀と結びつき、葬送儀礼の呪術行為として普及したとされる[大久保1998、北条1998]。
- 3) 菱雲紋・鋸齒紋・櫛齒紋の順で並ぶ紋様構成を持つ方格規矩鏡は、全国での出土例に以下のものがある。

大阪府豊中市の豊中大塚古墳(径 18.1cm・5世紀代)、豊中市の南天平塚古墳(径 21.0cm)、京都市の百々池古墳(径 22.7cm)、京都市の稻荷藤原古墳 2 面(径 25.9cm・径 23.7cm)、京都府相楽郡山城町の平尾城山古墳(径 16.7cm・4世紀代)、京都府長岡京市近郊出土(径 15.0cm)、奈良県天理市出土(径 17.8cm)、福岡県宗像市の沖

の島沖津宮祭祀遺跡(径 17.8cm)、静岡市の三池平古墳(径 19.5cm・4 世紀後半)、埼玉県児玉郡美里町の長坂聖天塚古墳(径 22.5cm・5 世紀前半)。

4) 合田幸美氏によれば、流通拠点集落の共通項として、外来系土器・金属器(銅釧・仿製鏡など)・朱や朱を精製した遺物・希少遺物を挙げる [合田 2000]。

【引用・参考文献】

- ・合田幸美 2000 「溝咋遺跡出土の外来系土器について」『溝咋遺跡』(その 1・2) (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・市毛勲 1998 『朱の考古学』 雄山閣
- ・大久保徹也 1998 「弥生時代の内面朱付着土器」『考古学ジャーナル』No.438 ニュー・サイエンス社
- ・岡山真知子ほか 1997 『辰砂生産遺跡の調査－徳島県阿南市若杉山遺跡－』 徳島県立博物館
- ・小濱学・中川明・奥野実 2004 『勢和村水銀採掘坑跡群発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- ・小林行雄 1965 『古鏡』 学生社
- ・寒川旭 1992 『地震考古学』 中央公論社
- ・杉原荘介・大塚初重編 1991 『合本・土師式土器集成』本編上巻 東京堂出版
- ・田中琢 1983 「方格規矩四神系倭鏡分類試論」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- ・福岡澄男 2002 「広がる交流」『大河内展－弥生社会の発展と古墳の出現－』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・北条芳隆 1998 「神仙思想と朱と倭人－弥生時代から古墳時代へ－」『考古学ジャーナル』No.438 ニュー・サイエンス社
- ・柳本照男ほか 1987 『摂津豊中大塚古墳』(豊中市文化財調査報告第 20 集) 豊中市教育委員会
- ・吉田野乃・高萩千秋・西村公助 2002 『卑弥呼の時代と八尾－河内の大集落出現と古墳の始まり－』 八尾市立歴史民俗資料館
- ・米田文孝 1983 「搬入された古式土師器－摂津・垂水南遺跡を中心として－」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』 関西大学考古学研究室
- ・和田晴吾 1986 「金属器の生産と流通」『岩波講座日本考古学』3 岩波書店

報告書抄録

ふりがな	たるみいせきはくつちょうさほうこくしょI
書名	垂水遺跡発掘調査報告書I
副書名	垂水遺跡第24次発掘調査
巻次	
シリーズ名	
編集者名	堀口健二 西本安秀 田中充徳
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL 06(6384)-1231
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たるみ 垂水遺跡	すいたしたるみちょう 吹田市垂水町 1丁目731-28、 -29	27205	86	34° 45' 57"	135° 30' 16"	19980422～ 19980618	205	共同住宅 の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水遺跡	集落遺跡 水田跡	古墳時代 平安時代 鎌倉時代 江戸時代	ピット、 落ち込み 土坑 溝 水田畦畔 足跡 流路	石器 弥生土器(後期)、 銅鏡、銅鏃、古式土師器 木器(船形木製品) 鋳形状土製品 韓式系土器、須恵器 瓦器、土師器、陶器 磁器、銭貨、土製玩具	銅鏡(破碎鏡)が出土 鑄造関連遺物が出土 内面水銀朱付着土器が出土 外来系土器が出土

遺物観察表

〈遺物観察表凡例〉

- ・挿図に掲載した遺物は全て観察表で収載しているが、写真のみ図版で掲載したものについては収載していない。
- ・観察表中の記述内容は遺物番号、器種・形式、層位・遺構、残存状況、寸法(cm)、色調、略年代、産地、備考の順に記した。産地の項で記述なき箇所は、在地産を表している。略年代は時代名の後に()して世紀を並記しているが、古墳時代前期以前については、時代区分名のみとした。
- ・色調は小山正忠・竹原秀雄1987 『新版・標準土色帖』を使用し、外面・内面・断面の順に記した。

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
1	弥生土器 手箱形土器	E12付近	第1面 落込み1	胴部1/4強残存	口径12.0 胴径13.2 器高7.2	全) 灰白色2.5YR8/1~8/2	弥生時代後期後半	口縁部内側に覆部の接合痕あり 胴径は凸帯を含まず
2	瓦器椀	E12付近	第1面 落込み1	口縁部1/7残存	口径15.0 残高4.7	外内) 灰色N4/0 ~灰白色7.5YR8/1 断) 灰白色7.5Y2/1	平安時代 (11世紀末~12世紀前半)	口縁内面に沈線を施す 楕圓型
3	陶器椀		第1面 溝1	高台部1/2弱残存	高台径4.8 残高2.1	施釉) 明緑灰色5P7/1 (裏) にぶい赤褐色2.5YR5/3 断) 明紫灰色5P7/1	江戸時代 (18~19世紀)	内面に呉須絵あり 見込みに重ね焼き痕あり
4	土師器小皿		第2面 落込み2	全体の3/5残存	口径11.6 器高2.7	全) にぶい黄褐色10YR7/3	室町時代 (14世紀後半~15世紀)	手づくね成形
5	土師器小皿		第2面 溝3	口縁部1/3残存	口径8.4 器高1.3	外) 褐色7.5YR7/3 内) にぶい黄褐色10YR7/3 断) 浅い黄褐色10YR8/4	江戸時代 (17世紀以降)	ロクロ成形 灯明皿 口縁内外面に灯芯油痕(タール状物質)が付着
6	土製玩具船		第2面 ピット1	全体の7/10残存	残存長5.9 残存幅3.8 船底幅2.1	全) 橙色7.5YR7/6	江戸時代 (18~19世紀)	型成形後にナデ調整 表面に金雲母
7	弥生土器 水差し形土器	E10付近	第3面 水田区画5	体部片	残高9.5	全) 灰白色7.5YR8/1	弥生時代後期	山陰系か
8	土師器小型丸底壺		第3面 水田区画2	胴部1/2残存	口径11.8 胴径9.1 残高5.3	全) にぶい黄褐色10YR7/3	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着
9	弥生土器甕		第3面 水田区画6	口縁部1/3残存	口縁10.0 胴径13.2 残高8.6	外) 明黄褐色10YR6/6 内) にぶい黄褐色10YR5/3 断) にぶい黄褐色10YR4/3	弥生時代中期後半	体部外面は指押さえ後にナデ
10	弥生土器鉢		第3面 水田区画6	口縁部1/6残存	口径15.2 残高5.6	外断) 灰白色10YR7/1 内) 灰白色10YR8/2	弥生時代後期後半	
11	陶器椀鉢		第3面 水田区画6	底部1/7残存	口径17.0 残高3.2	全) 橙色7.5YR6/8	中世	7条1組みの櫛り目 焼成は土師質に近い
12	土師器杯	E5.5- N5.3付近	第3面 水田区画5	ほぼ完形	口径16.3 器高3.9	全) にぶい黄褐色10YR7/3	平安時代 (10世紀代)	
13	土師器小皿		第3面 水田区画4	完形	口径8.9 器高1.6	外) 灰白色7.5YR8/1 内) 灰白色7.5YR8/2	平安時代末~鎌倉時代 (12~13世紀)	ロクロ成形 底部回転糸切り

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
14	製塩土器		第4面 土坑2	台部残存	台径4.4 残高5.1	全) 灰白色10YR 8/2	古墳時代前期	
15	土師器小型丸底壺	E12 - E13 N5 - N6	第4面 土坑2	口縁部1/4残存	口径10.6 胴径8.0 残高6.0	外断) 淡黄色2.5Y 8/3 内) 灰白色10YR 8/2	古墳時代前期	
16	土師器坏		第5面 ピット5	坏部完存	口径17.8 残高8.3	外) 灰黄褐色10YR 6/2 内断) にぶい橙褐色5YR 7/3	古墳時代初頭～前期	内面に水銀朱が付着 外部に二次焼成痕 高坏の脚を切断して二次加工
17	土師器甕		第7面 墓込み5	口縁部1/3残存	口径12.8 残高7.0	外) 明黄褐色10YR 6/6 内断) 黄灰色2.5Y 5/1	古墳時代前期	体部外面は丁寧なナデ、体部に1条の線刻あり 布留式甕
18	陶器土鍋		第2層	全体1/2残存	口径15.4 底径5.4 器高9.6	施釉) 淡黄色5Y 8/4 露胎外) 灰白色10Y 7/1 露胎内) 灰白色5Y 8/2	江戸時代 (18世紀後半 ～19世紀初頭)	舞子焼もしくは明石焼
19	陶器摺鉢	E0 - E6	第2層	口縁部1/6弱残存	口径28.4 残高6.7	外) 暗赤褐色2.5Y 3/2 内) 褐灰色5YR 4/1 断) 褐灰色7.5YR 5/1 ～にぶい赤褐色5YR 5/3	江戸時代 (18世紀後半 ～19世紀初頭)	8条1組みの摺り目 塀焼もしくは明石焼
20	土製玩具土人形	E12 - E20	第4 - 1層	頭部欠損	残高6.3 左右幅3.6 前後幅2.5	全) 灰白色10YR 8/2	江戸時代 (17世紀前半以降)	素焼き+型合わせ成形 大坂系
21	軟質陶器玩具南瓜		第4 - 2層	全体2/5残存	器高3.2 胴径6.7 底径4.0	施釉) 明緑灰色7.5GY 7/1～ 緑灰色7.5GY 5/1 下地) 明赤褐色2.5YR 8/5	江戸時代 (18～19世紀)	上下分割成形
22	陶質土器広口壺	E4 - E8 N4 - N8	第5層	頸部1/3残存	口径16.9 残高7.9	外内) 青灰色5B 6/1～5/1 断) 灰白色N 7/0	古墳時代中期 (5世紀前半)	韓式系土器 体部外面に格子目叩き
23	弥生土器広口壺	E13 - E18 N3 - N5	第6層	口縁部1/9残存	口径20.0 残高3.1	全) 灰白色2.5Y 8/2	弥生時代後期	口縁外面に棒状浮紋、内面に羽状列点紋を施す 東海系
24	土師器甕	E13 - E18 N3 - N5	第6層	口縁部1/2残存	口径11.1 残高3.8	外) 暗灰黄色2.5Y 5/2 内) 灰黄褐色10YR 6/2 断) 黄灰色2.5Y 4/1	古墳時代前期	吉備系(酒津式土器)
25	土師器高坏	E18 - E22 N3 - N5	第6層	坏部～脚部残存	口径17.6 残高13.4	外) にぶい黄褐色10YR 7/3 内断) にぶい褐色7.5YR 6/3	古墳時代前期	
26	土師器S字状口縁甕	E22 - E26 N3 - N8	第6層	口縁部1/2残存	口径13.0 残高3.8	全) 灰白色2.5Y 8/1～8/2	古墳時代前期	東海系

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
27	弥生土器二重口縁壺	E18-E22 N3-N8	第6層	口縁部1/10残存	口縁16.7 残高3.1	外) 灰白色10YR8/2 内断) 淡黄色2.5Y8/3	弥生時代後期後半 ~古墳時代初頭	
28	陶質土器もしくは 須恵器器台	E13-E18 N3-N5	第6層	裾径1/20残存	裾径33.0 残高2.8	外内) 灰白色N8/0 ~灰色10Y5/1 断) 灰白色7.5Y7/1	古墳時代中期 (5世紀初頭)	14条1組みの波状紋の上から竹管紋を施す 長方形の透かしを穿つ 楠見式土器
29	須恵器坏身	E19-E20 N3-N4	第6層	高台1/4残存	高台径9.4 残高2.2	全) 灰色10Y6/1	奈良時代 (8世紀)	
30	須恵器坏身		第6層	高台1/7残存	口径16.8 高台径12.3 器高3.9	外) 灰白色N7/0 内断) 明青灰色5PB7/1	奈良時代 (8世紀前半)	
31	須恵器壺	E18-E22 N3-N5	第6層	底部1/4残存	底径11.0 残高5.5	外内) 明青灰色5PB7/1 断) 浅黄色2.5Y7/4	平安時代 (9世紀以降)	
32	土師器浅鉢	E14ライン	第7層	口縁部1/6残存	口径16.6 胴径12.7 残高4.9	全) 灰白色10YR8/2	古墳時代初頭	東四国系
33	土師器有段浅鉢		第7層	頸部1/5残存	胴径13.4 残高4.0	全) 灰白色10YR8/2	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
34	土師器有段浅鉢		第7層	口縁部1/8残存	口径16.7 残高5.3	外) にぶい黄褐色10YR6/3 内) にぶい黄褐色10YR7/3 断) 橙色5YR6/8	古墳時代前期	
35	土師器S字状口縁壺		第7層	口縁部1/6残存	口径11.4 残高4.8	全) 灰黄褐色10YR6/2	古墳時代前期	東海系
36	土師器小型丸底壺		第7層	口縁部1/2残存	口径9.8 胴径8.8 残高7.0	外内) にぶい黄褐色10YR7/2 断) 灰白色10YR7/1	古墳時代前期	
37	土師器坏	E4-E8 N5-N8	第7層	口縁部1/12残存	口径13.6 残高3.0	全) 浅黄色2.5Y7/3	奈良時代 (8世紀)	
38	弥生土器広口壺	E22-E26	第8層	口縁部1/4残存	口径21.0 残高6.8	外内) 灰黄色2.5Y7/2 断) 灰黄色2.5Y6/2	弥生時代後期	
39	弥生土器広口壺	E16-E17 N4-N6	第8層	口縁部1/3残存	口径18.0 残高5.9	全) にぶい灰黄褐色10YR8/2	弥生時代後期	
40	弥生土器広口壺	E8-E10	第8層	口縁部1/4残存	口径16.8 残高6.6	外内) 灰白色10YR8/1 断) にぶい黄褐色10YR7/3	弥生時代後期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
41	弥生土器 手炬形土器	E16 - E17 N4 - N6	第8層	胴部1/6残存	口径13.4 胴径17.4 残高8.0	全) 灰白色2.5Y7/1	弥生時代後期後半	胴径は突帯を含まず
42	弥生土器直口壺	E14 - E16 N4 - N6	第8層	体部1/10残存	胴径20.0 残高5.1	外) 灰白色2.5Y8/1~7/1 内) 赭灰色N3/0 断) 灰白色2.5Y8/1	弥生時代後期	体部に連続渦巻紋 手炬形土器の可能性もあり 吉備系
43	弥生土器蓋	E20 - E23 N6 - N8	第8層	全体1/2残存	蓋径11.3 器高1.0	全) 灰黄色2.5Y7/2	弥生時代	周縁に二孔一対の小孔
44	弥生土器蓋	E23 - E24 N6 - N8	第8層	口縁部1/6残存	蓋径9.0 残高0.8	全) 浅黄色2.5Y7/3	弥生時代	周縁に二孔一対の小孔
45	弥生土器小型壺	E10 - E14 N8付近	第8層	底部1/2残存	底径3.8 胴径6.0 残高4.6	外) 灰青褐色10YR6/2 内断) にぶい黄褐色 10YR7/2	弥生時代後期	
46	土師器甕	E18ライン	第8層	口縁部1/5残存	口径15.2 残高5.3	外断) にぶい黄褐色 10YR4/3 内) 灰黄褐色10YR4/2	古墳時代初頭	庄内式甕
47	土師器甕	E18ライン	第8層	口縁部1/4残存	口径15.9 残高8.4	外断) にぶい黄褐色 10YR7/1 内) 灰黄褐色10YR6/1	古墳時代初頭	V様式系甕
48	土師器甕	E14 - E16 N8	第8層	口縁部1/4残存	口径15.8 残高4.2	外) 灰黄色2.5Y6/2 内断) 灰黄色2.5Y7/2	古墳時代初頭	庄内式甕
49	土師器甕	E14 - E16 N4 - N6	第8層	口縁部1/10残存	口径17.0 残高3.7	外) にぶい褐色7.5YR6/3 内) 明褐色7.5YR7/2 断) 灰白色7.5YR8/2	古墳時代初頭	庄内式甕 口縁部外面に1条の編刻あり 河内系 生駒山西麓産の胎土
50	土師器壺	E26付近 N2 - N3	第8層	口縁部1/4残存	口径5.8	外) 灰白色10YR8/1 内) 灰白色2.5YR7/1 断) 灰白色2.5Y7/1~8/1	古墳時代初頭	肩部に7条1組みの山形紋を施す
51	土師器二重口縁壺	E12 - E14 N6 - N8	第8層	口縁部1/9残存	口径23.5 残高4.9	外内) にぶい黄褐色10YR7/2 断) 褐灰色10YR6/1 ~にぶい黄褐色10YR7/2	古墳時代初頭	
52	製塩土器	E12 - E14 N6 - N8	第8層	鉢部4/5残存	口径12.0 残高7.8	外) 灰白色2.5Y8/2~8/1 内) 灰白色2.5Y8/1~7/1 断) 灰白色2.5Y8/1	古墳時代初頭~前期	口縁部未調整 53の台部と同一個体か 東四国(讃岐)系
53	製塩土器	E14 - E16 N6 - N8	第8層	台部1/3残存	残高3.8 底径6.2	外内) 灰黄色2.5Y6/1 ~5/1 断) 灰白色5Y7/1	古墳時代初頭~前期	52の鉢部と同一個体か

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
54	製塩土器	E16 - E18 N6 - N8	第8層	台部完存	底径3.7 残高3.6	全) 灰白色5Y8/1	古墳時代初頭～前期	
55	土師器高坏	N3 - N4	第8層	口縁部1/4残存	口径18.4 残高7.0	外) 煤付着のため不明 内) 水銀朱付着のため不明 断) にぶい黄褐色10YR7/3	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
56	土師器鼓形器台	E20 - E21 N3 - N4	第8層	口縁部1/3残存	口径19.6 残高5.1	外) 灰白色2.5Y8/1 内) 浅黄褐色10YR8/3 断) 灰白色10YR8/2	古墳時代初頭～前期	山陰系
57	土師器 ニ子チュア土器高坏	E12 - N4	第8層	脚部残存	残高3.0	全) 灰白色10YR8/1	古墳時代	
58	土師器 ニ子チュア土器	E22ライン	第8層	約1/2残存	口径3.8 残高4.4	外断) 灰白色10YR8/1 内) 灰白色10YR8/2	古墳時代	手づくね
59	土師器台付き鉢	E8 - E10 N8付近	第8層	台部完存	残高2.5 底径5.4	外内) 灰白色10YR8/2 断) 灰黄色2.5Y7/2	古墳時代初頭～前期	
60	土師器台付き鉢	N4 - N5	第8層	台部残存	底径7.8 残高4.3	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代初頭～前期	
61	土師器 二重口縁大型鉢	E16 - E18 N8付近	第8層	頸部～体部	胴径40.8 残高23.3	全) にぶい黄褐色10YR7/2	古墳時代前期	肩部に6条1組みの波状紋を施す 山陰系
62	土師器浅鉢	E25 - E26 N0 - N2	第8層	全体1/2残存	口径16.1 残高5.3	外) にぶい黄褐色10YR7/3 内) にぶい黄褐色10YR7/2 ～にぶい褐色7.5YR7/4 断) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
63	土師器有段浅鉢	E14 - E18 N4 - N8	第8層	口縁部1/3残存	口径15.4 残高5.5	外内) 褐色7.5YR6/6 断) にぶい褐色7.5Y7/4	古墳時代前期	
64	土師器小型鉢	E10 - E12 N6 - N8	第8層	口縁部1/8残存 体部1/2残存	口径15.0 残高6.8	外) 灰黄褐色10YR6/2 内断) にぶい黄褐色10YR7/2	古墳時代前期	
65	土師器二重口縁壺	E22 - E24 N1 - N2	第8層	頸部1/3残存	口径21.5 残高16.1	外) 灰白色5Y8/1～7/1 内) 灰白色10Y4/1 ～灰白色5Y8/1 断) 灰白色2.5Y8/1	古墳時代前期	頸肩部に沈線と綾形紋を施す 山陰系
66	土師器壺	E8 - E10 N8付近	第8層	頸部1/6残存	残高11.8 頸部径12.3	外) 灰白色10YR8/1～8/2 内断) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	頸肩部に綾形紋と竹管紋を施す 山陰系
67	土師器直口壺	E12 - E14 N6 - N8	第8層	頸部1/4残存	口径21.8 残高9.3	外内) 灰黄色2.5Y7/2 断) 灰オリーブ色5Y4/2	古墳時代前期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
68	土師器小型壺	E13ライン	第8層	口縁部1/2残存	口径7.2 残高2.8	全) 灰白色2.5Y8/2 ~黄灰色2.5Y5/1	古墳時代前期	吉備系
69	土師器壺	E10 - E12 N6 - N8	第8層	口縁部7/10残存	口径12.0 残高7.8	全) 灰褐色7.5YR6/2		
70	土師器直口壺	E12 - E14 N6 - N8	第8層	頸径部4/5残存	頸径18.0 残高8.4	全) 灰白色2.5Y8/1	古墳時代初頭~前期	
71	土師器直口壺	E14 - E16 N4 - N6	第8層	口縁部残存	口径17.9 残高8.4	全) 灰黄褐色10YR6/2	古墳時代前期	
72	土師器甕	E14ライン	第8層	7/10残存	口径14.0 胴径15.8 器高20.4	全) 灰黄色2.5Y7/2	古墳時代前期	
73	土師器二重口縁壺	E22 - E24 N1 - N2	第8層	口縁部1/2残存	口径22.4 残高10.2	外) 灰白色10YR8/1~7/1 内) にぶい黄褐色10YR7/2 断) 灰白色10YR7/1	古墳時代前期	
74	土師器二重口縁壺	E20 - E22 N4 - N6	第8層	口縁部1/8残存	口径8.2 残高4.5	外) 灰白色10YR7/1 内) にぶい黄褐色10YR7/2 断) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	西部瀬戸内系
75	土師器壺	E13ライン	第8層	口縁部1/5残存	口径12.7 残高6.5	外) 灰褐色7.5YR6/2 ~褐色7.5YR6/8 内断) にぶい黄褐色 10YR7/2	古墳時代	
76	土師器広口壺	E24 - E25 N2 - N4	第8層	口縁部1/3残存	口径15.4 残高5.0	外) 灰白色2.5Y8/2 内) 灰白色2.5Y8/1 断) 灰色5Y5/1	古墳時代初頭	
77	土師器甕	E22 - E24 N2 - N4	第8層	口縁部1/3残存	口径16.4 残高9.2	外内) にぶい黄褐色10YR7/2 ~黄褐色10YR5/6 断) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	
78	土師器広口壺	E12 - E14 N6 - N8	第8層	口縁部3/5残存	口径19.2 残高7.3	全) にぶい黄褐色10YR7/3	古墳時代前期	東四国系
79	土師器二重口縁壺	E22 - E26	第8層	口縁部1/3残存	口径12.6 残高5.6	外断) 灰白色7.5Y7/1 内) 灰色7.5Y6/1	古墳時代前期	頸部に線状の磨き 山陰系
80	土師器小型丸底壺	E22 - E24 N1 - N2	第8層	口縁部1/5残存	口径7.0 胴径7.6 残高7.6	外) 灰白色2.5GY8/1 内) 明オリーブ灰2.5GY8/1 断) 灰7.5Y6/1	古墳時代前期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
81	土師器小型丸底壺	E12 - E14 N6 - N8	第8層	口縁部3/5残存	口径11.3 胴径8.1 器高7.6	全) にぶい黄褐色10YR 6/3	古墳時代前期	
82	土師器小型粗製鉢	E12 - E14 N6 - N8	第8層	口縁部1/8残存	口径10.6 残高4.5	外内) 暗灰色2.5Y 5/2 断) 黄灰色2.5Y 5/1	古墳時代前期	
83	土師器小型丸底壺	E8 - E10 N8付近	第8層	全体1/2残存	口径11.9 胴径6.7 器高8.2	外内) 灰白色10YR 8/1 断) 明褐色5YR 7/2	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成度 口縁～体部外面は細かい磨き
84	土師器小型丸底壺	E8 - E10 N8付近	第8層	口縁部1/3残存	口径9.2 胴径8.4 残高7.2	全) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	
85	土師器小型丸底壺	E12 - E14 N6 - N8	第8層	全体4/5残存	口径11.9 胴径8.9 器高7.0	外断) 灰黄色2.5Y 7/2 内) 灰黄色2.5Y 6/2	古墳時代前期	東四国系 内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成度
86	土師器小型丸底壺	E1 - E12 N6 - N8	第8層	全体1/2残存	口径8.6 残高3.0	外) 煤付着のため不明 内) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成度
87	土師器小型丸底壺	E22 - E24 N1 - N2	第8層	口縁部1/3残存	口径11.2 胴径9.5 残高4.5	断) 灰白色10YR 7/1 ～褐色10YR 4/1	古墳時代前期	外面は著しく摩滅
88	土師器硝壺	E18ライソ	第8層	完形	口径4.1 胴径5.8 残高9.3	外) にぶい黄褐色10YR 7/2 内) 灰白色10YR 8/1	古墳時代初頭～前期	内面は指ナデ
89	土師器甕	E25 - E26 N1 - N3	第8層	ほぼ完形	口径12.0 胴径16.4 器高16.5	全) 浅黄褐色10YR 8/3	古墳時代前期	布留式甕 細かい叩き目の上からハケ調整
90	土師器甕	E25 - E26 N1 - N3	第8層	口頸部1/8残存	口径13.8 残高6.9	外) 黒褐色2.5Y 2/1 内断) にぶい黄褐色10YR 4/3	古墳時代前期	布留式甕
91	土師器甕	N4 - N5	第8層	口縁完存	口径14.3 器高6.9	外) 灰白色2.5Y 8/1～7/1 内断) 灰白色2.5Y 8/2	古墳時代前期	布留式甕
92	土師器S字状口縁壺	E14 - E16 N4 - N6	第8層	口縁部1/4残存	口径13.0 残高4.0	外断) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰黄色2.5Y/2	古墳時代前期	東海系
93	土師器甕	E25 - E26 N1 - N3	第8層	口縁部1/5残存	口径15.2 残高7.2	全) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代前期	東四国系 体部外面はハケ調整

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
94	土師器甕	E 8 - E 13 N 6 - N 8	第 8 層	口縁部 1/2 残存	口径 10.8 胴径 12.0 器高 10.9	外断) にぶい黄橙色 10 Y R 7/3 内) 灰黄褐色 10 Y R 6/2	古墳時代前期	
95	土師器甕	E 18 ライン	第 8 層	口縁部 1/4 残存	口径 12.6 胴径 13.8 残高 7.2	外) 暗灰黄色 2.5 Y 4/2 内断) 暗灰黄色 2.5 Y 5/2	古墳時代前期	外面に櫛状工具による削りを施す
96	土師器甕	E 19 - E 20 N 2 - N 4	第 8 層	口縁部 1/2 残存	口径 13.2 残高 3.1	外) にぶい黄橙色 10 Y R 7/3 ~ 褐色 10 Y R 6/1 内) 灰黄褐色 10 Y R 6/2 断) 灰白色 10 Y R 8/2	古墳時代前期	
97	土師器甕	N 4 - N 5	第 8 層	口縁部 1/2 残存	口径 9.6 器高 6.0	外) 灰白色 2.5 Y 8/1 内断) 灰白色 2.5 Y 8/2	古墳時代前期	布留式甕
98	土師器台付き甕	E 18 - E 19 N 2 - N 4	第 8 層	台部完存	残高 6.5 裾径 9.2	外) 灰白色 2.5 Y 8/1 内) にぶい黄橙色 10 Y R 7/2 断) 灰白色 10 Y R 7/1 ~ 8/1	古墳時代初頭~前期	東海系
99	土師器坏	E 22 ライン	第 8 層	口縁部 1/4 残存	口径 9.9 残高 4.0	外内) にぶい黄橙色 10 Y R 7/2 ~ 灰黄褐色 10 Y R 6/2 断) にぶい黄橙色 10 Y R 7/2	奈良時代 (8世紀)	
100	木器縦櫛	E 26 N 2 - N 3	第 8 層	頭部~腰部	残長 3.3 全幅 3.8 厚み 3.0			刻歯式だが、結歯式縦櫛の横木を表現した“痕跡器官”あり 紐目板使用
101	舟形木製品 もしくは 船形容器	E 1.25 - N 6	第 8 層	完形	全長 20.3 全幅 8.5 全高 5.8			未完成品か
102	弥生土器甕	E 14 - E 22 N 6 - N 8	第 9 層	口縁部 1/3 残存	口径 14.7 残高 9.1	外) 灰白色 2.5 Y 7/1 内) 灰黄色 2.5 Y 7/2 断) 灰白色 2.5 Y 8/2	弥生時代後期	
103	弥生土器甕	E 18 ライン	第 9 層	全体 3/5 残存	胴径 18.5 底径 3.8 器高 21.3	外) 灰白色 2.5 Y 8/1 内断) 灰色 5 Y 6/1	弥生時代後期	体部二分割成形
104	弥生土器高坏	E 22 - E 23 N 0 - N 4	第 9 層	ほぼ完形	口径 22.4 器高 16.4 裾径 15.2	全) 灰白色 2.5 Y 7/1	弥生時代後期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
105	土師器小型丸底壺	E14付近	第9層	口縁部1/3残存 体部完存	口径9.6 胴径6.9 器高6.7	全) 灰黄色2.5Y7/2	古墳時代前期	
106	土師器小型丸底壺	E12-E18 N2-N4	第9層	体部完存	口径6.3 残高3.9	外断) 明褐色5YR7/1 内) 灰白色7.5YR8/1	古墳時代前期	
107	土師器小型丸底壺	E12-E14 N4-N6	第9層	体部ほぼ完存	口径7.3 残高6.2	外内) 灰黄褐色10YR6/2 断) にぶい黄褐色10YR7/2	古墳時代前期	
108	土師器小型丸底壺	E12-E14 N4-N6	第9層	口縁部1/5残存	口径13.0 残高5.4	外) 残付着のため不明 内) 褐色5YR7/4 断) 灰白色7.5YR8/1	古墳時代前期	内面に水銀朱が付着 外面に二次焼成痕
109	土師器台付き鉢	E14-E16 N4-N5	第9層	台部完存	台径4.8 残高5.1	全) 灰褐色7.5Y6/3~4/1	古墳時代初頭前後	
110	製塩土器	E12-E18 N2-N4	第9層	脚部残存	底径4.0 残高3.8	外) 灰白色10YR8/2 内断) にぶい褐色5YR7/3	古墳時代前期	摩滅著しい
111	土師器ミニチュア 土器台付鉢	E13ライン	第9層	台部完存	残高2.1	全) 灰白色10YR8/1	古墳時代初頭~前期	東海系
112	土師器台付き壺	E12-E14 N4-N6	第9層	台部約3/4残存	底径5.4 残高3.9	外) にぶい黄褐色10YR7/2 内) 灰黄褐色10YR6/2 断) にぶい黄褐色10YR7/3	古墳時代前期	東海系
113	土師器小型器台	E16-E17 N4-N6	第9層	脚部1/2残存	裾径11.5 残高6.5	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	
114	土師器壺	E13ライン	第9層	口縁1/4残存	口径12.0 胴径18.7 器高17.8	外) にぶい褐色7.5YR8/2 内) 灰白色2.5Y8/2 断) にぶい褐色7.5YR6/3	古墳時代前期	布留式壺
115	土師器壺	E13ライン	第9層	全体3/5残存	口径12.4 胴径16.8 残高12.8	全) 灰白色10YR8/1~5/1	古墳時代前期	布留式壺
116	土師器壺	E13ライン	第9層	全体2/5残存	口径13.0 胴径16.8 器高17.5	外) 浅黄褐色7.5YR8/4 内) 灰白色7.5YR8/2 断) 淡褐色5YR8/3	古墳時代前期	布留式壺
117	土師器壺	E13ライン	第9層	口縁部3/4残存	口径11.7 残高5.5	外) 灰白色2.5Y8/2 内断) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	布留式壺

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
118	土師器甕	E13ライン	第9層	全体3/5残存	口径12.4 胴径16.8 残高12.8	全) 灰白色10YR 8/1 ～灰白色10YR 5/1	古墳時代前期	布留式甕
119	土師器直口壺	E12-E18 N2-N4	第9層	口縁部1/3残存	口径18.0 残高8.2	外内) 灰白色2.5Y 8/2 断) 灰白色2.5Y 7/1	古墳時代初頭～前期	
120	土師器二重口縁壺	E12-E18 N4-N6	第9層	口縁部1/2残存	口径12.0 残高4.2	外) 黒褐色2.5Y 3/1 内) 黄灰色2.5Y 5/1 断) 灰黄色2.5Y 6/2	古墳時代前期	山陰系
121	土師器残鉢	E13付近	第9層	口縁部2/3残存	口径14.8 残高4.6	全) 明褐色7.5Y 7/2	古墳時代前期	
122	土師器小型壺	E14-E16 N4-N6	第9層	口縁部1/4残存	口径9.8 胴径9.8 残高5.4	外) 暗灰黄色2.5Y 5/2 内) 灰黄色2.5Y 6/2 断) 黄灰色2.5Y 4/1	古墳時代初頭	
123	土師器有段残鉢	E24-E25 N2-N5	第9層	口縁部1/4残存	口径15.4 残高4.5	外内) 灰オリーブ2.5Y 6/2 断) 灰白色2.5Y 7/1	古墳時代前期	
124	弥生土器壺	E15-E16 N6-N7	第5面直上	胴部3/4残存	胴径22.5 底径6.0 残高17.0	全) 灰白色10YR 8/1 ～灰N 6/0	弥生時代後期後半	肩部にタタキ目を残す
125	弥生土器甕	E15-E16 N7-N8	第5面直上	口縁部1/4残存	口径20.8 残高5.3	全) にぶい黄褐色10YR 7/2 ～灰黄褐色10YR 5/2	弥生時代後期	
126	弥生土器直口壺	E13-N14 N4-N5	第5面直上	ほぼ完形	口径14.2 器高28.0 底径6.3	外) 橙色5YR 7/6 ～灰白色5YR 8/1 内) 灰白色5YR 8/2 断) 灰白色10YR 7/1	弥生時代後期	体部外面の叩き目を粗くナシ消し
127	弥生土器甕	E18-E19 N3-N4	第5面直上	口縁部完存	口径16.0 残高5.3	全) 灰白色2.5Y 8/1	弥生時代後期	
128	土師器直口壺	E13-N14 N5-N6	第5面直上	口縁部1/3残存	口径16.4 残高6.0	外内) 黒褐色2.5Y 3/1～灰黄色2.5Y 7/2 断) 灰黄色2.5Y 7/2～暗灰黄色2.5Y 3/2	古墳時代前期	
129	土師器甕	E15-E16 N6-N7	第5面直上	口縁部1/7残存	口径12.8 残高6.7	全) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代初頭	
130	土師器高坏	E14-E15 N7-N8	第5面直上	坏部1/3残存 脚部完存	底径13.8 残高14.5	外) 灰白色2.5Y 8/2 内断) 灰黄色2.5Y 7/2	古墳時代初頭	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
131	土師器小型丸底壺	E19 - E20 N1 - N2	第5面直上	口縁部1/4残存 胴部完存	口径8.4 胴径8.3 器高1.0	全) 残黄色2/5Y 7/3	古墳時代前期	
132	土師器甕	E13 - E14 N7 - N8	第5面直上	ほぼ完形	口径12.4 底径3.4 器高22.0	全) 灰白色7.5Y R 8/1 ~ 灰褐色7.5Y R 6/2	古墳時代前期	表面に加熱痕 製塩土器
133	土師器甕	E18 - E19 N3 - N4	第5面直上	口縁部7/10残存	口径12.3 胴径20.7 残高19.7	外断) 灰白色10Y R 7/1 内) 褐色10Y R 5/1	古墳時代前期	布留式甕
134	弥生土器甕	E11 - E12 N5 - N6	第6面直上	口縁部1/4残存	口径17.0 残高6.2	全) 灰白色10Y R 8/1	弥生時代後期	吉備系 上東式土器
135	弥生土器有孔鉢	E11 - E13 N6 - N7	第6面直上	底部残存	底径4.2 残高5.1	外内) 灰黄色2.5Y 6/2 ~ 黄灰色2.5Y 5/1 断) 黄灰色2.5Y 6/1	弥生時代後期	底部に穿孔
136	弥生土器大型鉢	E11 - N7.5	第6面直上	把手部残存	残高8.1	外) 褐色10Y R 5/1 ~ 4/1 内断) 灰白色5 Y 8/1	弥生時代後期	
137	弥生土器大口壺	E11 N6 - N7	第6面直上	頸部1/3	頸径16.1 残高5.6	外) 灰白色2.5Y 8/1 ~ 8/2 内) 褐色10Y R 4/1 断) 灰白色2.5Y 8/2	弥生時代後期	西部瀬戸内系 頸部に多条沈線の突帯を施す
138	弥生土器高坏	E20 - E21 N3 - N4	第6面直上	完形	口径23.3 器高15.7	全) 灰白色10Y R 8/1 ~ 褐色10GY 6/1	弥生時代後期	坏部内面に朱が付着 外面全面に二次焼成痕
139	弥生土器細頸壺	E14 - N5	第6面直上	完形	口径6.2 胴径14.6 器高23.1	外) 灰白色2.5Y 8/2 内断) 灰白色2.5Y 8/1	弥生時代後期	外面は細かい磨き 体部二分割成形
140	土師器甕	E25 - E26 N1 - N2	第6面直上	全体1/2残存	口径13.0 胴径16.4 器高17.3	外内) 灰白色2.5Y 7/1 断) 灰白色10Y R 8/1	古墳時代前期	布留式甕
141	土師器甕		第6面直上	口縁部7/10残存	口径12.4 胴径17.6 残高13.7	外) 灰白色2.5Y 8/2 内断) 灰白色2.5Y 7/1	古墳時代前期	布留式甕
142	土師器大口壺	E12 - E13 N7 - N8	第6面直上	上半部完存	口径11.7 胴径14.8 残高8.8	全) 灰白色10Y R 7/1	古墳時代前期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
143	土師器蓋	E10 - E11 N6 - N7	第6面直上	体部7/10残存	口径15.0 胴径22.0 残高12.7	全) 淡黄色2.5Y8/3	古墳時代前期	布留式蓋
144	土師器高坏	E25 - E26 N2 - N3	第6面直上	坏部2/3残存	口径17.4 残高5.7	外) 灰白色2.5Y8/1 内) 灰白色2.5Y7/1 断) 黄灰色2.5Y6/1	古墳時代前期	
145	土師器高坏	E25 - E26 N1 - N2	第6面直上	脚部完存	裾径11.4 残高11.8	全) 褐灰色10YR6/1	古墳時代初頭	
146	土師器広口壺	E25 N4 - N6	第6面直上	口縁部1/4残存	口径19.6 残高4.5	外内) にぶい橙色7.5YR7/3 断) 褐灰色7.5YR5/1	古墳時代前期	東四国系
147	土師器台付き鉢	E23 - E24 N2 - N3	第6面直上	台部完存	台径12.3 残高3.6	外断) 灰黄色2.5Y7/1 内) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代初頭～前期	
148	土師器小型丸底壺		第6面直上	口縁部1/5残存	口径9.8 残高4.4	外内) にぶい黄橙色10YR7/2 断) 暗灰黄色2.5Y5/2	古墳時代前期	
149	土師器小型丸底壺	E13 - E14 N4 - N5	第6面直上	口縁部1/2残存 体部完存	口径9.3 胴径8.5 器高7.9	外内) 灰白色2.5Y8/2 断) 灰白色5Y8/1 ～灰色N4/0	古墳時代前期	口縁内面と肩部に金属状の溶解物質が付着 体部に焼成後の穿孔あり
150	土師器小型丸底壺	E25 - E26 N1 - N2	第6面直上	口縁部3/4残存	口径10.2 胴径8.5 器高7.2	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	
151	土師器直口壺	E13 - E14 N5 - N6	第6面直上	口縁部完存	口径19.8 残高13.0	全) 浅黄橙色10YR8/3	古墳時代前期	
152	土師器直口壺	E9 - E11 N5 - N6	第6面直上	口縁部完存	口径21.6 残高8.2	外内) 浅黄色2.5Y7/3 ～灰黄色2.5Y6/2 断) 灰黄色2.5Y6/2	古墳時代前期	
153	土師器二重口縁壺	E9 - E11 N5 - N6	第6面直上	口縁部完存	口径23.4 残高9.9	外断) 灰白色7.5YR8/1 内) 褐灰色10YR6/1～4/1	古墳時代前期	
154	土師器直口壺	E13 - E14 N5 - N6	第6面直上	ほぼ完形	口径22.1 胴径30.0 器高36.0	外内) 灰白色2.5Y8/2 断) 灰色7.5Y4/1	古墳時代初頭～前期	体部外面に粘土巻き上げ痕が僅かに残る
155	用途不明水器	E11 - E12 N5	第6面直上	完形	全高14.7 全幅8.5 厚さ2.0			貫通した穴1ヵ所、未貫通の穴2ヵ所あり 表面に焼成痕あり

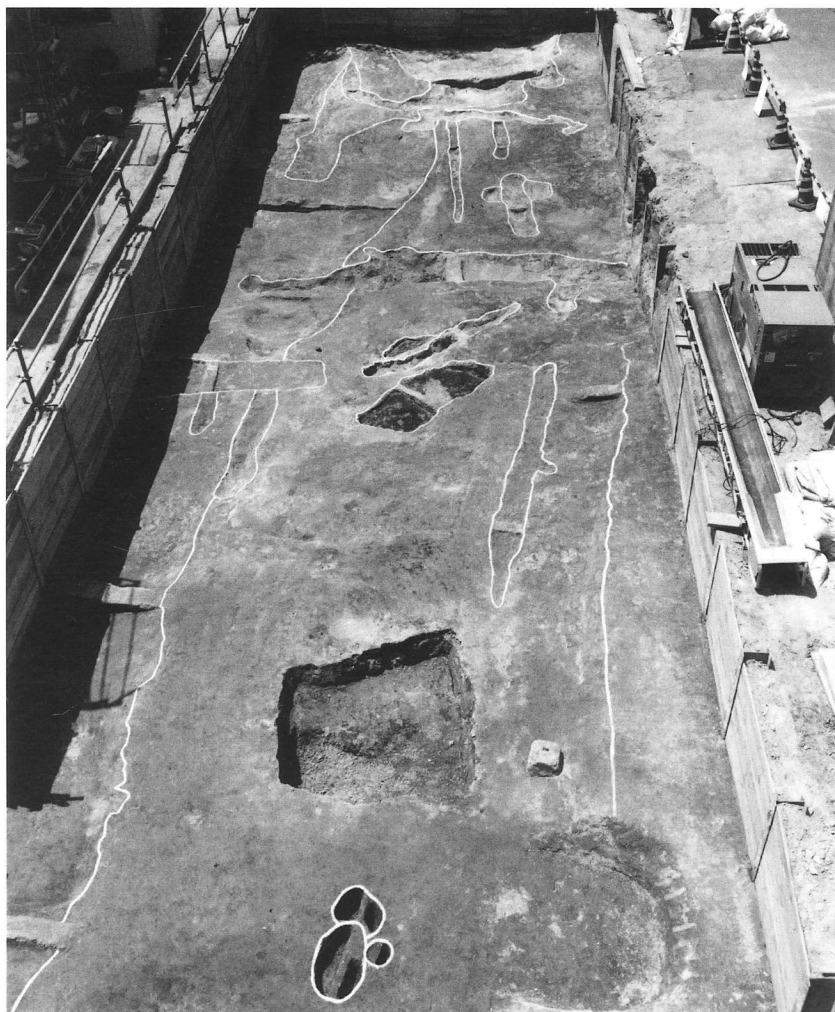
番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
156	弥生土器深鉢	E23 - E26 N1 - N5	第10層	口縁部 1/8 残存	口径22.3 残高13.3	全) 褐色5YR4/1 ~5YR3/1~2/1	弥生時代前期	河内系 口縁部外面に5状のへら描き沈線と、内外面に 円形浮紋 体部内外面は磨き
157	弥生土器鉢	T2	第10層	完形	口径18.8 器高9.0 底径4.9	全) 灰白色10YR8/1 ~褐色10YR5/1	弥生時代後期	体部外面はナズ鬚整 叩き目が僅かに残る
158	弥生土器 ミニチュア土器鉢	E18 - E22 N5 - N8	第10層	完形	口径2.5 底径1.4 器高2.9	外断) 灰黄褐色10YR6/2 内) 黒色2.5Y2/1	弥生時代	
159	ミニチュア土器高坏	E22 - E26	第10層	脚部片	残高2.0	全) 灰白色10YR8/2	弥生または古墳時代	4方向に刺突紋を施して孔を表現
160	弥生土器長頸壺	E23 - E26 N1 - N5	第10層	頸部 1/2 残存	頸径9.0 残高10.7	外断) 灰白色2.5Y8/2 内) 灰黄色2.5Y7/2	弥生時代後期	肩部に3状の線刻あり
161	弥生土器甕	E18 - E23 N2 - N4	第10層	口縁部 1/4 残存	口径17.6 残高4.5	外) 黒色2.5GY2/1 内) にぶい黄褐色10YR7/4 断) にぶい黄褐色10YR7/3	弥生時代後期	吉備系
162	弥生土器高坏	E18 - E22 N2 - N5	第10層	坏部 3/4 残存 脚部完存	口径12.3 器高7.8	外内) 明褐色7.5YR7/2 断) 褐色2.5YR7/6	弥生時代後期	
163	土師器器台	E23 - E26 N1 - N5	第10層	台脚部完存	幅径10.2 残高6.2	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代前期	3方に円孔あり 精製品
164	土師器小型丸底壺	E14ライン	第10層	口縁部 1/3 残存	口径12.6 胴径8.9 残高7.0	全) にぶい黄褐色10YR6/3	古墳時代前期	
165	土師器高坏		第11層	口縁部 1/3 残存	口径20.2 残高5.8	全) 灰白色2.5Y8/2	古墳時代初頭	
166	土師器甕		第11層	ほぼ完形	口径10.1 胴径15.4 器高23.3	全) 灰白色10YR8/1	古墳時代前期	表面に加熱痕 外面に粗いタタキ目を残す 数掘土器
167	土師器小型壺		第11層	体部完存	口径6.4 残高4.7	全) 灰白色10YR8/1	古墳時代初頭	体部外面は細かい磨き 肩部に竹管紋を施す
168	土師器直口壺		第11層	口縁部 1/6 残存	口径17.1 残高11.9	外) 灰白色10YR8/1 内断) 灰白色10YR8/2	古墳時代前期	
169	弥生土器高坏		第11層	口縁部小片	口径25.9 高残3.5	全) にぶい黄褐色10YR7/3	弥生時代後期	

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
170	土師器直口壺		第11層	口縁～体部完存	口径21.4 胴径30.0 残高25.5	外) 灰白色2.5Y 8/1 内断) 灰白色2.5Y 8/1～7/1	古墳時代初頭～前期	
171	土師器高坏		第11層	口縁部 1/4 残存	口径16.4 残高5.2	全) にぶい黄橙色10Y R 7/3	古墳時代前期	
172	土師器小型丸底壺		第11層	口縁部 1/4 残存	口径9.9 胴径7.2 残高6.2	全) にぶい黄色10Y R 7/2	古墳時代前期	
173	弥生土器鉢		第13層	口縁部 1/16 残存	口径22.6 残高4.6	外) にぶい褐色7.5Y R 3/3 内) にぶい褐色7.5Y R 6/3 断) にぶい褐色7.5Y R 4/2	弥生時代中期後半	口縁端部に刻み目
174	弥生土器広口壺	E 10付近 北壁	層位不明	口縁部 1/4 残存	口径23.2 残高11.9	全) 暗灰黄色2.5Y 4/2	弥生時代中期後半	河内系 生駒山西麓産の胎土
175	土師器小型丸底壺	E 12 北壁	層位不明	口縁部 1/3 残存	口径9.7 胴径8.4 残高4.0	外断) 灰黄褐色10Y R 5/2 内) 灰黄褐色10Y R 6/2	古墳時代前期	
176	土師器小皿	E 19 - E 20 北壁	層位不明	口縁部 1/16 残存	口径11.8 残高1.4	全) 浅黄色2.5Y 8/3	平安時代 (10世紀後半 ～11世紀前葉)	「ての字状口縁皿」
177		E 8 - E 14 N 6 - N 8	第6層	体部小片		外内) にぶい黄橙色 10Y R 7/3 断) 褐灰色10Y R 5/1	弥生時代または古墳時代 か	内面はナデ
178		E 22 - E 26 N 0 - N 3	第6層	体部小片		外) にぶい褐色7.5Y R 5/4 内) にぶい黄褐色10Y R 5/3 断) にぶい黄橙色10Y R 6/3 ～褐灰色10Y R 4/1	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面は板ナデ
179		E 22 - E 26 N 0 - N 3	第6層	口縁部片		外) にぶい黄橙色10Y R 7/2 ～褐灰色10Y R 6/1 内断) 灰黄色2.5Y 7/2	弥生時代または古墳時代 か	口縁部外面は横ナデ 内面に磨きの痕跡(磨減が著しい)
180	弥生土器高坏	E 13 - E 18 N 3 - N 5	第7層	口縁部片		外) 灰色5Y 5/1 内) 黄灰色2.5Y 5/1 断) 黄灰色2.5Y 4/1	弥生時代中期後半	口縁部端面に刺突紋 口縁部は横ナデ
181	弥生土器鉢	E 12 - E 13 N 5 - N 6	第8層	口縁部片		外) 灰白色5Y 7/2 内) 淡黄色2.5Y 8/3 断) 5Y 7/2～2.5Y 8/3	弥生時代	口縁部は横ナデ

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法 (cm)	色調	時期	備考
182	弥生土器壺	E 8 - E 14 N 4 - N 8	第 8 層	体部片		外) 灰白色 2.5Y 8/2 内) にぶい黄褐色 10Y R 7/2 断) 褐灰色 10Y R 5/1	弥生時代	体部に線刻紋様あり 外面に磨き 内面はナデ
183	弥生土器高坏	E 10 - E 12 N 6 - N 8	第 8 層	口縁部片		外内) にぶい黄褐色 10Y R 7/ 2 ~ 灰褐色 10Y R 5/2 断) 褐灰色 10Y R 5/1	弥生時代後期	口縁部外面は横ナデ 内面に縦方向の磨き
184	弥生土器大口壺	E 10 - E 14 N 8 付近	第 8 層	口縁部片		外内) 灰黄色 10Y R 5/2 断) 灰黄褐色 10Y R 4/2	弥生時代後期	河内系 口縁部は横ナデ
185	土師器高坏	E 18ライン	第 8 層	口縁部片		外) 灰白色 10Y R 8/2 内) 灰褐色 7.5Y R 6/2 断) 灰黄褐色 10Y R 6/2	古墳時代初頭	外面は横ナデ 内面に縦方向の磨き
186		E 10 - E 14 N 8 付近	第 8 層	口縁部片		外) 黄灰色 2.5Y 5/1 内) 暗灰色 2.5Y 5/2 断) 黄灰色 2.5Y 6/1	弥生時代または古墳時代 か	内面はナデ
187	弥生土器壺	E 10 - E 12 N 6 - N 8	第 8 層	体部片		外) 灰褐色 7.5Y R 4/2 内) 明褐色 7.5Y R 7/2 断) にぶい褐色 7.5Y R 5/3	弥生時代後期後半	近江系 体部に横描き直線紋・竹管紋・扇状紋 内面はナデ
188		E 23 - E 26 N 1 - N 5	第 8 層	体部片		外内) にぶい黄褐色 10Y R 6/ 3 ~ 灰黄褐色 10Y R 4/2 断) にぶい黄褐色 10Y R 7/3	弥生時代または古墳時代 か	内面はナデ
189		E 20 - E 22 N 4 - N 6	第 8 層	体部片		外) 淡黄色 2.5Y 8/3 ~ にぶい黄褐色 10Y R 7/3 内) 灰色 N 5/0 断) 灰白色 10Y R 8/2	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き 内面上半にナデと下半に縦方向のハケ調整
190	弥生土器壺	E 14 - E 16 N 6 - N 8	第 8 層	体部片		外内) にぶい黄褐色 10Y R 7/2 断) 褐灰色 10Y R 4/1	弥生時代後期後半	近江系 体部外面に横描き直線紋・円形浮紋(竹管紋)・ 扇状紋・列点紋 外面に磨き 内面に横方向のハケ調整
191	弥生土器	E 16 - E 18 N 8 付近	第 8 層	体部片		外) 灰白色 2.5Y 8/2 内) 淡黄色 2.5Y 8/3	弥生時代	外面は重弧紋叩き目の上からハケ調整 内面はハケ調整
192		E 14 - E 16 N 4 - N 8	第 8 層	体部片		外) 褐色 7.5Y R 4/3 内) 暗灰黄色 2.5Y 4/2 断) にぶい褐色 7.5Y R 5/3	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き 内面はナデ

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
193		E22ライン	第8層	体部片		外) にぶい黄褐色10YR 6/4 内) にぶい黄褐色10YR 6/3 断) 灰黄褐色10YR 6/2	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面はナデ
194		E10 - E14 N8付近	第8層	体部片		外) にぶい黄褐色10YR 7/3 内) にぶい黄褐色10YR 7/2 断) 褐灰色10YR 6/1	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面に粗いハケ調整
195		E13ライン	第9層	体部片		外断) 暗灰黄色2.5Y 5/2 ~灰黄褐色10YR 5/2 内) 褐灰色10YR 4/1 ~黒色10YR 2/1	弥生時代または古墳時代 か	外面に磨き、内面に横方向のハケ調整
196	弥生土器壺	E23 - E26 N1 - N5	第10層	体部片		外) 灰黄色2.5Y 7/2 内) 灰色7.5Y 6/1 断) 灰色5Y 6/1	弥生時代	体部に縞刻紋様を描く 外面に磨き、内面は縦方向のナデ
197	弥生土器壺	E18ライン	第10層	体部片		外) にぶい黄褐色10YR 6/3 内) 褐灰色10YR 4/1 断) 褐灰色10YR 6/1	弥生時代後期	近江系 外面に縞描き直線紋・波状紋・列点紋・扇状紋 内面にハケ調整
198		E12ライン	第6面直上	頸部~体部片		外断) 浅黄褐色10YR 8/3 ~褐灰色10YR 5/1 内) 黄灰色2.5Y 6/1 ~5/1	弥生時代または古墳時代 か	頸部に突帯体部に縞描き直線紋・波状紋・竹管 付き円形浮紋
199			第6面直上	頸部~体部片		外) 灰白色2.5Y 8/2 内) 灰黄色2.5Y 7/2 断) 浅黄色7.5Y 8/3	弥生時代または古墳時代 か	頸部に突帯と体部に縞描き波状紋、内面はナデ
200	弥生土器鉢	E18ライン	層位不明	口縁部		外断) 浅黄色10YR 8/3 内) にぶい黄褐色10YR 7/3	弥生時代中期	内・外面とも磨き
201	銚子状土製品	E4 - E12	第3層		4.1×4.8 厚さ0.9	全) にぶい黄褐色10YR 7/4		高熱を受けて灰白色・黄灰色・黒色に変色 表面に銅の溶解物が付着
202	土師器		第4面 土坑2	体部片		全) 褐灰色7.5YR 5/1		表面に黒色の付着物
203	土師器碗		第4面 土坑2	口縁部1/8残存	口径11.0 残高2.7	外) にぶい褐色7.5YR 6/4 内断) 浅黄褐色10YR 8/3		表面に黒色の付着物
204	銅鏡	E19.5 - N2	第4面 墓込み3	外縁部1/15残存	6×4.5 厚さ3.5		古墳時代前期	仿製鏡 人為的に破碎、高熱を受けて湾曲
205	銅鉢	E16.5 - N5.5	第10層	完形	全長4.8 全幅1.6 厚さ3.5		弥生時代	表面に黒色の付着物 有茎式銅鉢

番号	器種	出土地区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
206	銭貨「康定元寶」		第2面 ビット2	完形	直径2.43 厚さ0.18		中国・北宋代 (1040年始鑄)	
207	銭貨「政口口寶」		第2面 ビット2	2/5残存	厚さ0.1			政和通寶か 中国・北宋代(1111~1117年鑄造)
208	銭貨「元豐通口」		第3面 ビット3	1/2残存	厚さ0.09			元豐通寶か 中国・北宋代(1078年始鑄)
209	銭貨「元豐通寶」	E4-E12 N6-N8	第4-2層	完形	直径2.5 厚さ0.16		中国・北宋代 (1078年始鑄)	
210	石鏝	E12-E14	第3層	一部欠損	器長4.9 器幅3.7 器厚1.0			サヌカイト
211	スクレイパー		第2面 落込み2		器長4.7 器幅2.8 器厚1.1			サヌカイト
212	石核	E18-E22 N0-N3	第6層		器長4.8 器幅5.7 器厚1.7			サヌカイト
213	石鏝	E20-E21 N6-N7	第10層	一部欠損	器長4.8 器幅1.3 器厚0.6			サヌカイト 尖基鏝
214	スクレイパー	E22-E26	第4-1層	一部欠損	器長3.3 器幅3.3 器厚0.9			サヌカイト
215	サヌカイト原石	E23-E26 N1-N5	第10層		器長6.8 器幅5.4 器厚1.6			
216	土師器甕	E14ライン	第9層	口縁部2/5残存	口径13.4 残高19.3	外) 黒褐色10YR 3/1 内) 褐灰色10YR 4/1 断) 褐灰色10YR 6/1	古墳時代前期	外面肩部に横方向のハケ調整 内面はヘラ削り 布留式甕 図面提示なし
217	土師器壺	E13ライン	第5層	口縁部1/2弱残存	口径12.0 残高18.4	外) にぶい黄褐色10YR 7/2 ~にぶい橙色5YR 6/3 内) にぶい黄褐色10YR 7/2 断) 褐灰色10YR 4/1	古墳時代前期	体部外面下半部はハケ調整 体部内面は板ナデ 図面提示なし
218 ~ 224	土師器		第4面 土坑2	体部片		外) 浅黄褐色7.5YR 8/4 内) 浅黄褐色7.5YR 8/3 断) 灰白色7.5YR 8/2		表面に黒色の付着物 図面提示なし



全景（東から）



西半部（南から）



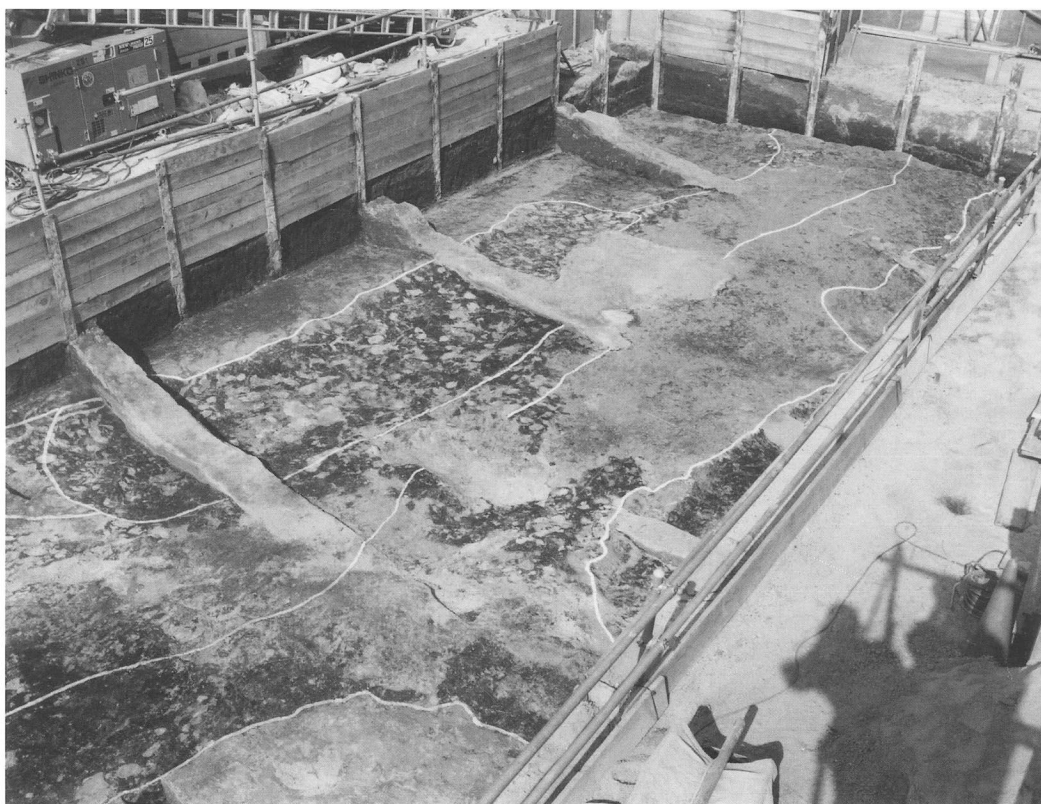
全景（東から）



西半部（南から）



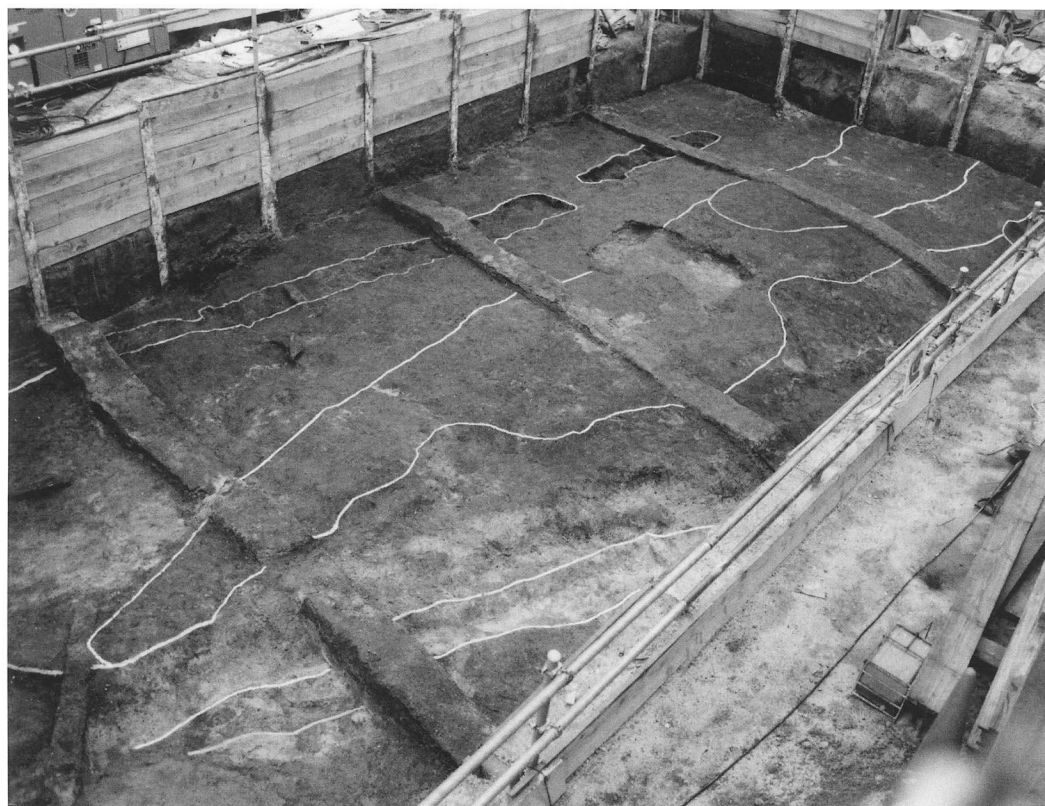
全景（東から）



東半部（南から）



全景（東から）



東半部（南から）



全景（東から）



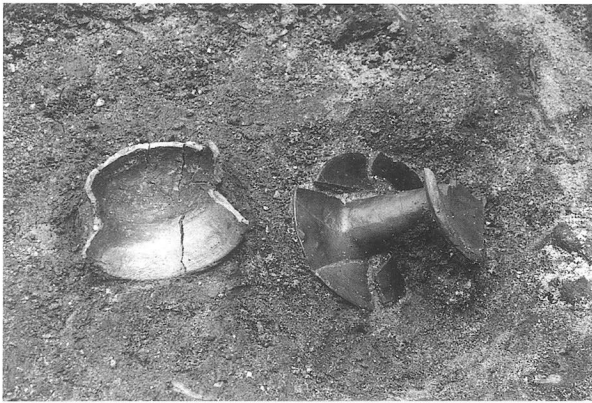
土器・木集積（北から）



弥生土器高坏(138)



弥生土器細頸壺(139)



土師器群



船形木製品(101)



自然木と弥生土器群



自然木根



小型壺(167)



金属状容解物が付着した小型丸底壺(149)



弥生土器壺(126)



弥生土器甕(103)



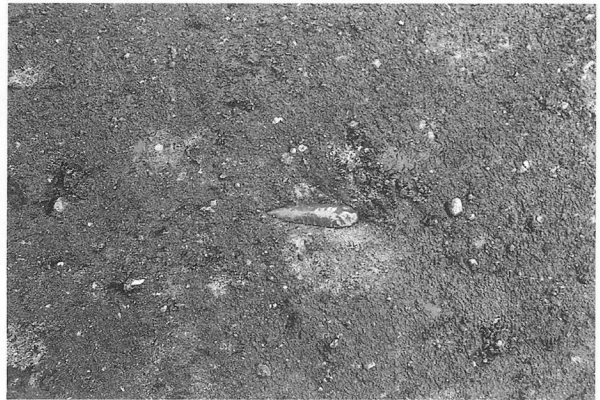
弥生土器・土師器群



土師器壺



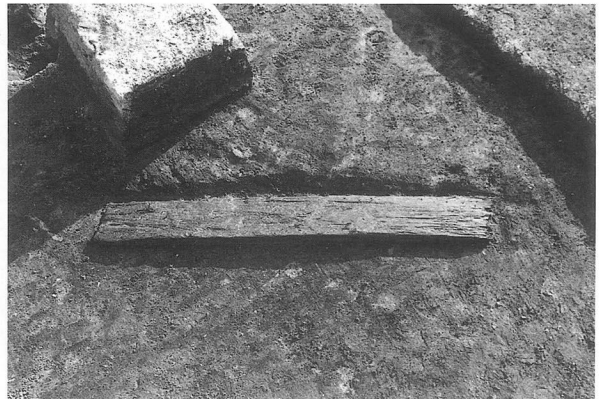
銅鍬(205)



石鍬(213)

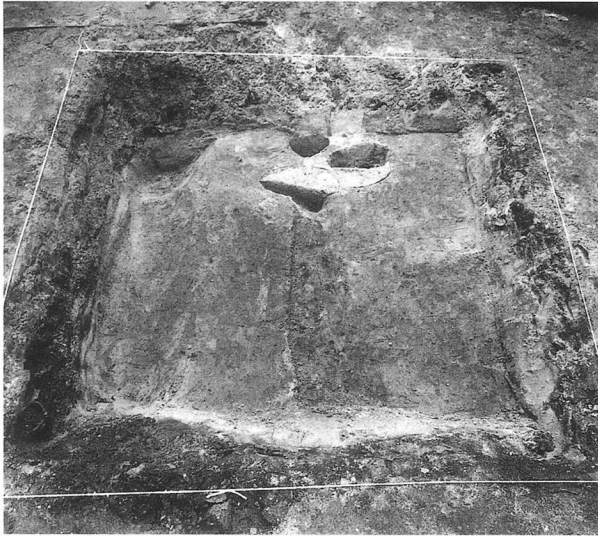


敷物状有機物

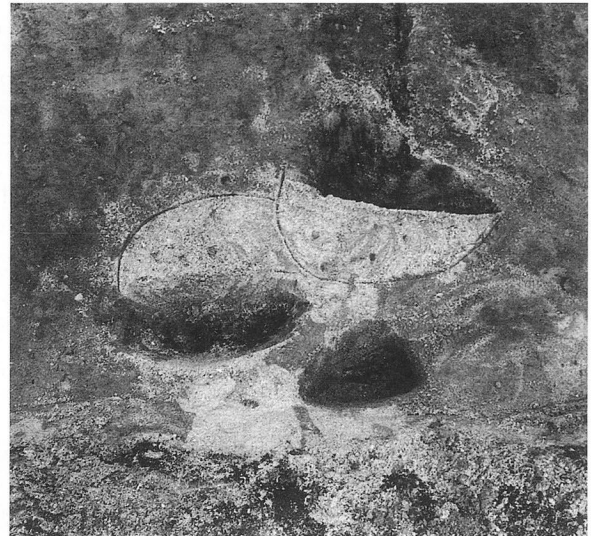


板状加工木材

図版 8
グリッド部各遺構面



第7面全景(東から)



第7面ピット群(西から)



第8面全景(南から)



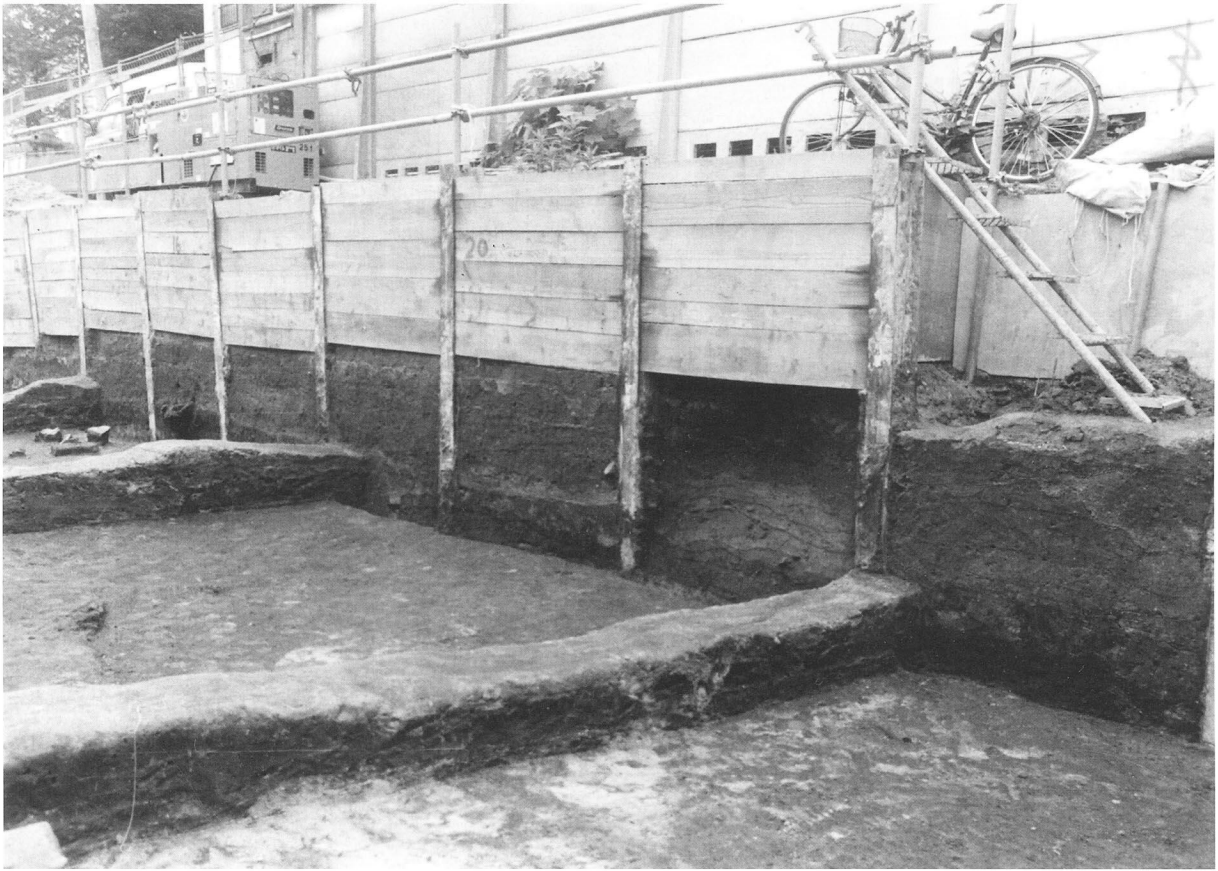
第8面全景(西から)



第9面全景(西から)



第9面ピット(南から)



北壁断面(下半部)



東壁断面(下半部)



西壁断面に現れた噴砂(地震痕跡)



グリッド部北壁断面



ショベルカーによる表土剥ぎ



遺構検出作業(第2面)



遺構掘り(第4面)



平板による遺構実測(第4面)



遺物出土状況の写真撮影(第6面)



遺物出土状況の実測(第5・6面)

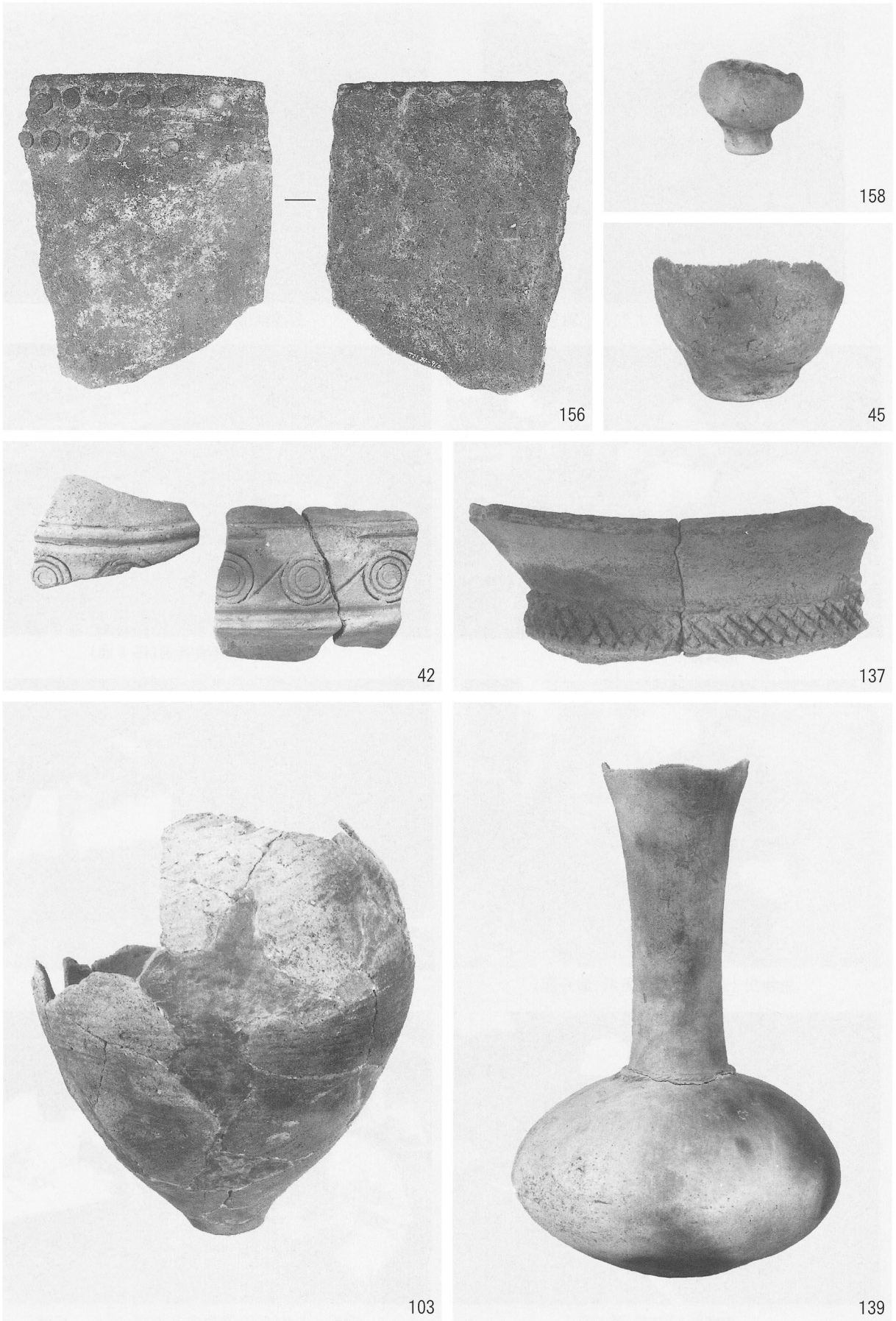


遺構断面実測(第6面)

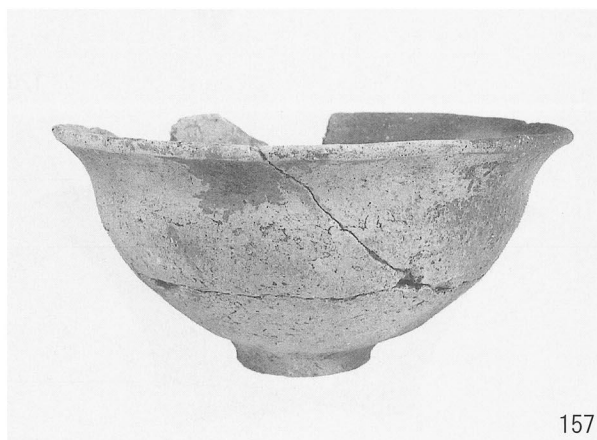
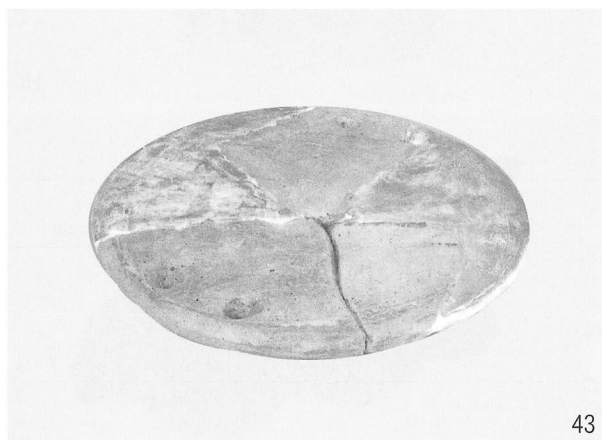
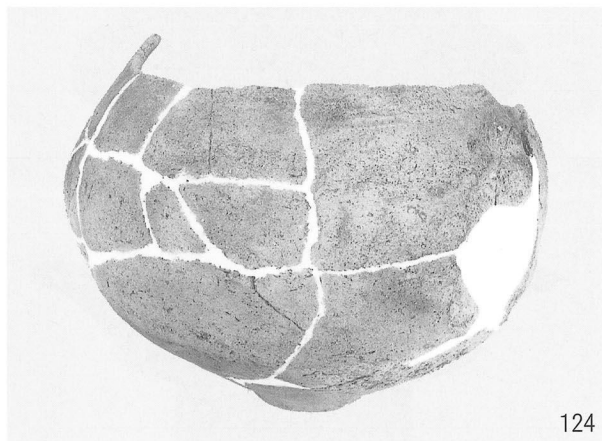
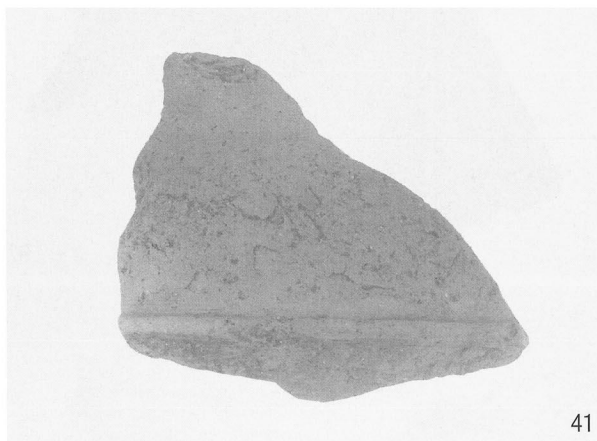
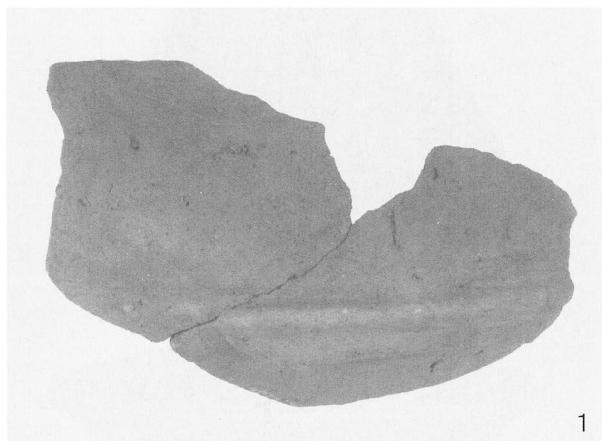


記録しながらの遺物取り上げ(第5・6面)

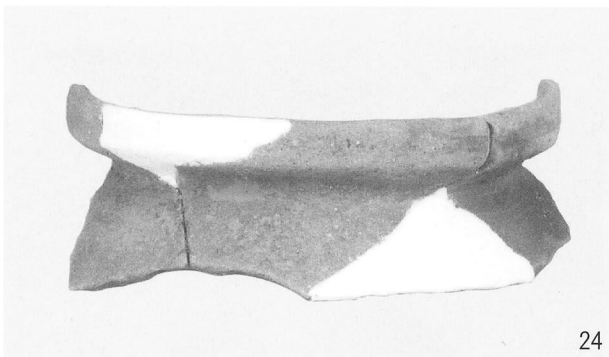
図版12 弥生土器(1)



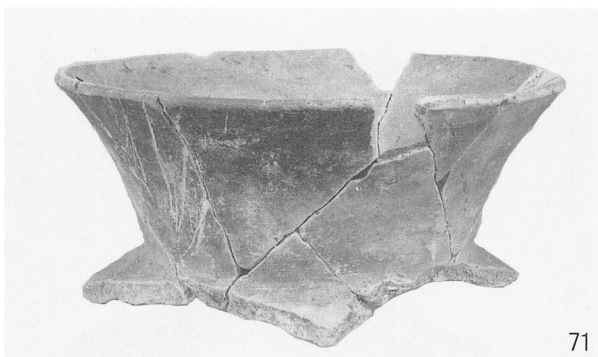
42・45：第8層 137・139：第6面 103：第9層 156・158：第10層



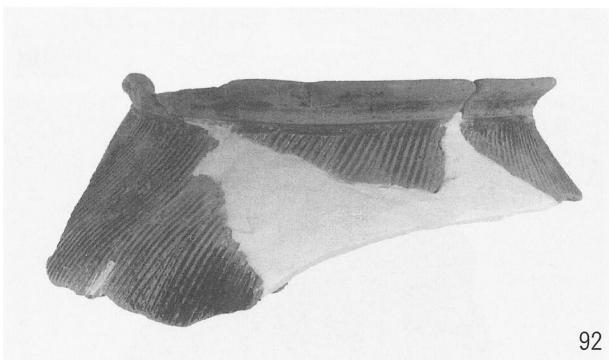
1 : 第1面落込み1 41・43 : 第8層 124 : 第5面 104 : 第9層
162・157 : 第10層 174 : 層位不明



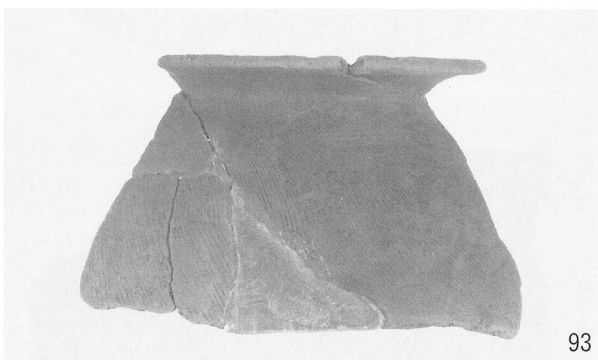
24



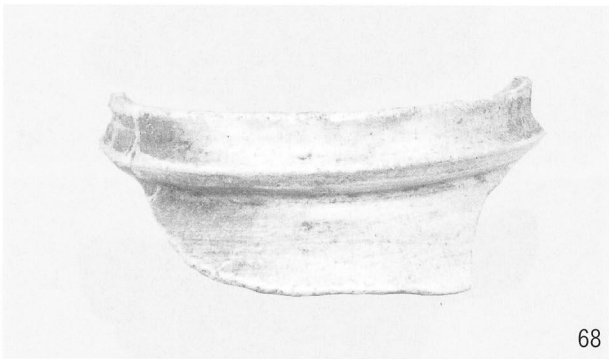
71



92



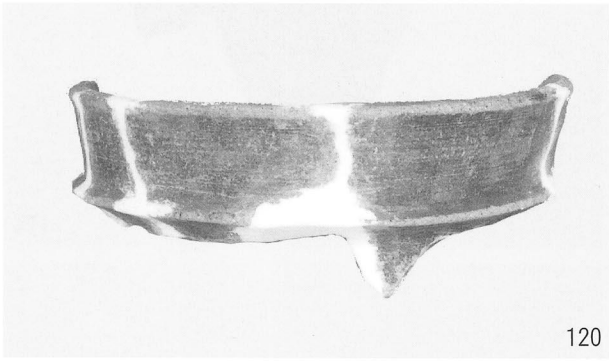
93



68



127



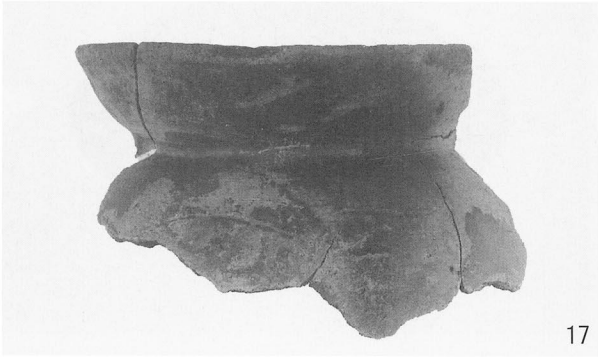
120



153

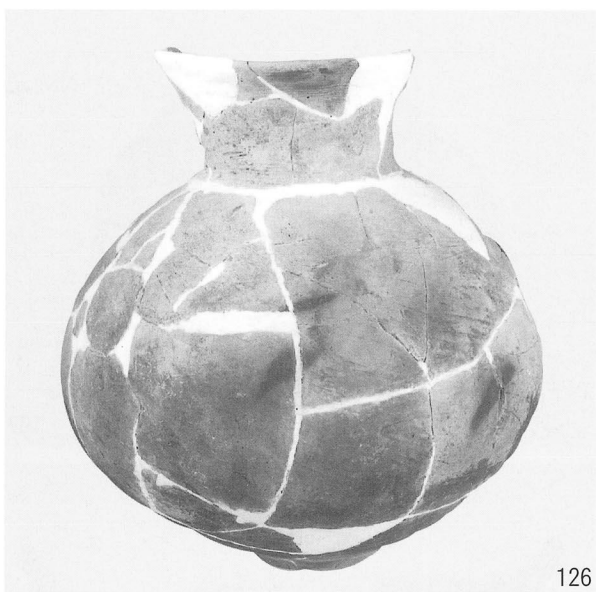
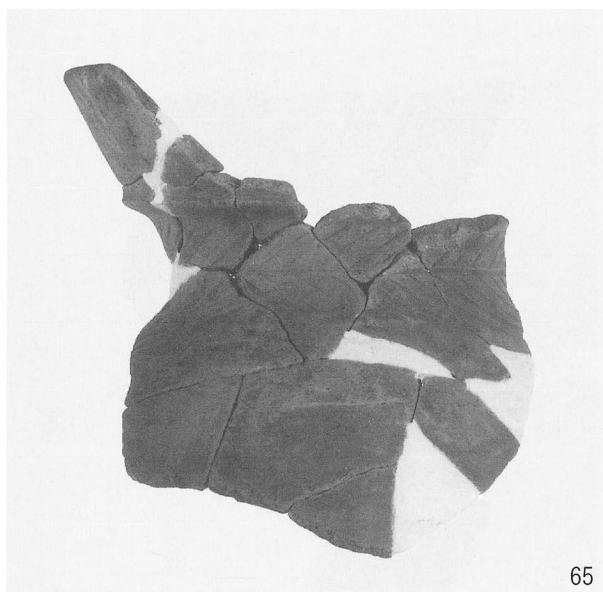


152



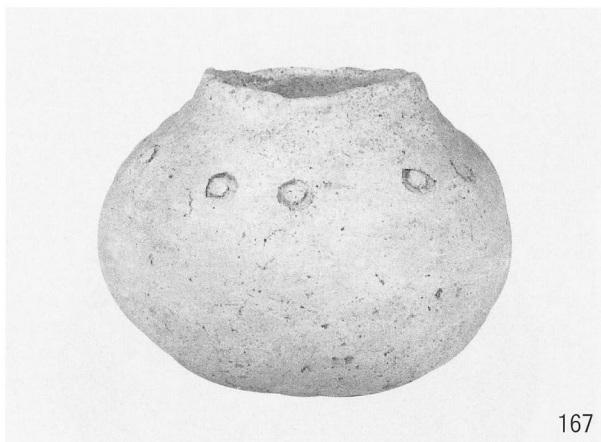
17

24: 第6層 71・92・93・68: 第8層 127: 第5面 120: 第9層
 152・153: 第6面 17: 第7面落込み5



65 : 第8層 216 : 第9層 126 : 第5面 141・142 : 第6面 170 : 第11層

図版16 古式土師器(3)



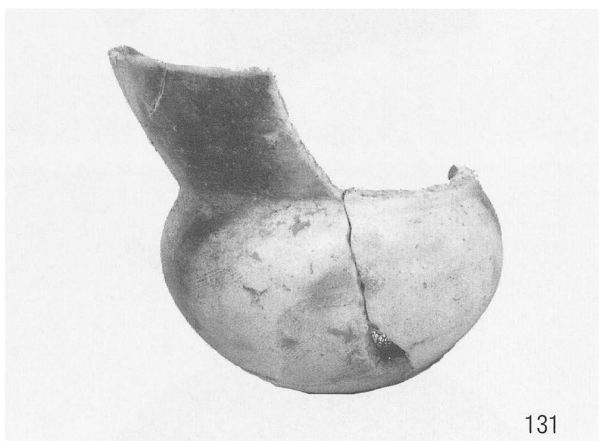
167



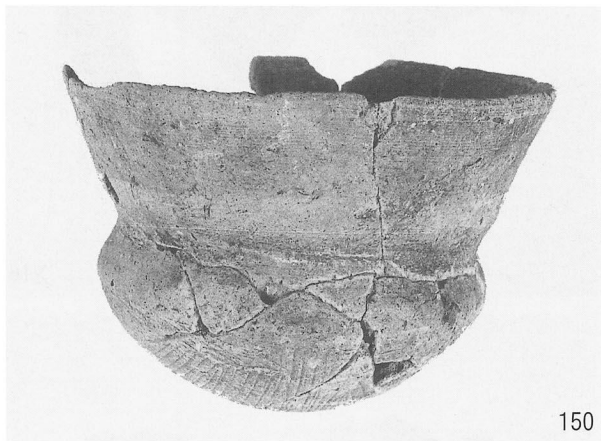
105



81



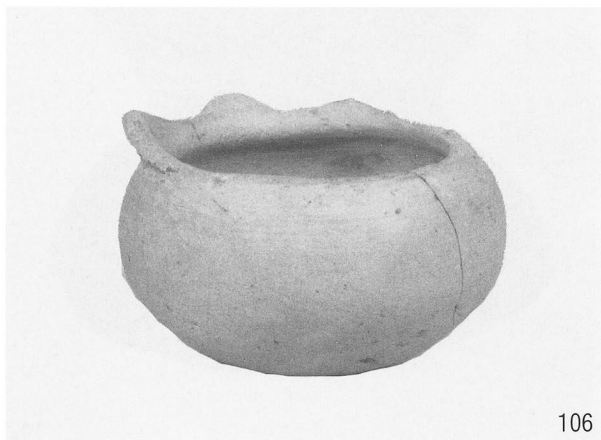
131



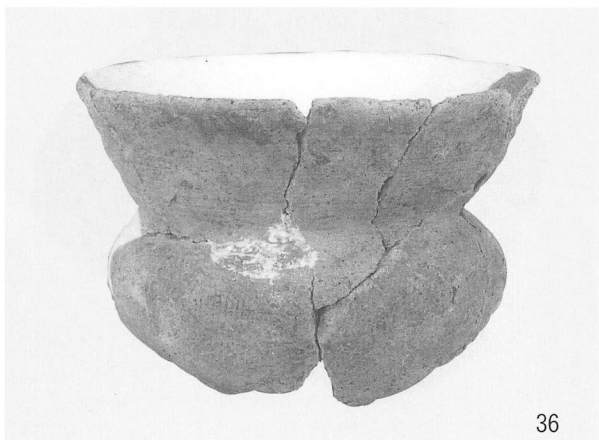
150



107

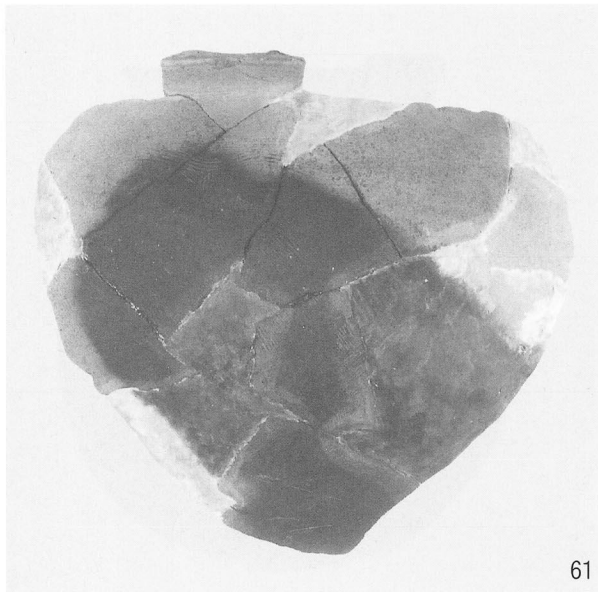
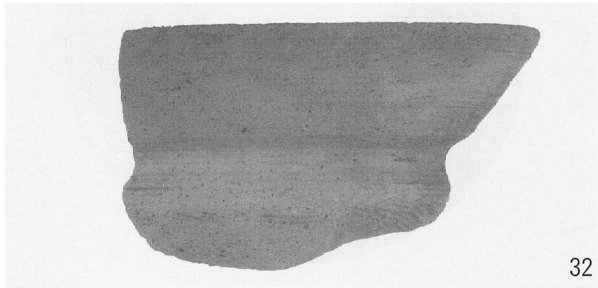
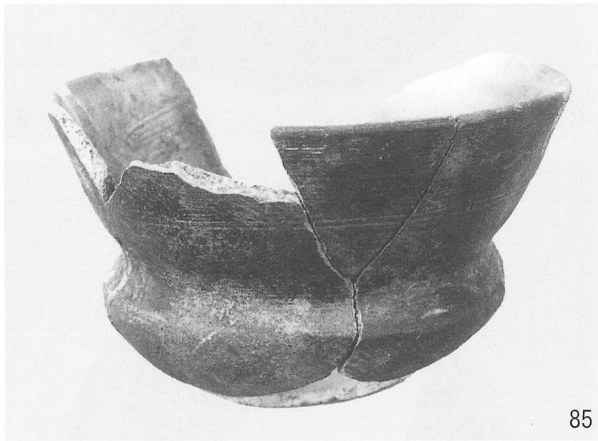
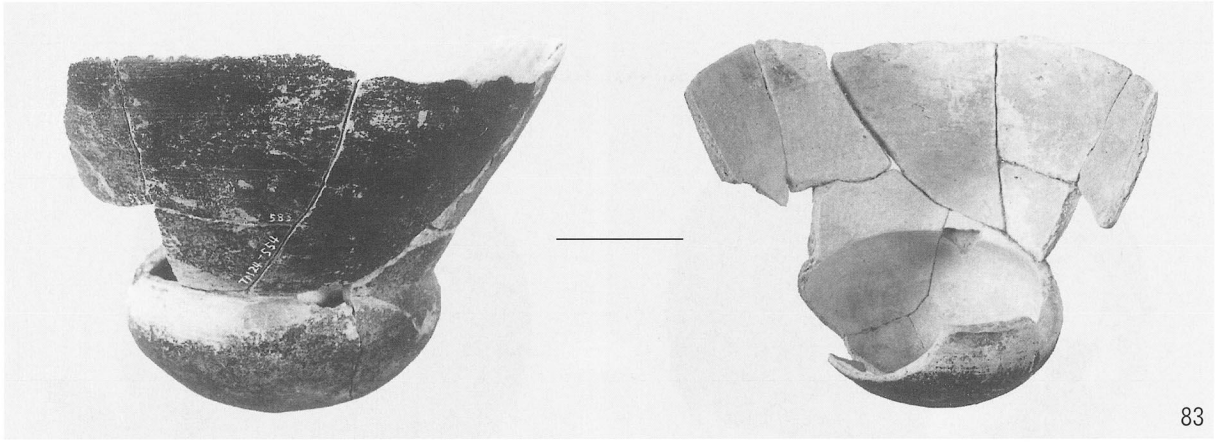


106



36

36 : 第7層 81 : 第8層 131 : 第5面 105~107 : 第9層
 167 : 第11層 150 : 第6面



32 : 第7層 83・85・61・62 : 第8層 121 : 第9層 149 : 第6面